



cosmic
repeat
proverbs



Cosmic Repeat Proverbs #1

地球という惑星は、とても複雑で奇妙だ。私たちの知る有機的な生命が存在できるハビタブルゾーンに、水という完璧な媒介が過激な流動を繰り返す中で、細胞が生まれ、植物が生まれ、動物が生まれ、人類が生まれ、文明が生まれ、そして今、私はタイプライターで文章を打っている。混沌とした世界から対称性を理解する“機構”が作られたのだから、それを“奇跡”と呼ぶのも無理はない。しかし、本当に・・・奇跡なのだろうか？

46億年前に地球が生まれ、40億年前に生物が生まれ、5億年前から植物や動物は陸上へ進出した。そこからは指数関数的な増加で、700万年前に猿が二足で歩くようになり、150万年前に火を自在に操るようになり、知恵を手に入れた人類は10万年前から劇的な進化を遂げた、が・・・奇妙だ。1万年前に農業へ辿り着いたと云われている。それを基に線を描くと——何故か、歪なグラフになってしまうのだ。

その間は本当に何の発明もなかったのか？ 古来から未確認飛行物体が世界各地で観測されるのは何故？ 月面に着陸したアポロは司令塔との通信を遮断した際に何をした？ コラ半島で行われた地球の地殻深部調査が中止になった本当の理由は？・・・陰謀論に振り回されては、答えは見つからない。今の人類は、変わらず“科学”という最も優れた手段で文明を支えている。

少したく話を換えよう。皆は“カウンターアース”をご存じだろうか？ 太陽を公転する地球の軌道上に存在すると仮定された、地球と同様の惑星である。常に太陽の裏側に隠れている存在なので長らく真偽は不明だったが、物理学を発達させた人類は方程式を用いて地球が唯一の惑星であることを証明した。・・・本当に存在しないのか？ 本当に——存在“しなかった”のか？

今の人類が己を認知する前、太陽系には2つのハビタブル惑星が存在した。

一つは、私たちが暮らす自然に富んだ惑星。月の満ち引きで生命が混ざり合い、多様な共存関係が構築された——古の人類はここを《フォルタグルンドゥ》と呼んだ。

一つは、海水と雨雲に包まれた群青の惑星。僅かな陸地に生命が芽生えることはなく、しかし人類が開拓した——そこは《ティロディアクボ》と呼ばれていた。

今の人類が知る由もない、壮大で複雑な歴史が存在する。2つの地球には、科学を扱う人類と魔法を持つ人類が存在した。環境に依存する言語を用いて高度な歴史を語り継ぐことは難しい。しかし、宇宙の様々な事象を共通の言葉で綴ることができる今、私はタイプライターで物語を記すことにした。これは、永久の命で空白の10万年を生き続けた私が発信できる、唯一の警告かもしれない。この歴史は——嘗ての諺にも綴られている。

【真実を知覚しない人類は、同じ歩みと過ちを繰り返す。】

Cosmic Repeat Proverbs #1

この物語はフィクションです。しかし、それを証明する要素も存在しません。

Cosmic Repeat Proverbs

#1

Created by Capa Котова

Cosmic Repeat Proverbs #1

Cosmic Repeat Proverbs #1

P 0 0 1 ~ P 0 0 2

O P. 魔女は科学を知っている

P 0 0 9 ~ P 0 2 1

0 1. 繰り返される悲劇

P 0 2 3 ~ P 0 3 5

0 2. 意思を秘めた賢者

P 0 3 7 ~ P 0 4 9

0 3. 闘争の意味は上書きされる

P 0 5 1 ~ P 0 6 3

0 4. 受け継がれる使命

P 0 6 5 ~ P 0 7 7

0 5. 単調な事象と混沌の世界

P 0 7 9 ~ P 0 9 1

0 6. 歴史を紡いだ遺産

P 0 9 3 ~ P 1 0 5

0 7. 形而の破壊と再生

P 1 0 7 ~ P 1 1 9

0 8. 未知という監視者

P 1 2 1 ~ P 1 3 3

0 9. 陰影に隠れた曖昧な光源

P 1 3 5 ~ P 1 4 7

1 0. 平安と呼ばれる戦争の間

P 1 5 1 ~ P 1 5 2

E D. 欺瞞という真実の選択肢

Cosmic Repeat Proverbs #1

「苜蓿苕苕！ 覬芽苕苕郭鎬闌苕苕苕！」

「t—降s——！ 氣—d—— 私たち—指z——g——い！」

青空が見える。陽射に照らされた身体は不思議と生気が漲っており、微風に吹かれた草木の揺らぐ音、そして大人たちの叫喚が飛び交っている。何の言葉なのか理解できず、しかし考える間もなく、全ての音が一瞬にして消え去る。月が映える青空には、赤い液体と赤い彗星が飛び交っている。

その景色が恋しいわけでもなく、なぜか悲しい。そう思うと青空が段々と遠く離れていき、やがて自分が闇の中へ落ちていくことに気が付く。キャンバスに描かれたような四角い青空へ手を伸ばすが状況は変わらず、一方で得体の知れない恐怖が徐々に視界を覆っていく。

元に戻って、その時に戻って——私が——この私が！

「——ア！ リクレア！・・・大丈夫かい？」 「・・・ママ。」

「・・・また、あの夢かい？」 「・・・うん。」

私は今日も魘されていた、何百回も、何千回も繰り返して、そこで非力な自分を感じる夢を。何の感覚も感じられず、何か意味を感じる夢を。

「ほら、朝食ができたよ。着替えて降りてきな。」 「・・・うん。」

階段を下りる母親を後目に布団を捲り上げ、心地良い紺色の服を体に巻き付け、胸と腰に帯革を締め付け、鏡に映った眠そうな自分の頬を叩き、その青白い髪を結ぶ。

今日も何一つ変わらない一日が始まる。——心の中では何か、刺激を求めている。それは「好奇心」と呼ばれ、それを持った少女は、昨日と何かが異なる一日を探し始める。

01. 繰り返される悲劇

「レア、その卵を入れてくれるかい？」 「はいはい。」

今日は鶏の機嫌が良いらしい。籠から取り出した2個の卵を台所の角で叩き、ママが両手で熱しているフライパンへ、ママの背後から私も、両手で同時に黄身と白身を垂らしていく。

「今日は上手く割れたねえ。」 「へへっ。」 「・・・カルボ！ 食卓で火炎を出さないの！」

「大丈夫だって、制御しているから！」 「そうやって先週も草鞋を黒焦げにしたでしょ！」

右手の人差し指から小さな火炎を出している白髪の馬鹿をルジャカルボという。どうも、兄は思春期の私よりも反抗心が強いらしい。嗚呼、また小声を言いながら火力を強くしている・・・。

「ラマ、デイル。ラマ、デイル。ラマ——」 「聞こえているよ！」 「ラマ、ティン・・・リハ

ブッド！ これやらないと火力が分からなくなるんだよ！」 「仕事場に向かう途中でやればいいじゃない。」 「忘れるもん！」 「何で忘れるのよ！」 「何か忘れちゃうの！」

母と妹に挟まれる兄は苦し紛れに訴えるが、どうも歩き出すと全てを忘れて他事を考える癖があるらしい。・・・鶏よりも記憶力が低いんじゃないか？

「レアは何か掴めたか？ 魔法。」 「・・・ううん。」 「何なんだろうな、レアの能力は。」

「やっぱり・・・《無能》なのかな。」 「そんな、何か持っているさ。父さんが特殊な人だったから、レアもそれを受け継いだんだよ。」

私は、魔法が使えない。——基本的に魔法は家族の性質を受け継ぎ、大抵は母親の能力を、たまに父親の能力を、そして稀に《無能》として生まれてくる。

全ての呪文が記された書物から似通った呪文を唱えることで自身の能力を探し出すが、私の場合は無関係な呪文を片端から唱えても、何一つ起こらなかった。呪文には文法的な規則性があるため推測して新たな呪文を生み出すことも可能だが、その組み合わせは夜空に浮かぶ星の数よりも多いと云われている。その可用性は・・・まだまだ低い。

「そうねえ・・・もしかしたら私みたいに呪文は必要ないかもねえ。」 「うーん・・・そんな、神童じゃないんだし・・・。」

魔法は、呪文を唱えなくても使えたりする。ママ曰く、頭の中で感覚的に呪文を操作するらしいが・・・それも大抵は魔法を使い続けた熟練の能力者だけであり、それ以外は稀に、才能を持った子供が発揮するぐらいである。

とにかく、15歳の《無能》に課される仕事は存在しない。この町では能力が途絶えることを懸念して《無能》の結婚も推奨せず、代わりに巫女や学者といった頭が必要な職を勧めてくる。しかし、そんな世間の押し付けなど無視！ 兄よりも先にパンと目玉焼きを食べ終えた私は勉強ではなく冒険へ向かうのだ。もちろん、町に貢献するためにも。

「御馳走様。それじゃ、行ってくるね。」 「レア、最近やってきた《海の民》には気を付けなさ

いよ？」「最近って・・・10年以上も前の話じゃん。一度も見たことないし。」

「それが、つい先週に隣町の奴が《海の民》を見たらしい。服装が証言と一致した。」「・・・本当に、悪い人たちなの？」「・・・。」

この地に《海の民》がやってきたのは、私が生まれて間もないときの話。彼らへ妙な親近感を抱くのも、周辺地域の住人にしては珍しく古典的な魔法が使えず、その代わりに道具へ魔法を付与する民族だったらしい。彼らの起源や言語は今も不明だが、会ってからスポンジのように私たちの言語を習得して、何時しか生活を共にして、気付けば友好が深まっていた・・・とか。

「いいかい？ 厄災っていうのは人間が忘れたときに再び訪れるものだよ。彼らは人の心に入ってから欺くんのだ。・・・どんなに優れた観察力を持っても、その真核までは絶対に辿り着けない。彼らを信じていた・・・貴方たちの父親も・・・。」「・・・。」

パパは戦士だった。ルジャカルボのように体の表面を黒色に硬化させる能力を持つ無敵のパパは、危険が伴う戦士に適任だった。しかし・・・それでも《海の民》が持つ魔法には勝てなかった。放たれた一瞬の攻撃で、多くの兵隊が全滅した。今の私は・・・そんなパパが残した最後の宝物——

「逆に、私たちが《海の民》を見つければいいじゃない！」「あ、コラ！ 待ち・・・どうして父親の教訓を理解してくれないのよ。」「そういう年頃じゃない？ まあ、あの強気な性格は父さんに似たのかもね。」「・・・。」

1 階の会話を気にも留めず、帯革にペンと紙を括り、肩に鞆を掛け、必要な装備を確認したらベランダから麻縄を伝い外へ脱出する。そろそろ、色褪せた指なし手袋を新調をするべきだろうか。

湿気のない淡い青空、燦々と揺らめく太陽、その地に足を下ろし、眠そうな住民を避けて住宅街を南へ駆け抜ける。突き当りで放置された街壁の穴を潜り、再び草原を同じ速度で駆け抜ける。垣根に靠れる牛や羊が挨拶をしたり、納屋の陰で一休みする庭師が手を振ったり。そして辿り着いたのは、開拓されていない小山の麓。森の境界に聳え立つ一枚岩の上には、変わらずパディマティスとマエレが待っていた。

「これで揃ったな。忘れ物はない？」 「うん。」 「大丈夫。」 「——最近はずれ続きで、運がいいな。」 「この快晴も、誰かの魔法なのかな。」 「そんな魔法は存在しないって、子供でも分かるぜ？」 「もう、パディは夢がないなあ。」 「存在したら、そいつが王だろうに。」

私は鞆から折り畳まれた紙を取り出し、それを両手で広げる。何処へ行こうか、何処を拡張しようか。そんな予定を—— 私たちが3年間を掛けて作成した地図を、皆で眺めながら考える。

「今日は南西の森で地形の概算でもするか？」 「そうね、昨日は陽が落ちて無理だったけれど、《三ツ子山》の峠まで一直線に行けば今日こそは、先の洞窟を調査できるかも。」 「そろそろ、野宿の許可を親に貰わないとなあ。これ以上は日帰りだと、本格的な作製は厳しいでしょ。」 「確かに。」 「俺の親父は門限に厳しいから・・・限界かもしれない。」 「えー。」

パディマティスは方角や水平角度、座標を感覚的に数値化する能力を持っており、彼がいなければ地図を作れないどころか、下手すれば永遠に森林を彷徨うことになる。赤髪と鋭い目付きを持つ彼は私よりも度胸があるも、大抵は調子に乗ることで痛い目を見るのは言うまでもない。

「いや、実はそれ以外にも・・・ここ最近感覚が曖昧になっているんだ。何というか・・・方角

がダブったり曲がったりするんだ。」 「そんな、魔法って衰えるの？」 「最初はそう思っていたんだが、母親も俺と同じスランプに陥っているらしい。」 「・・・つまり？」 「・・・俺が知ってるよ。何か、方角の基準が狂い始めているんだ。逆にマエレは、問題ないか？」

石を握っている彼女は特定の物質を発光させる能力を持っており、特に暗い森林や洞窟では彼女が活躍する。しかし彼女が持つ魔法と臆病な性格の相性は最悪であり、そういう状況では私たちが彼女の背中を押さなければならぬ。ちなみに、2人の魔法は常に解放されており呪文は不要だとか。

「特に異常はないけれど・・・それが本当なら行きたくないよ・・・私なんて方向音痴なんだから・・・」 「しっかりとしてくれ、そろそろ土地勘も身に付いただろうに。」 「大丈夫、先週も町で迷子になった！」 「誇らしげな顔をするな。」 「全く、何のための地図なのか・・・。」

一方で《無能》の私は、地図の書記と計算を担当している。勉強は嫌いだが数術は妙に得意らしく、それが唯一無二の能力として役に立っている。この体力や運動神経も、魔法が使えない私が獲得した冒険の賜物だと信じている。肩身が狭い《無能》だろうと——私は挫けない。

「・・・よし、南西の森と洞窟の探索でいいな？」 「OK。」 「・・・うん。」 「太陽が真上に来たら引き返す。行き帰りの途中に例の泉で休憩を挟もう。」 「・・・久しぶりに山羊の群、見るかな。」 「・・・山羊肉、食べたくなってきた。」 「た、食べ物じゃないですよ!？」

私と2人は茂みを掻き分け、斜陽が零れる薄暗い森の中へ入っていく。マエレの拳に握られた鉱石、それが照らす一枚の地図は、何れ何か役に立つのだろうか。ここに描かれて“いない”世界が私たちの足を動かし、そして、地図が完成したとき——私たちは何を思うのだろうか。



「P。」——こちら、チームC。水源補給箇所に3人の民間人を確認。《エソテルボ》に住む子供と思われる。どうぞ。」『K。』——こちら、仮説本部。了解した、そちらの状況と彼らの行先を定期的に報告してくれ。子供とはいえ、村人が漏れなく「能力」を持っていることを忘れるな。』

「P。」了解。・・・あ、子供たちが小鹿との接触を試みている。」『K。』——もしかして前に俺が狩ったサンプルは親子か?」「P。」——そうかも・・・心苦しいなあ。」『K。』まさか、動物の心を読み取る能力も存在するのか?」「P。」——事前調査の報告だと心理に関する能力は未確認だから大丈夫だよ。多分。」『K。』——全く、おっかないぜ。』

子供たちは呑気に水を飲んだり、容器に補充している。周辺に家屋や人工物は存在しないが・・・何を目的に訪れた? 装備からして狩猟ではなさそうだし・・・探検? 待てよ、彼らが広げている地図は・・・。

「P。」——こちら、チームC。彼らは地図を広げている。武器の代わりに古典的な道具を所持しており、作製を目的に来たと予想される。どうぞ。」『K。』——こちら、仮説本部。了解した、部隊は痕跡を残さないよう注意していると思うが、もしも気付いた素振りを見せたら報告を頼む。』

「P。」了解。・・・あ、小鹿に地図の角を齧られている。」『K。』——平和だな。』「P。」・・・この平和が続いてほしいよ。・・・どうして、僕たちは「第3調査隊」として派遣された? この後

に起こる悲劇と一緒に。」『セ、セ、セ、セ……【無知が幸せを見て、賢者が幸せを築く】ことを忘れるな。今更、現場の俺たちには選択権はねえよ。』「……。」

確かに、これは自分が選んだ道だった。ディスプレイに投影された《フォルタグルンドウ》は一面が緑で溢れており、それは楽園を眺めているようだった。自分は潜在的に楽園を求めていたのか、それとも楽園に似して異なる《ティロディアクボ》の生活から逃げたかったのか、大木の上に座っている今の自分には、どうでもよかった。

ここを取り壊すのではなく、ここを手に入れるのではなく、ここで共生したい。しかし、人類は既に獲得したヒエラルキーを捨てられない。例えば自分が個人として《フォルタグルンドウ》に永住する道を選ぶとも、組織としての利益を優先する集団の意思は変わらない。

そもそも、永住は不可能だと理性が訴える。ここに適応するためのワクチンは消耗品だし、ここが後に“改革”の手段として使われることを知っている。統制が徹底された自国の考えなど定かではないが、入隊して明かされる《フォルタグルンドウ》の実態と、数年前から活動が活発になりつつある科学省と軍事省——そして、目の前に広がる自然、或いは“資源”と呼べるもの。それを知った我々は、原住民との戦いが始まるだろうと容易に察する。

その現実には僕たちではなく《ティロディアクボ》の民が知るべきだろうが、数千年の月日を経て構築された社会は本当に抜目がない。だから、首脳は《ティロディアクボ》で家族が待っている我々を選んだ。それは自分が捨て駒でないことを保証するが、同時に任務の徹底を課している。

一方で《フォルタグルンドウ》の民に危機を知らせる方法もない。当然ながら言語は異なり、会話

の記録が送信される翻訳機で迂闊に話すことはできない。更に、我々は僅かながら彼らと戦争した過去がある。ここは文明が中途半端に発達しているため、我々が宇宙人であること、最も「ハビタブル惑星が2つ存在すること」を彼らは知らないが、もしも何か条件が違っていたら、今日までの猶予はなかったのだろう。・・・それが良いか悪いかは分からないが。

「^セ——こちら、チームC。彼らは南西へ向かった。繰り返し、彼らは南西へ向かった。敵対のリスクは低いと考えられる。」『^セ——こちら、仮説本部。了解した、残りのチームも指示通り

「^セ——こちら、チームA、了解。」『^セ——チームB、ラジャー。』「・・・。」

部外者、か・・・同じ人類なのに、自分は一体、何のために今を生きているのだろうか。家族のため？ 仕事のため？ 新しい樂園を築くため？ 人類の未来を守るなど大層な真似はできないが、自分の他にも世界の平和を願う者は——いるはずなのに。

・・・平和って・・・何だろう。・・・いや・・・何も知らなかったな。



何事もなく洞窟に辿り着き、私たちは中へ足を踏み入れる。暗闇に包まれた空間、不気味なほどに透き通る風、絶えなく続く段差の激しい道。その恐怖とは裏腹に好奇心が、そこに謎があれば気になってしまうのは、子供の本性だろうか。

「ここで大きな分岐点の登場か。——レア、前回の地点から前に104メートル、右に78メートル、下に26メートルだ。」「了解。えーっと・・・36度の地点で・・・ワオ、ユークリッド距離で大体132メートル！分度器はどこだあ？」「・・・もう、今日は諦めない？」「ここまで来たら両方とも調べようぜ。まだ、昼には間に合うさ。」

それにしても、この巨大な洞窟が500年も発見もされていないとは何故に？・・・今まで埋もれていた？私が生まれる前に発生した地震の話は知っているが・・・世界は何とも、不思議だ。

マエレはパディマティスの説得に渋々と従い、更に奥へ足を踏み入れる。・・・改めて考えると、風が吹くのであれば出口が存在することになる。確かに《エソテルボ》の標高は低くないが——風の流れに身を任せている今、この先には何かしらの答えが待っている。

「・・・石ってこんなに綺麗だったけ？」「・・・？」「ほら、壁を見てよ。何か、艶が・・・黒色？」「・・・本当だ。」

僅かに照らされる壁は黒曜石の如く、凍り付いたような内部が無造作に煌めいている。大気の砂埃を撥ね回る光は黄金色に閃いて——ここは、妙に空気が重い。気付けば微風すらも消えている。

「・・・何・・・ここは？」「・・・。」「人工物？いや——建物だ。」

穴を通り抜けた先に広がっていたのは、妙に大きい空間だった。そこには角張った巨大な柱が至る所に、両端が地面と天井に埋もれているか、もしくは「過去に聳え立って」いた。過去に門戸が存在した大きな穴、無数に散らばった透明な鉱石、道中に生える独創的なオブジェクト——それらの多くは石化しているが、非常に精密な構造が施されていたと思われる。

「待った・・・これ以上は進めない。」 「・・・急に？」 「ここへ来るまで感覚は問題なく安定していた。でも、今は狂っているというか・・・ノイズが酷いんだ。最近の症状とは別の。」

あれほど積極的だったパディマテイスの顔は、酷く青褪めていた。それは感覚というよりも、本能が何かを拒絶している。私もそうだ、目の前の光景は彩もないくせに幻想的で、それが好奇心よりも恐怖に刺激を与えている。対して、マエレは平然として・・・少しは野生の勘を持ってほしい。

「・・・ここが原因なの？ ・・・ここには・・・ここで、何があったの？」 「・・・人が住んでいた場所だろうよ。」 「いや、社会——私たちの町よりも遥かに高度な社会があった。・・・ここは、その残骸だ。」 「・・・。」

道と家、その内外に存在した何かは、今の《エソテルボ》と基本が同じだった。巨大な家と広大な道は、民族や資源の豊かさ、そして馬車の普及率を物語っている。しかし概要が掴めても、この街が廃れた年代や理由は分からない。私たちが立っている場所には・・・想像以上の歴史が眠っている。

「でも、そんなに高度な文明が滅んだ理由は？ 魔法が使える俺たちよりも進んでいるなら、永遠に繁栄できたはずだぜ？」 「・・・。」 「捨てたんじゃない？ ほら、火事とか災害で使い物にならなくなったからよ。」 「・・・だったら、そいつらは今、どこに居るんだ？」 「・・・。」

「とりあえず、今日はここまでにして帰ろう。」 「・・・そろそろ昼だしな。」

今は答えまで辿り着けそうにはない。少なくとも大人の手が必要だった。だからこそ——いつの日か、この遺跡に秘められた歴史を自分で解明したい。

・・・これだ。これが、学者たちの心に宿る“好奇心”の正体だった。そこに入り混じる“恐怖”

は無知が原因だった。彼らは無知という恐怖を克服するため、それが何かの役に立つから勉強をしているのだ。・・・私が嫌っていた勉強は、その本質を知らないだけだった。

「今日の出来事、町長に報告するの？」 「・・・報告したら、間違ひなく俺たちは入れなくなる

だろうな。」 「そう、もう少しだけ調べて・・・フヘヘ。」 「あッ、レアの無謀な計画を立てる

顔だ。」 「ち、違ひ。あの遺跡が凄すぎて・・・何か、大きい気がするの。」 「お前の興奮する

気持ち、分かるぜ。俺も股間が大きくなッ」 「もう、そういう下品な考えだからパディは結婚相手

の候補がいッ」 「こ、これは自然的な反応だ、それぐらいに俺の感覚が何かを—— ア、カカカッ

「・・・!？」 「何の・・・音だ？」

元の入口に向かい始めて間もないとき、謎の音が空洞に響き渡った。それは振動と一緒に、何か大きな衝撃音だった。地震・・・ならば一刻も早く脱出しなければ。

「急ごう。」 「落ち着け——地震にしては振動が小さすぎないか？」 「・・・外の音だった、

今のは。」 「何が起きた？ ここまで聞こえる轟音なんて・・・」 《海の民》だ。奴らの魔法

は・・・大きな音が出ると。」 「!!」

今朝に聞いた《海の民》が、本当に攻めてきた？ しかし偶然と解釈するには無理がある。あまりに突拍子のない事実——思考が遅延する。どこを攻撃された？ ここの攻撃される？ 何時間前

に攻撃が始まった？・・・家族は、無事？

衝動に駆られた足はマエレを抜き、寸前の暗闇を追うように走り続け、気付けば遠くに佇む光を目指していた。外へ出たところで世界の眩しさに、正気が戻る。道具と地図が入った鞆を砂利に投げ

捨て、ひたすらに《三ツ子山》へ向かう。今から《エソテルボ》まで戻るには時間が掛かる。せめて今の状況だけでも——何が起きたのかを確認したい。

開けた峠まで辿り着いた刹那、先程よりも小さい轟音が耳に響く。しかし、それは同時に“目撃”した。青空にまで昇る黒い煙と——斑に広がった無数の炎を——

「・・・嗚呼。・・・嘘だ、・・・嘘だ。」

《エソテルボ》の郊外と周辺は、赤色に染まっていた。具体的な様子は定かではないが、炎と共に複数の巨大な杖が地上に突き刺さった現実味の無い光景は、故郷を失った涙すらも忘れるほどだった。あれは魔法で作られた？ 地面から生えた？ いや——空から降ってきた？

その視界に、デジャヴを感じた。前にも・・・いや、何百回も、何千回も感じた情景を。

「赤い・・・彗星・・・。」

TIP・・・《フォルタグルンドウ》に住む人々は、今の人類よりも生命力が遥かに高いです。僅かな酸素でも効率的に交換が行え、怪我や病気の治りが速く、また細菌やウイルスに対する高い免疫力を持ちます。厳しい自然環境を乗り越えた人類が獲得した当然の能力だと思うかもしれませんが、これには奥深い理由と歴史があり、その真相は後々に判明します。レアと同じように洞窟の先で散乱した人工物の残骸を目撃したとき、現代に生きる我々は何かを察したはずです。

「なあ、オクディブ。お前の机に置かれた旧型の《仮想分子検証装置》は何色の文字が表示されるか覚えているか？」 「ハハッ、僕の記憶力を舐めないほうがいいぞ？ 空色だね。」 「ふーん、

だったら『空色』が何か説明できるか？」 「空色？ そりゃ、惑星に降り注ぐ光子が大気中で散乱

するときに波長の短い寒色が—— 「それは、自信を持って『空色』と言えるか？」 「うーん、

見たことないからなあ…… 「そう！ 不思議に思わないか？ 俺たちが言語を形成する過程で空

の色を『空色』と名付けたのは紛れもない事実だ。しかし、『ティロディアクボ』へ完全に定住した

《新人類》は『空色』を何と説明する？」 「……確かに。」 「最も《科学者》や《歴史者》は

根拠まで説明できるが、一般人は目の色だとか光の色だとか『主観的な日常』で例えてしまう。」

「つまり？」

「言語は長期的に情報を保存する媒体として欠陥が多すぎると思うんだ。写真や音

声とは別の『一次的な知識の参考』が必要になる言語……少なくとも自然言語で歴史や文化を記述

しても、物理的な『ノイズ』が増えるだけ。空色の『空』だって、恒星が……アレ、何だっけ？」

「『太陽』だよ。」 「おう、それだ。そうやって階層的に——

生まれてから一度も青空を見たことのない《新人類》には、太陽という存在が物理的にも心理的に

も遠く感じられる。青空と同様に『フォルタグルンドウ』では身近な概念だったらしく、それが方角

を確認する手段、それが食糧を生産する要素、それが多様な生命にエネルギーを——とにかく、無

数の恩恵を得られる。少なくとも、僕たちは太陽の本質的な価値や活用を知っている。

これは『存在が失われた刹那、直観はその価値を初めて理解する』という諺に通じる。が……

価値が理解されないまま、徐々に存在が失われるものを知った今……それは諺も同じだと悟った。

02. 意思を秘めた賢者

「スケプトの考えは分かるけれどね、この『流動的』な宇宙に『絶対的』な情報を残すなんて、無理な話だと思わない？ 無機物に刻むよりも、環境の遷移に対応できる『何か』が常に存在しないといけないのよ。」 「・・・ほう。」

《ペーパー・モニター》の設計図を見詰めるストウシステイが、ふと話題に加わった。持論を話し終えたスケプトはインカムを触りながら、再び思考を巡らせる。

「・・・つまり、昔話や伝説を語り継ぐ人類のような『機構』が重要ってことか？」 「フフウフ、そういうこと。」 「《保存者》が生命を作る必要があるとは、随分と面倒な使命・・・」 「俺たちは

「兵器開発者」だぞ。生命を脅かす奴が生命を案じるなど、精神が持たない。」 「・・・。」

サイロの一言に、皆が自分を見詰め直した。鋼鉄の部屋と無数の電子機器に囲まれた自分たちは、確かに生命を蔑ろにする元凶かもしれない。しかし――

「自分は【武器が自他の運命を平等に扱う】ことを信じているよ。兵器は生命を破壊する道具だけれど・・・それは生命が自身を守る強力な手段でもある。だから、僕たちは《フォルタグルンドウ》の再移住に向けて『危険な動物を駆逐する兵器』を開発している。だろ？」 「・・・。」

「今日の《ティロディアクボ》に住む《新人類》が、世界の理とされた『弱肉強食』を忘れるのは仕方ないさ。」 「・・・オクディブの言う通りかもな。結局、人類は欲求や本能から逃れられないままかもな。」 「・・・こんな話題だっけ。」

謎の結論で話題に幕が下り、各々が元の作業に復帰する。が・・・現在は《朝の時間》なので、残業を嫌うスケプトはソファで中途半端な瞑想をしている。彼が担当する『兵器が及ぼす影響の検証と評価』は誰よりも早く片付けられるため、何も文句はないが・・・テーブルに空のコーヒークップやら《情報操作端末機器》やら私物を置いたままにする癖は直りそうにない。

自分のグラスと一緒にスケプトのカップを持ち去ったサイロは、ここ一番の効率家であり何かと口が冷たい。しかし紺色のポニーテールは面倒屋の証拠であり割と皆に氣を使うなど、よく分からない性格を持った『回路の執筆者』である。

自分とストウシステイは同じ『兵器の設計者』に見えるかもしれないが、実際は自分が小型兵器を、彼女が大型兵器を得意としている。こんな自分も大学を卒業した『エリート』に分類されるわけだが、特に紫色の瞳と髪のストゥは科学応用部門の中で最も頭脳成績が良く――

「あら、隣の班のフィードバックが届いている。」 「あー、そういえば向こうの軍事コロニーが完成したんだっけ、3日前ぐらいに。」 「もう使われたのか？ 司令部もセツカチだな。」

「でも、どうやら《天の杖》は半分ぐらいが不発だったらしいよ。」 「やっぱりな！ 多重層のコーティングもしないで低軌道から投下するなんて無謀な話だ！」 「消耗品だからと資源をケチった末路だな。」 「ハハハ・・・僕たちの兵器は完璧だと祈るよ・・・。」

これまでの兵器開発1課が考案した兵器は無数に存在するが、今回の《移住計画》では《新人類》が再び《フォルタグルンドウ》での永続的な生活を営めるよう、環境構築の一つとして安全の確保に適した兵器が使用される。僕たちが2年前に開発した《自由飛行型戦闘機・FF》と《超磁力式自動小銃・MRG》も計画の第2部で使われる旨が通達されたので、敵は随分と手強い様子である。

「しかし、こんな強力な武器を開発したのはいいが・・・本当に必要なのか？」 「ハハッ、現地に肉食動物がいるのは承知だろう？ まだまだ《フォルタグルンドウ》は謎に包まれている、そういう場合こそ【備えあれば憂いなし】だと思うよ。」 「動物ねえ・・・あんなに可愛い家畜が、本当に人を襲うのかい？ 資料で見た奴らは最早『モンスター』だったぞ。」 「環境が違うから、エンティティーも特性が変わるのよ。安地も安定もない世界では、絶対的な力を持った生命だけが生き残り続けるわけ。」 「はぁ・・・自然っていうのは恐ろしいな。」

実際は単純な話ではないらしく、《移住計画》の概要を聞く限りでは動物や植物に寄生する細菌やウイルスも侮れない敵であり、実際に14年前の第1調査隊が動物の攻撃に遭遇したり想定外のウイルスに感染するなど、まだまだ課題が残っている。《ティロディアクボ》の千年も続く大雨や暴風もそうだが、自然の力は本当に恐ろしい。

「スケプト、そろそろ08時だぞ。コーヒーも淹れてやったから、さっさと腰を上げて《OS》の新鮮なタスクをやりな。」 「あと5分・・・」 「膝に掛けてやろうか？」 「はいはい！ やりますから！」

そんな過酷な《ティロディアクボ》は、そもそも人類が居住する惑星ではなかった。千年前までは

本来の・・・歴史では《前人類》と呼ばれるが、僕たちの祖先は《フォルタグランドゥ》に住んでいた。ことと変わらない生活、それも太陽と青空の下で暮らしていた《前人類》は、制御不能な災害を被ったことで《フォルタグランドゥ》という故郷を捨て、それまで鉱石資源を採掘していた反対側の惑星《ティロディアクボ》まで避難した経緯を持つ。

「たった今、《FFF》の追加プログラムの最終版が完成したぞ。検証も問題ない。」「・・・は？ あれ、完成版として提出しちゃったよ！？」「はあ！？ パッケージに何のラベルも貼ってなかっただろ！？」

「この前まで『無印が完成品』とか言ったじゃない！」「それは検証用のデータの話で——」「へい、2人とも落ち着け・・・とりあえず行動が先だ。」

ここへ避難したのは約500名。人類の再始動を掲げて「5人の賢者」が開拓の先導を行い、段々と《ティロディアクボ》に地下都市という蟻の巣が繁栄した。生活循環が安定した最近に第1調査隊が宇宙船で《フォルタグランドゥ》へ派遣されるが、故郷を生き延びた《前人類》の存在は確認されなかった。対して人体への影響が懸念されていた汚染は治まっており、第2調査隊の帰還後に《フォルタグランドゥ》が居住可能であると断定された。

「《FFF》とか2日前に量産開始の通告が来たのよ！？」「今から仕様の変更なんて許されるのか？」「なあ、何か俺が悪いみたいな空気になってねえか！？ 基幹のシステムじゃなければ、プログラムは外部から上書き・・・そもそも《FFF》の設計者はストゥだろ？」「そう、そこに改竄防止用の《オーバー・セキュリティ》まで組み込んで・・・」「そうだった！ あれ100機ぐらい作るんだろ！？」「損傷時の負担軽減に関するプログラムがないのは、マズいぞ。」

特に千年前の災害に関する歴史は凡そが消失しているので何も言えないが、これだけ発達した科学を持つ人類が太刀打ちできなかった災害とは、一体何だったのか？ 一説には原子力を用いた兵器で大規模な戦争が勃発した過去を政府が隠蔽している話を云われたりするが、何にせよ明白な根拠が存在せず、とにかく《フォルタグルンドウ》の情報は今日でも殆どが公開されていない。

「なあ、本番で運用しないと正確なプログラムが書けない態で、今回は見送らないか？」 「それ俺の前で言うか？」 「正直にミスを伝えましょうよ。多少の評価は下がるけれど・・・フフッフ、この際に《オーバー・セキュリティ》の実態——見たくない？」 「・・・！ 整合性の点検も必要だと言えば現地で」「待て待て、待て。何を目的に！？」 「知的好奇心。」 「ハァ！？」

陰謀論は良からぬ考えだが、時には娯楽として、時には本能として考える節がある。例えば調査隊も僕たちと同様に情報の一切を口外してはならないが、注目するべき点は調査隊の平均年齢である。科学応用部門は若者から老人まで幅広い年齢層より構成されているが、一方で調査隊だけは家族持ちのオッサンばかりである。それなりのリスクを含む役職に——扶養者を採用するものか？

「大丈夫、見るだけよ。」 「ストウが言う、大丈夫は信用できねえんだよ。」 「分かった、多数決でいい。今は2対1、オクディブの意見次第で現地に足を運ぶか決めるんだ。」 「サイロ、お前そんなキャラだっけ！？ ・・・分かったよ。・・・オクディブ、お前はどうか？」

これも社会的な方針だと言われてしまえば文句は出ないが、社会の因果や相関が複雑すぎる現在の統制を、5人の賢者”は把握しているのだろうか？ 何が無造作で、何が必然的か。時々・・・自分という役割が生み出す意義や本質が、分からなくなる。兵器の開発が何を——

「オクデイブ?ヘイ!」 「!?な、何だ?」 「.考え事か?」
「.いや、少しだけ危険な妄想をしていて.」 「良い考えだと思うか?」 「.悪くはないと.思う?」 「ほら、これで3対1よ。」 「嗚呼.お前は、まだ若いんだな。」
「うん.え、何の話?」 「いいさ、若者の心には負けたよ。」 「スケプト含めて全員20代だろ。」 「現地で《オーバー・セキュリティ》の仕組みを見学するぞ。」
「.は?」



1課の研究室を施錠した後、僕たちは必要な機材を持ち製作所へ向かった。確かに追加パッケージを正常にインストールする必要があるが、その為に全員が現場へ出向くのは不自然な気もするが。

科学応用部門の拠点は分散しており、特に地上での試験や運用が強いられる製作所と電子情報の徹底的な保護が強いられる研究所は場所も高度も遠く離れている。

「向こうも両者の部長に黙ってくれるのは有り難い話だけれどさ.その『工房3F17』って何処だよ!?」 第〇製作所とか単純な名前だったはずだぞ!」 「自分が配属したときから、そんな名称だったよ。」

「スケプトは理論工学が担当だから.《移住計画》の経過に伴って担当が細分化されたんだよ。」 「そうそう、世界は広いの。」

いつものように退屈な灰色の廊下で白衣を纏った関係者と擦れ違いながら、複雑な迷路を潜り抜け

た先で少しは彩がある広間の《通行搬送帯道》に一時だけ足を休ませ、10分後に第3ターミナルへ到着すれば色彩の豊かな草原で寛ぐ人々、または行き交う人々を通り抜けて《高速列車》まで歩みを続ける。あの、螺旋のエレベーションが有名な《線》である。

ここ最近「磁場の逆転」が発生しているせいか地上付近の都市や施設が閉鎖される日も多く、故に深層部の名所である楽園と植物の憩いを求めて観光人が増加している。既に《空間恐怖症》という単語は死語になりつつあるが、それでも人間が無機質な空間に留まるのは難しいようだ。

「こんな《科学者》ばかりの巣窟よりも、第2ターミナルにある牧場のほうが広くて休めるだろうに。」「そう考える奴が大量にいるから、第3ターミナルなら空いていると思う奴も現れるんだよ。集団心理ってやつだ。」「ハハハ、何処も【人は人を見て動く】からね。」

「・・・もしかして、今のは諺？」「お、正解。・・・って、まさか。」「クソ、またストウに先を越された。」「はあ、まだ下らない賭け事は続いていたのか。」「いいいいよ。自分も、何だか諺に思考が縛られているような気がして・・・無意識だから、指摘して。」

「諺か・・・そこまでは、宗教の道具みたいだな。」「まさか、今の宗教は《奇想の仮想》に過ぎないだろ？ 古典的な宗教は例外なく消えている。」「信仰やら崇拜やらがなくとも集団的な暗示は宗教の一つだ。ミームは面白いが、恐ろしいぞ。」「いいじゃない、自由だし。」

「・・・まあ、個人の勝手かもな。」

サイロが指摘するように、自分も諺に暗示を受けているのかもしれない。それは先代が大切だと判断して圧縮した知恵であろうと、言葉という時間や空間を超える存在は、同時に「古く悪い」考えを

伝搬しているかもしれない。《フォルタグルンドウ》へ辿り着いた《新人類》は“その遺伝”を断ち切るために言語を再構築したというのに、果たして効果はあったのか・・・。

人間は根拠や意義を持ちたがる。それは文化や学問として世界を良い方向へ運ぶが、それは同時に存在しない“真実”やら“神様”やらを創造する、いや、実際は分らない。現に、僕たちは進化の過程を経て生存した“だけ”なのか、初めから意図的に存在している“だけ”なのか、今日まで証明されていない。しかし・・・皮肉にも、存在しない“それら”は《フラクタル》のように自分で自分の根拠として仮定している。時間や空間を辿るのだから、証明が・・・意味が――

「ねえ、スケプト。朝方で理想の言語について熱弁してもらったけれど、今の言語が作られたときは――何を・・・いや、昔の言語から・・・いや。ごめん、何でもないや。」「お、おう？」

そうだ、言語も同様に長い年月を経て遷移するものであり、そこに極端な歴史を保持できるわけではない。最も、千年前の歴史を知ったところで得られるものはない。

「・・・何だよ、気になるじゃねえか。」「ごめんよ、途中で矛盾に気付いたからさ。」「何

だか、今日のオクディブは落ち着かないわね。」「自分も何だか。」「・・・。」

作為性という莫大な概念に不安を抱いていた、それだけだった。こうして、無鉄砲に根拠や意義を探し求めてしまう自分も・・・まだまだ未熟なのだろう。



「それにしても、1課の人間が製造現場に来るとは珍しいな。」 「ハハハ・・・完璧を目指しているつもりですが、僕たちも人間ですから。別に、どれだけ現物を見ても——浪漫が感じられるので、良いですよ。」 「そりゃぁ嬉しいね、俺たちも誇りに思える。」

サイロとストウが脚立の上でシステムの更新を行い、その手前で自分は工房3F17の所長と雑談する一方、スケプトは《FFF》の周囲を歩き回りながら目を開けたり閉じたりしている。違法に外部の技術を盗み取る様子が勘付かれないよう、自分は所長を引き留める役目を担っているわけだが、こうして傍観すると・・・やはり、全員が変人だと思ひ改める。

「それにしても、1機ずつ更新するのは大変そうだな。」 「仕方ないですよ、どっかの誰かさんがテキトーなメモで 「聞こえているぞ。」 「まあまあ。別に、手順書とデータさえ渡してくれても黙って・・・」 「特殊な機体なのでシステムが複雑なんですよ。」 「ああ、そうだな・・・俺も最初は驚いたよ。こんな兵器・・・いや、移動手段は初めて見た。」

確かに、飛行機といえば翼と出力装置が付いた機体を想像するが——この、パラパラアンテナを組み合わせたような巨大な円盤は桁違いの性能を秘めている。複雑な繋ぎ目をした鋼色の表面は全身が空気を斬る翼であり、その下部にはタービンも噴射機構もない3個の不思議なスラスタ、そして自分が設計した《MRG》が露出している。

《FFF》は、学生時代のストウが1課に配属される前から設計していたものだ。フリスビーを基にした飛行機は既に考案されていたが、彼女は従来の翼や出力装置を取っ払ったうえにスラスタの技術を独学で開発してしまった。宇宙に存在する4つの力を上手く弄ることで自由に浮遊させられる

というが、彼女の論文を読んだところで誰も理解できず、発表会で試作品を飛ばしたら速攻で軍事省に攫われたという伝説が残っている。

「終わったぞ。次、行くぞ。」 「オクディブ、あと何機ぐらいよ？」 「えーっと・・・23機

だね。」 「そんなに！？ やったあ！」 「ええっ・・・社畜なのか彼Z 「オッサン、解除して

くれ。」 「はいはい・・・。」

どうやら、まだ《オーバー・セキュリティ》を納得できるまで解読できていないらしい・・・

嗚呼、スケプトが直立したまま死んでいる。全く・・・もう。

「おーい、行くぞ。」 「――」。 「・・・こりゃ、駄目だな。」 「オクディブさんも大変

ですなあ・・・。」 「ハハハ・・・慣れっこですよ。」

なぜ、ストウは18歳から働いているのか。なぜ、1課は若者ばかりなのか。なぜ、兵器開発は1課だけなのか。なぜ、1課が軍事省ではなく科学省の下に配属しているのか。その答えは彼女が軍という存在を嫌っていたから。――そもそも《FF》は戦闘用ではなく、純粹に飛行機として設計されていた。しかし圧倒的な技術を目の当たりにした軍事省は、彼女と複雑な取引を交わした。

人員と環境を用意する代わりに、それは兵器として開発する。そこに拒否権など存在しない。決意したストウはスケプトの長考する癖を買い、サイロの完璧な腕を買い、自分の・・・。自分は、なぜ選ばれたのだろうか？ 選抜のとき、隣に立っていた幼馴染のパラモは僕より成績も志向も優れていた。何より、自分は「理由もなく銃火器を作るため」に軍事省へ就職した。面接と同じように武器の浪漫を語ったはずなのに、武器を嫌う彼女は何故、武器が好きな自分を引き入れた？

「次だ次だ。」「・・・面倒なら私に《オーバー・セキュリティ》の鍵を渡してもいいんですよ?」「そうしたいところだけれどねえ、不正な改竄を防止するために責任者が首から下げているわけで・・・」「見張っていれば大丈夫ですって。」「いやほら、鍵がスキャンングされる可能性もリスクに含まれるから——」「・・・。」「き、君を疑っているわけじゃないよ。」「ストゥは兵器を好む人間ではないが・・・意味もなく危険な道を歩く程度には、厄介な性格をしている。どうして・・・自分は、彼女と同じように兵器を嫌いにならなかった?」のだろう?」



パッケージの更新と《オーバー・セキュリティ》の解説は無事に終わり、4人は第1ターミナルの店舗で昼食を摂っている。しかし3人の白熱した会議は止まらず、食い荒らした皿を囲み1時間が経過した。・・・眠い。

「——そう、公開鍵とパッケージの狼藉が復号鍵として使用されているの。処理を通過したプログラムとコンパイラーが同じRAMの中でシステムに対応したプログラムを交換するから、狼藉の値が不要なコンパイラーを送信される前に暗号化されていない改竄したパッケージをRAMに直接ぶち込めなければ、不正はできないわけ。」「起動回数も鍵に使われているなら絶対に不可能じゃないか。お手上げッ! これ以上の質問なしッ!」

相変わらず何を言っているのか、3割も理解できない。・・・しかし、ここまで《オーバー・セ

キユリティー》の解説に執着しているのは脆弱性を突きたいわけではなく、正式な《科学者》にさえ公開されていない技術や知識が多く潜むからである。人は何かを隠されると、それを探してしまう。

「よくまあ、本体のソースもログも頼らずに仕組みを解明できたよね……」 「フン、あれだけ時間があれば即席でテスト用のパッケージが試し放題だぞ。」 「なるほど……。」

《ティロディアクボ》の歴史や社会、学問にも、少なからず秘密はある。明示的に情報が隠されることもあれば、存在すら気付くことのない情報も存在する。……それは、悪いことではない。不正や悪用を防ぐためとか、健全な思考を育てるためとか、都合に対する意図が——

『アー。聞こえるか?』 「!?」 『ギョーおう、ばつちり翻訳されているぞ。』 『ギョーアホ

か、俺たちが知らない言語だぞ。』 『向こうに行けば、使い道も分かるだろ。』 『ギョー。』

突如、謎の会話がインカムを通じて右耳に垂れ流される。何処かのグループに混線したか、設定を間違えているようだ。話を聞く限りはリアルタイムの……翻訳機……?

「どうした?」 「……あ、大丈夫。インカムが混線してさ。」 「そういえば、ここは軍人が

ウヨウヨいる場所だったな。」 「一応だが、盗聴は違法だぞ?」 「ま、まさか軍事省の機密情報を探ろうとか思っていないじゃない!」 「図星じゃねえか。」 「……。」

物事の「意義」は幻想だろうと、そこに「意図」は必ず存在する。今の会話が演技でなければ、謎の言語を翻訳する機械は存在する。しかし《ティロディアクボ》に存在するのは、一つの人工言語と幾つかのコンピューター言語のみ。……謎の言語とは? ……何のために、何を翻訳する?

TIP・・・本作で描かれる文章や単位は、現地で使われている言語を基に日本語へ翻訳したものです。《フォルタグルンドウ》に存在するパンは現代の私たちが知るパンとは異なりますし、対して科学が発達している《ティロディアクボ》では未知の事象を現代の文明が理解できるよう造語で表記してあります。魔法の呪文は前世の人類で途絶えた言語、そして今世の人類が蘇らせた言語であり、それと似通った過程と持つ古風なヘブライ語を代用しています。言語とは遷移する歴史が圧縮された情報の塊であり、それを扱うのは本来、とても難しいことなのです。

久しく姿を現した《海の民》は、14年前と同じように《エソテルボ》へ攻撃を仕掛けた。事態は一刻を争う——今の私には何ができる？ 何をするべき？ 夢と同じ景色に・・・嗚呼、嫌だ。何もできずに藻掻くだけの自分を認めたくない。

負傷者数、死亡者数は不明。町が“消滅的な打撃”を受けていなければ、今頃・・・いや、今はマエレとパディマティスに合流するのだ。2人は《出力型》の戦士でもなければ、自分の武器は小さなナイフのみ。——私たちは、無力だ。

「・・・マエレー！・・・パディー！」 「・・・」

無我夢中に走り続けたせいで、私も2人も互いに見失ってしまった。ここから町まで・・・いや、隣町のほうが近いから——駄目だ、洞窟で感じた振動は地上よりも大きかったのだから、向こうも被害を受けている。東に見える黒煙が、その現状を物語っている。

「——レあ！」 「！」

後方から、微かにマエレの声が聞こえた。しかし——そこには2人ではなく、4人の影が佇んでいる。機能的な“ヘルメット”を被り、植物と同化した模様の“スーツ”を纏い、巷で“銃”と呼ばれている遠距離武器を友人の頭に突き付ける2人の男は・・・《海の民》そのものであった。

「・・・ふ、2人を放せ！」 『墮鞠蒔——無理な話だ。君も大人しく従ってもらおうか。』

彼らが持つ攻撃手段は明確ではないが、私の体力や筋力だけでは勝てるはずもなく、言葉の通りに降参する他ない。彼が口から放つ言葉は私たちの知らない言語で——それは間もなく、私たちの言語に翻訳される。その無機質な口調に、恐怖と・・・僅かに、妙な感動を覚えている。

03. 闘争の意味は上書きされる

「・・・。」 「費距長途詎蒼？」 「・・・。」 「韞觶英芽。」

投げ捨てた鞆を受け取った私は、銃を突き付けられながら歩み続けた。手足を拘束もせず、無力な私たちを明らかな態度で見下している。彼らは何を目的に私たちを——いや、何処へ向かってい

る？　ひとまず、今の状況を打開しなければ。彼らを観察すれば、何か分かるかもしれない。ヘルメットは頭部への攻撃を防ぐだけではなく、様々な機能が付いている。半透明の板は目を保護するために、先程の翻訳された声は横側に空いた穴から聞こえた気がする。しかし、今は彼らの言葉しか聞こえない。——彼らは、誰に向かって話している？

前を歩くマエレから、啜り泣く声が聞こえる。その背中に——嗚呼、今は考えたくない。怒り、憎しみ、悲しみ、その複雑な感情に吞まれないよう・・・失われた日常など・・・。

ママは、無事に逃げた？　ルジャカルボは、馬鹿をして・・・今、家族は・・・。

『芟酖苧——お前ら、泣くんじゃない。』 「う、・・・五月蠅い。」 『讚仁苧——泣いていい。今しか、泣くことはできない。』 「・・・。」

「お前たちが《エソテルボ》に火を付けたんだな？」 『芻莠鞠——その主語は間違っているが、

そうだ。俺たちの社会が侵略を始めた。』 「何故だ！ 何が欲^すさ^き 』 茂^{しげ} 芒^{ぼう}、—— おい、お前も感傷的に答えるな。』 『閻^{えん} 芩^{しん} 苳^{そう}—— 分かった。』

パディマティスは理不尽に頭を殴られ、再び静寂が訪れる。草を踏み締める音の一つ々が、自分の心に這い回る歪な傷を明瞭にしてい^く。殺されるのか？ 犯されるのか？ いや、その場で行えば済む話だ。それなら——

『鑢^ろ 銅^{どう} 英^{えい}—— 到着した。』 「・・・何処だ？」 『覽^{らん} 輩^{はい} 苳^{そう}—— 何処でもない。村人も、仮説

本部の奴らも、誰も来ない森の奥さ！』 「ッ！ おい、離^{はな} S^ッ！』 「え、n！』

髭を生やした男はパディマティスの髪を掴んでは茂みへ放り投げ、隣のマエレを樹木に押し付けた。もう一人の大柄な男は背後から私の首に腕を巻き、頭に銃を突き付け、その光景を無言で眺めている。

「助^{すけ} え^え っ^っ 『荻^{おぎ} 荷^に 荷^に—— 俺たちは1ヶ月も森に籠^{かこ} っていたんだ、今にも股間が爆発しそうだ。』

男は荒い息で、右手に銃を握ったまま、徐に股間を弄り出した・・・嗚呼、そういうことか、後者が目的だったのか。

「マエレ！』 『花^{はな} 莚^{せん} 輶^ぎ—— この女は俺が貰^{もら} うぜ！ クソッ、ファスナーが開かねえ——

その時だった。高く鋭い轟音が右耳から左耳へ抜けたと思えば、マエレを犯そうとした男の頭部は一瞬にして破裂した。鮮やかな草木、私の額にまで紅色の飛沫が飛び散り、首から上を失った体は血を湧き出しながら地へ崩れる。その一転する様子を目の当たりにした私は—— 思考ができない。

「・・・う、パディいいい 『落^お ち^ち 着^ち け^け・・・もう、大丈夫・・・。』

マエレはパディマティスに抱き着き、それは悲惨な状況で在りながらも少しだけ安堵した。後ろの

男は仲間を殺した。その意図は分からないが、一時でも猶予を作ってくれた彼は・・・しかし、首に巻き付けた腕を緩めようとはしない。

「・・・どうして、助けた？」 『誨裡仁——勘違いするな。俺は、奴の行為を許せなかった。』

家族を持つ文明人として、野蛮な同族が許せなかった。それだけだ。』

横目に映る男の表情は険しく、心を殺していた。だが、そこには私が持っていた複雑な感情と同じものが滲み出ている。いや、何かを覚悟したような、そんな顔を。

『花仍苧——こちら・・・チームA。水源補給箇所を確認された3人の民間人を始末する。』

「・・・どうやら、逃がしてくれる気はなさそうだな。」 『眠苳芽——言ったはずだ。これは

戦争・・・敵を殲滅する意思は変わらない。そこで齎される死に、俺は最大の敬意を称する——

彼は銃をパディマティスへ向けようとした。それは——彼が最も油断していた瞬間でもあった。

「ウ！」 「拾って！」 「！」

私たちを見縊っていたのが幸いであつた。太腿に隠したナイフを彼の膝裏に刺せば、蹣跚めいた隙に私は腕から抜け出し、パディマティスは死体から銃を引っ張り出した。死体の肩に紐が引っ掛かるも、その銃口を男に向けたまま、姿勢を直した2人は身を固める。・・・私は、男の右腕を乱しても銃まで奪うことはできなかった。

「イテテ・・・。」 「レア！」

『葦扎苜——どうやら、俺を殺せる程度の“魔法”は持っていないようだ。』 「・・・そうだな、でも、そっちの魔法は俺の手に有るぜ？」 「・・・。」

彼らは住民が持つ能力を知ったうえで、あの余裕を？ 今の言い草では、私たちを観察していた。

全員が戦闘に不向きだと見抜いて？ いや、何を知っている？ 私たちを“どこまで”知っている？

『蔑醜装——お前のような少年に、引金が引けるか？ 人間を殺す勇氣はあるか？』 「ああ、

この指の部分？ そうだな。お前は《エソテルポ》を無茶苦茶にした、その理由だけで充分だ。」

「・・・俺の両親を・・・俺の家族を・・・う、返せよ！ おい・・・なあ！」 「・・・」

パディマティスは米粒の涙を頬に垂らしながら、男を憎み続ける。しかし男は、先程と眉の一つも変わらない面で見詰めている。血に塗れた2人の沈黙する姿は、異質だった。

『花苳芪——これが戦争だ。【創造と破壊は一つの変化に過ぎない】。【悲劇に感化された感情

が新たな悲劇を生む】。【勝者が敗者の過去を記す】。そう、教えられた。ここで一人の兵士を吹き飛ばそうが、戦況は変わらず、心に空いた穴は塞がらず、何も得られずに終末を迎える。』

「——いいや、違うな。」 「・・・！」

明後日の方向から聞こえた一言を境に、状況は一変した。取り囲むように近づく複数の戦士。その背後には火災を逃れた多くの住人。そして、赤髪と鋭い目付きをした町長が——姿を現した。

「【万物は情報を秘める】のだから、一人の兵士も生かすべきだろう。お前さんは、敗者が記した歴史を学び忘れたようだな。」 「——親父い！」



「奴」と同じように幾つかの部隊が在るわけだな。その人数も教えろ。」 『觀郝陲——仮設

本部には32人の兵士がいる。作戦を立てた後に、そこから5つのチームに分散して行動する。基本的に2人で行動する。』 「その場所はどこ？」 『花花巷——ここは『領域C』の13-01だな。

嗚呼、そのまま北へ進めば辿り着く。』 「どうだ？」 「ええ、確かに嘘は言っていない様子ですね。」

「テレパシーの反応も虚無ッ。ていうか『海の民』は能力を持たないんだろ？」 「油断は

禁物。息子と同じように感覚で位置と方角を理解しているのだから、この際は『無能』も侮れん。」

肌に着した血を拭き取る私の横では、パディマティスの父親と心理を探索する人間が大柄な男を囲み、慎重に尋問を続けている。彼は立場を弁えているのか、脚の手当に敬意を示しているのか、妙に正直だった。やはり、彼は素手の戦士すらも手強いことを知っている。

・ ・ ・ 前回の奇襲では「想定される敵の行動」が考案も共有もされていないという問題が致命的な敗因に繋がった。こうして皆が町を脱出できたのは、素早く有事を判断して「地下通路」に潜ったが故である。——ただし、私たちが無事に発見されたのは奇跡的だった。

「全く、ヘルメットに便利な翻訳機が付いていたとは・ ・ ・これを捨てた「奴」も賢いですね。」

「そうだな。しかし彼も、相手の頭を吹き飛ばすとは・ ・ ・研究に使用せず困ったものだ。」 「話が片付けば用済みです。2人を殺めて言語と機構を解析しましょう。」

小岩に座る2人目の『海の民』は、避難場所へ向かう途中に木の上で潜伏していたとか。もう一人の兵士には逃げられてしまったが、今のところは尾行もされていない。

「・ ・ ・そう、容易く殺してはならん。」 「何故です!? そんな危険を 「人間だからだ。

我々と同じ人間だ。・・・彼らにも家族がいる。互いに殺し合えば、互いに怨み合う。・・・復讐が新たな復讐を生み、何れ無と化す。それは“核の連鎖反応”のように・・・何も手に負えなくなる。” 「・・・」 『禽芭、——全く、その通りだな。』 「ッ、・・・好い気になりやがって。」

何なのか。・・・何かを忘れている。幸い、ママと兄が別の班に合流した話は聞いている。彼らは《ティロディアクボ》という星から、この大地・・・《フォルタグルンドウ》と呼ぶようだが、ここへ来た目的は“仮設本部”の護衛だけと言う。

「皆、聞いてくれ。ここからは彼らの仮設本部を制圧する組と、東の非常拠点へ向かい隣町の民へ情報を共有する組に分かれる。戦士は8・2に、加えて《入力型》の民も能力が役に立ちそうであれば制圧に参加してくれ。」 「私は必要そうね。」 「町長、僕は行くべきですか？」 「そうだな、今回は人間を感じできる民が必須だ。」 「ワシも参戦しよう。」 「爺！ 火吹きの人老は——

身体や性格と同じように、魔法も親から子へ引き継がれていく。それは強い力を持つ一族が絶対的な支配を続ける理に思えるが、実際は力など時代と共に遷移する一つの要素に過ぎず、結局は突発的に芽生える“芯”が集団を組織する。——パディマティスの父親が見せる背中では、14年前の勇敢に立ち向かった姿と同じなのだろう。それは母が語るものではなく、彼の息子が見せた勇姿と——

「なあ、その厳つい銃を俺に撃ってくれよ。」 「正気か？ 爆発するんだぞ？」 「そう焦るな、俺の硬貨した皮膚は火力を扱う戦士よりも硬いんだぜ？」 「・・・分かったよ。ここから離れた場所です。」 「パディ！ 気を付けてよ？」 「安心しろ、この“厳つい銃”があれば何も

怖くないぜ。」 「・・・いつものパディね。」 「はああ。勇敢なのか、馬鹿なのか・・・。」

攻撃の具体的な内容は事前に通知されるらしく、それらは真上の青空に浮かぶ「居留地」から、未知の技術によって送られる。隣町に道具や家具を浮遊させられる家系を聞いたことはあるが、まさか土地すらも掌にあるとは、恐ろしい民族である。

攻撃は3部に分かれており、その第一歩として《天の杖》が周囲の町へ投下された。本来は町が跡形もなく消え去る威力であり、これが不発だったのは幸運だと言う。・・・畜生、何が「幸運」だ。次は何の「不運」が訪れる？

「・・・にしてもよッ、最近は変なノイズばかりだなあ。」 「貴方も？ 自分も感覚に違和があるんだ。」 「お前さんの能力は？」 「ああ、人の気配を感じ取る程度の能力さ。何か、1ヶ月前から潜んでいた奴らに気付いていた「勘」だった、とかね。」 「勘なんて古臭い概念を信じるなよ。世間話で留めず真面目に研究するべきだったぜ・・・ヘッ、虚無だなッ。」

—— 思い出した。彼らは時々、謎の対象へ・・・それこそ虚無に向かって会話する癖があった。いや、報告だ。私たちを殺そうとしたとき、こちら・・・「チームA」と。



古風な恰好をした大勢の村人は、何やら討論を行っている。おそらく、仮設本部の話聞いて襲撃でも企んでいるのだろう。そう噂をすれば・・・ヘルメットを外された調査隊員の一人が無防備に、

こちらへ向かってくる。生憎、彼の名前を思い出すほどの面識はない。

「・・・どうやら、互いに相方を失ったらしい。」 「お前は確か、チームCの主任だったな。」

「そう、えーっと。自分はリゴン。」 「・・・フェドだ、今更だが。」 「君ほどのタフガイが捕虜になるとはね。」 「ハハッ、こんなに自由な捕虜とは、相手も我々を舐めているようだ。」

彼らの能力を目の当たりにするまでは、確かに平和な世界とギャップが存在した。これほどのエネルギーを発揮するとは・・・いや、生命力と言うべきか、彼らの容姿には、自然と共存を図る息遣いすらも感じられる。それに、彼らは原始的な生活が似合わないほどの美顔だった。

第1調査隊が派遣された後に一戦を交えたという機密情報は教えられたが、今日まで《海の民》と呼ばれる我々に対抗できる策を備えていたことに、敵ながら安心した。・・・彼らは多くの仲間を、《ティロディアクボ》からすれば極小でも絆の強い仲間を失ったのだ。当然と云えば、そうだった。

「翻訳機を捨て、情報を守るとは見事だったな。」 「おっと、見当違いだ。自分は、彼らが攻撃されるのを防ぐために手段を絶つたに過ぎない。」 「・・・お前は、寝返ったのか？」 「いや、うーん。自分は平和を望んでいる人間かな。」 「そんな呆れた理由とは、兵士として失格だぞ。」

「ああ、そうだよな。・・・でも、貴方は命令に忠実というか・・・残酷だ。こうやって、捕虜を偽る“なんてさ。この座標、敵の勢力、全ての会話が筒抜けでさ。」 「【未知は目の敵、無知は己の敵】というわけだ。奴らに俺たちの情報を渡すぐらいなら、俺たちも奴らの情報を送るのが最な務めだ。そんな忠誠心を持たない曖昧な奴は、何の役にも立てない。お前も家族を忘れてしまったのか？」 「・・・確かに、翻訳機を捨てたせいで彼らの言葉が分からなくて困ったよ。・・・翻訳機

の仕組みは、知っているだろう？」 「本部のサーバーを介して、声質を保持しながら翻訳を・・・そうか。記録に反逆行為を残さない工夫は、誉めてやろう。」

「自分は、真に平和を望んでいる。家族を守る。彼らを守る。貴方も気付いているだろう？ ここは“資源”を目的に襲われていることを。」 「俺はリスクを冒したくない質でね、愛すべき家族の無事を第一に動いている。お前は“板挟み”ではなく、国と彼らに“挟まれている”現実に気付いたほうがいいぞ。訴えられてしまえば——」 「承知さ。だから、こうして説得している。・・・変だと思わなかったか？ 君は“ここに來て初めて僕の状況を知った”ことに。」 「——まさか。」



「・・・！ 来るぞ！」 「えっ？ 来るってn 「複数人の気配！ 全方位から！」 「！」

隣で笑談していた男の叫びを境に、皆が態勢を整えた。私は銃を構えて、静まり返った周囲に耳を立てる。—— 僅かに聞こえる茂みの音。それに気付いた私は銃口を、そして皆が一斉に氣を向けた。

「・・・おつ、うわ！」 「パディ！」 「俺たちは敵じゃねえよ！」 「何だ・・・ 「違う、

君たちじゃない！」 「・・・。」 「多いぞ・・・6人以上だ。」

事態を察したパディマティスも銃を構える、しかし町長は、小声で策を提案した。

「最終手段だ、例の波動で奴らの攻撃を封じるぞ。」 「いいのですか！？ アレを使うと・・・

「やむを得ん、ここで死ぬよりはマシだ。」 「・・・了解。」 「近いぞ！ 78メートル！」

「すみません・・・皆さん、耐えてください。」

「2人とも、銃を捨てな。」 「・・・何をするの?」

「ない能力——だが、14年前でh 「39メートル!」

「《グリッチ》だよ。ほとんど使い道がない能力——頼んだ・・・ガリン、メアンメト。」

眼帯の男が呪文を唱えた瞬間、多くの人間が身体を“固めて”しまった。中には全身が痙攣する者、頭を抱えて唸る者、発作に耐えられず嘔吐する者、その数秒間は、無機質な阿鼻叫喚・・・そんな単語に相応しい光景だった。

《無能》の自分には何も分からない。隣のパディマティスやマエレは意識が危うく、《グリッチ》を発動した彼も自滅したのか、体力を使い果たしたのか、失神してしまった。それは人に留まらず、稲妻が走った銃も同様に影響を受けたと思われる。これが、14年前に発揮された——《海の民》が持つ魔法を無効化する能力なのか? ——間もなくして敵は茂みから姿を現した。我々の自滅を期にしたのか、ヤケクソ気味で銃を構えるも、そこで彼らは銃が壊れていることに気が付いた。

「!?ッ!」 「鏝鉄! 鏝鉄ッッッ!」

その大声に、敵は背を向けて逃げ出した。しかし早期に回復した戦士は、散り々に逃げる《海の民》を全力で追い駆ける。彼らの多くは脚が速く、鋼鉄の身体に体当たりされた敵、豪速の石を投げられた敵、そんな鈍い音が聞こえる最中、あちらの奥では明るい炎が揺らめいている。湿気が少ない今の時期に火を使うとは、後々の消化が面倒だろうに・・・。

「はぁ・・・これで“また”敵の手掛かりを失いましたよ。」 「命が助かれればそれでいい。機械は敵の仮設本部にある。そこで新しい情報と技術を手に入れるのだ。」

「ちえッ、この銃も壊れたのか。役に立つ武器だったのに。」 「いいじゃない、方角が分かるだ

けで《無能》の私よりも役に立つんだから。」 「いい度胸だ、《入力型》の逆鱗を・・・」 「皆、捕虜がいない！ あの大きな男が！」 「！」 「野郎、ドサクサに紛れて逃げやがった！」

次々と戻ってくる戦士と、担がれたり引き摺られる《海の民》に、その男は見当たらない。しかし彼には武器も防具も———そうか、ヘルメットは味方同士で交信するための道具なのだ。既存のテレパシーではなく、生の声で会話や報告を行っていた。機能が壊れて連携が取れなくなったのだから、彼らは大声を出した。偵察の気配もなしに全員が私たちを囲んだのも・・・嗚呼、そういえば大男は座標らしき数字を口にしていた。———そうだ、こちらの情報は全て漏れていた。

———と、いうことです。」 「・・・翻訳機“もあれば、通信機“もあると。何と、安全の管理が甘かった。」 「仕方ないよ親父。14年前も、奴らの全貌が分からなかったんだろ？」

「・・・そうだな。・・・しかしだ。リスクを冒す分だけ絶える命は増え、リスクを冒さなければ後に駆逐される運命にある。その判断を下すことは・・・とても、重いんだ。」 「・・・。」

「勝ちますよ、いや、何が何でも生き残りますよ。私は《海の民》を間近で見て、勝敗は魔法でも情報でもなく、絆というか・・・「集団の意思」が決め手だと悟った。」 「・・・ほう。」 「彼らも、人間でした。欲望に忠実な者もいれば、確固たる意志で動く者もいる。全員が全く同じ目的を持つことはないでしょうけれど、彼らは・・・戦争を始めた“本当の目的“を、何一つ語らなかった。いや、知らなさそうだった。」

私たちの言葉を聞いた町長は膨らみのある鼻髭を摩りながら、最後に深い息を吐いた。

「・・・どうやら、時代は進んでしまったようだ。」 「・・・？」 「リクレアが疑問を抱いた

『集団の意思』というのは、社会の規模で『希釈』されてしまう。その目的が社会の利益になる内容でも、個人や集団が不満に思うのなら、意思は成り立ちにくい。——彼らは知らないんだよ。」

「・・・そうなら、どうして奴らは目的もなしに俺たちを殺そうとする！？」 「存在するのさ、

『本当の目的』が、それを持つ人間が・・・私は『罪』を持たない人間を殺したくない。お前も、何れは分かる。社会の長として判断を下す苦しさだ。」 「・・・。」

パディマティスの父親は私たちに苦惱・・・理論を語り終え、再び戦士たちと会議を始める。彼の話聞いたせいか、妙に憂鬱だった。私たち・・・特に、大切な何かを失われた人々は、誰を憎むべきなのか？ 兵士？ 頭領？ 戦争という概念？ 憎むべきではない？ 何をするべき？

乾いた土に踵を押し込み、私は空を見上げた。そこに浮かぶ『居留地』まで、いや、彼らの故郷である『ティロディアクボ』まで行かなければ全ては解決しない。鳥のように空を飛べる人間は聞いたこともないが、目の前にいる『海の民』は何かを知っている。知らなければ、学ばなければ。町長のような指導者を気取っているわけではなく、ただ、恐怖を感じて生きたくない。自分が『無能』でも、それが人の強さと無関係であると思いたい。だから私は——地図を作り続けていた。

「・・・私も、仮設本部へ行く。」 「レア、お前は・・・」 「行きたいの、魔法は関係ない。」

「・・・彼らの気持ちを知るには、私も彼らから学ばなければ。」

T I P・・・魔法に頼った原始的な生活が垣間見える《フォルタグルンドウ》ですが、実は私たちが知る歴史の常識とは大きく異なり、その一例として出生率が2以下（推定）と異様に低かったりします。彼らの生命力について以前のT I Pで話したと思いますが、一生が安定しているので平均寿命が高く、それ故に先進国と同程度の出生率でも問題なく社会が存続されます。その他にも産業革命を成さずに高度な技術の一部を持っていたり、ほとんどの民族が飢餓を経験していないなど、魔法の存在を知らなければ意味不明な歴史が刻まれています。

あれから疑問が晴れないまま、新しい一日を迎えようとしている。午後の仕事を終えて皆は自室へ帰るも、精神の居心地が悪い自分は夜食を平らげた今も《情報端末》を片手に居座っている。

閲覧可能なデータベースやレポートには別の言語と思しき情報など見当たらず、《保存者》が公開する資料には古の文化や歴史と関連する古代言語の研究も僅かに記述されているが、そんな不便な言語を暗号や流行として使う理由はない。

昼頃に聞いた声を軍人として仮定しているのが間違いなのか？ あれは《保存者》のグループで、《フォルタグルンドウ》の肉食動物を駆除する最中に《前人類》の遺跡か遺物でも発見して、今から《保存者》が現場へ向かうとか？ しかし肉声を翻訳する意味は何だ？ 対話可能な記録媒体が残っているのか・・・まさか《前人類》が生きていたのか？

とにかく、何かしらの事情があるのは間違いない。もしかすれば、第1調査隊は《前人類》に助けられて全滅を免れたのかもしれない。虚しいほどの憶測だが——その可能性は捨てられない。

小皿にカトラリーを置き、人気の少ない《通行搬送帯道》を歩き、薄暗い明りに包まれた道を潜り抜けた先にあるのは、兵器開発1課の研究室・・・本格的に調べなければ、その真相が何であれ、辿り着くまでは眠れそうにない。《科学者》が知る必要のない情報でも、それは自分の決意となる。

知りたい。この失踪感、この違和感を埋めるために、IDカードを鍵へ翳す。灯りも付けず自分の机に《情報端末》を接続する。給湯室へ行つてはコーヒーにバター入りのミルクと大量のカフェインを加えて、それを飲みながらバックライトを放つ《ペーパー・モニター》へ血眼を走らせる。ブラウンザーとノートを往来して約1時間——日付が変わる寸前、ふと、一つの情報に目が留まった。

04. 受け継がれる使命

「被験モデル・・・《再生者》の可用率・・・？」

それは、《フォルタグルンドウ》に生息する肉食動物の詳細な情報と、様々な兵器を用いた攻撃が与える威力の予想やシミュレーションが纏められた資料だった。軍事省のデータベースに保存されているものが、何らかの不手際で科学省の人間にも公開されている。

その中に記されていた《再生者》という項目・・・そんな役職は初耳だった。《治療者》でもなく、《再生者》という単語で正しいのか？ しかし《再生者》の注釈を発見したとき、謎は更に深まった。

「これは能力に関わらず、全ての《旧人類》が獲得した・・・種族を表す別称である・・・？」

・・・《旧人類》とは何だ？・・・《前人類》ではなく？これも誤字なのか・・・いや、綴りが全く異なる。生き残りの《前人類》を《旧人類》と呼んでいる？それも変だ、わざわざ区別する理由がない。それに、この資料が作成されたのはタイムスタンプからして20年も前だ。《旧人類》の存在は既に確認されていた？それなら、その存在を極秘にする意味は？機会を伺って公開するつもりなのか、それとも、何か不都合があったのか・・・。

・・・《再生者》という単語を素直に受け取るのであれば、今日まで生き残った彼らは何かしらの

特別な自己治癒力を持っている？ 待てよ、前提が間違っているのかもしれない。《旧人類》とは、人間が持つ本来の能力を解放した《新人類》という・・・憶測の憶測など無意味だ。関連する情報を集めなければ。文字列が含まれる他の資料を—— おひゃん うん

「！？ あ・・・すみません、残業中です。」

突如として扉が開く音、そして微かな足音が聞こえた。暗闇の中で画面を眺める自分に、警備員が不信を抱いたのだろう。こんな説明も厳しい状況に・・・まずはIDを示さなければ——

「・・・サイロ？」 「そうだ。・・・こんな時間に、何をしている？」

そこには、薄暗い姿の彼が僕を見下ろしていた。光を反射する眼鏡が、余計に不気味であった。

「えっと・・・今日みたいなミスや不手際がないか、探していたんだ。何だか不安になってね。」

「・・・そうか。」 「逆にサイロは、どうしたの？」 「・・・嗚呼、オクデιβ。君も、その資料」

「に辿り着いてしまったのか。」 「・・・！」

迂闊だった。彼は既に、情報が丸見えの《ペーパー・モニター》を凝視している。自分が下手に法を犯している内容へ。しかし——その口調は、嘘を吐いている僕を見透かしていた。

「え？」 「《旧人類》の正体は、どこまで分かった？」 「え、いや 「隠さなくていい、スケ」

プトほどの人情はないが、同じ仲間だろ？」 「・・・生き残りの・・・《前人類》か？」

「疑っているのか、正解だよ。・・・《旧人類》は《フォルタグルンドウ》の世界を生きる——

2000年前に《新人類》と別の道を歩んだ人類、それが答えだ。」 「・・・知っているのか？」

「そうだ。・・・2年前から、全て知っている。」 「・・・。」 「・・・知りたいか？ 真実と

か言われる、そんな情報を。」

サイロは唐突に、自分の核心に迫った。平静を保ちたいが、謎だらけの情報に脳は混乱を起こしている。彼は陰謀論の信仰者ではなく、本当に何かを知っている？ なぜ、知っている？ そして彼は——敵なのか。いや、彼は——僕に何かを望んでいるようだった。

「・・・知りたい。」 「そうだと思った。・・・初めに断っておくが、今から話す情報は誰にも話すなよ？ 分かるよな？」 「・・・まあ、そうだよな。」 「独り言も、決して、口にするな。」

お前が必要になったら、その時はインカムを細工してやる。」 「細工？」 「ノイズを加えて音声の・・・それは後だ。覚悟して・・・黙って、俺の話を聞け。」 「・・・分かった。」

サイロは唾を呑み、口を開け、話を続けた。その内容は社会や経済などの規模ではなく、これまでの歴史が覆るほどに大きな——事実だった。《フォルタグルンドウ》に隠された《旧人類》の過去と生誕、《ティロディアクボ》に潜む賢者の謎、《移住計画》が持つ2つの目的、全てが——脳に刻まれてしまった。その1時間は知を得る幸福よりも——居所の分からない苦痛が続いた。



「話以上だ。」 「・・・。」 「・・・泣いているのか？」

これは、何を示す感情なのだろうか。今まで自分を欺いていた世界に対する恨みか、世界について何も知らなかった自分に対する恨みか。ただ、どうでもよく、ただ、悲しかった。

御伽噺だと思いたい。しかし、その物語は映像や音声で記録されている。緑色に染まった大地と、そこで繁栄した《旧人類》の村々。その幻想は、衝撃を合図に崩壊を始める。その全ては、軍事コロニーが目撃していた。

「・・・もう、遅いのか？」 「・・・いや、計画の第2部が継続されるなら、彼らは今も奮闘している。」 「嗚呼・・・今にでも終わり・・・駄目だ、このまま・・・畜生ッ。」

5人の賢者が「誰」なのかは完全に不明であり、サイロが賢者というわけでもない。ただ、賢者の名を継ぐ者は2000年前から《フォルタグルンドウ》に住む《旧人類》を、魔法という力を普遍的に持つ《旧人類》を知っていた。そして、彼らは《旧人類》を排除するために《移住計画》を企て、同時に侵略を進めていた。それが、社会の指導者が持つ使命の一つであった。

今日の世界が在るのは、過去に——魔法が使える《旧人類》の迫害によって我々が《テイロディアクボ》へ辿り着いた故なのか、魔法が使えない《新人類》こそが本当の戦犯なのか・・・誰が悪いのか、何が悪いのか、それはサイロも知らなかった。——誰も知らないから、今が在るのだろう。

自分は何をしたい？ 何を思っている？ 信じられるのは自分か、賢者か、もしくは歴史か——

「・・・そうか！・・・だから昨日、追加パッケージで武器を無効に——」「無効？ 昨日の入れたプログラムには、小細工も何もないが。」 「・・・え？」

「武器を使えなくしたところで、どうなる？」 「・・・。」 「どうにもならない・・・責任は俺たちが負うことになる、戦場では別の兵器が導入される、それで死者の数は変わらない。俺たちは・・・何もできない。考えもなしに動いたところで、迷惑が増えるだけだ。」 「・・・。」

自分は何もできない？ 何も思っていない？ 戦争を知らない無知な自分は、意味がないのか？

「・・・サイロは、どうしたい？ この、今の状況を。」 「何だか、人任せだn 「違うッ！

・・・分らないんだ！ 誰も悪くないのに、どうして争う！？ 何が悪い！？」 「魔

法。・・・魔法という概念が、悪の根源だ。」 「何故！？」 「力が大きすぎるんだ！ 一人が持

つには膨大すぎるエネルギー・・・それは「神」にも成れる、制御不能な「神」になッ！」

「・・・」

2人は大声で感情を投げていた。ふと、客観的な視点を取り戻し、同時に様々な恐怖を思い出す。

今——人工物に囲まれている全ての空間は、危険なのだ。・・・議論や行動は慎重でなければ。

「・・・それは、消せないのか？ 少なくとも、残酷な方法を避けてさ。」 「・・・無理だな。

人間の意志ではなく、物理的に不可能だと云われている。そもそも、魔法という存在が謎に包まれて

いる。」 「・・・これは「弱肉強食」なのか？」 「・・・」

理とは、何なのか。異端なのは賢者ではなく自分？ いや、それを大衆に隠し続ける経緯には大衆

の不満を予知しているはずだ。これも理？ 正しさとは、個人の尺度に過ぎない？

「・・・《新人類》と《旧人類》、どちらに付く？」 「・・・？」 「《新人類》が《旧人類》

の家畜とは言わないが、少なくとも対等にはならない。文明人を気取る今の《新人類》も《旧人類》

を「動物」として比喩している。」 「・・・何が言いたい？」 「自分は《新人類》だから、生き

残るために《旧人類》を排除することは否定しない。手を汚そうと、身を守るなら否定しない。」

干渉するな——と言えば【悪の根は早めに刈り取れ】と返されるだろう。この計画は自分の社会

を守るため、あるいは未来の社会を保つために存在する。—— 違ふ……《新人類》と《旧人類》は、異族でも——同種のはずだ。

「……本当に……本当に、彼らは脅威か？」 「……俺は、そう思う。」 「そう」思うだけで、僕たちは《旧人類》に幻想を抱いてないか？ 火災を放射すること、物質を変化すること、それは科学を知る《新人類》にもできる。だから、今も両者は「奮闘」している。そうだろう？」

「……魔法は、武器を持たない俺たちを脅す武器だぞ？」 「そうだよ！ 魔法だって未解明の科学の一つだろ？ 科学を知らない彼らも同じだ。何も、特別なことじゃない。」 「……。」

宗教が廃れる中で科学が生き残り続けたのは、全ての結果が時間も場所も関係なく「平等」に実現するからである。この世界に確かな魔法が存在すれば、それを……科学が受け入れてはならない。

「武器は、現実存在する。問題は——それを使うことだ。」 「……？」 「【武器が自他の運命を平等に扱う】意味は、使い方ではなく持ち方こそが本質なんだ。」 「……。」

「互いに武器を構えれば、それでいい。それが、——『平等』を成立させる。」 「……！」 「……お前は賢いな。……そうか。……そんな未来も、悪くない。」 「『恐怖』なんだ。

互いの武器を互いに知らないから、むしろ突き進んでしまう。科学を知る《ティロディアクボ》が、未知を恐怖に思うなんて——滑稽だ。」 「……本当の恐怖を、見るべき……か。」

「敵を知る——それは戦うためではなく、守るために。」 「嗚呼……良い考えだ。俺たちは……俺たちこそが、科学を忘れていたんだな。」 「……そうだね。」

世界が科学で説明されるのであれば、人間が存在する限りは諺も不滅なのだろう。数値や具体を持

たない諺は、曖昧でありながら——多くの問題を解決できる道具だと悟った。

「それでも今、俺たちにできることは少ない。情報もなければ、解決も」「今からだ。ここで無理なら《フォルタグルンドウ》で動けばいい。それは——

この時を、不意に望んでいたのだろうか。今の自分には、妙な決意が芽生えている。

“諺”とは——両親が自分に残した唯一の本であり、2人の会話に必ず登場するものだった。今なら、その意図が分かる気がする。時空を超えて伝えられた知恵、それを議論する父と母は——

「第1調査隊。彼らのように、自分は・・・《フォルタグルンドウ》へ、行かなければ。」



口では物事を容易く言えるが、それを現実にするのは難しい。地上すらも見たことのない自分たちが、1億キロメートル彼方の惑星へ行けるのだろうか、そんな不安を憶えている。多少の宇宙工学を理解しようと、経験がなければ知識は本能的な恐怖に冒される一方である。

命を危険に晒す覚悟、法の一線を超える覚悟、それらは決意と対峙する。例えば今、自分の全身に滴り落ちる水は、惑星の重力から解放されるとゼリー状で宙を漂うらしい。液体とゲルに境目は存在しないが、2つの状態には異なる名称が付けられている。自分は今、そんな存在しないはずの“膜”を無意識に求めている。

日付が変わり数時間後、シャワーを浴び忘れていた自分の体は共用の入浴室で温水に叩き付けられ

ている。汗の一つも出ない快適な環境で毎日のように体を洗う習慣には疑問を抱いているが、どうも、体を洗わなければ精神的に落ち着かないのが人間の性らしい。

温水、洗体、温水、洗顔、温水、そして乾燥。——次は、2つ目のフェーズである。《フォルタ

グルンドウ》へ行くという目的は無謀に思えるかもしれないが、《ティロディアクボ》の軍は物資や武器を現地へ供給するために輸送船を定期的に送り出している。そして、《移住計画》の第2部では《FF》や《MRG》を使用するために大型の輸送船を使用すると予想している。そこに潜り込めば、それだけで目的を達成できるのだ。・・・片道切符になるかは、状況次第となるが。ヤァ

再び温水を浴びながら、その具体策を考える。船はどこにあるのか、そもそも、船の容姿すら不明である。加えて出発日時も非公開とされているが、《双破空間飛行法》を駆使しても惑星間の移動に9日は掛かるというのだから、現状を考えれば明日にでも出発したいはずである。ただし、今日も《MRG》の最終試験に関する報告が来ていなければ、少なくとも2日後、それまでに侵入の目的を立てればいい。簡単・・・と憂いなく思いたいが、どうにも、その先の見通しは立ちそうにない。

無謀な計画など人生で一度も立てたことはないが、素人目にも情報が不足しているのは明白である。サイロは世界の歴史や政府の現状に詳しい。しかし、全てを把握しているわけではない。更に言えば、情報のソースも曖昧である。確かに情報は真実を示しているが、それらは彼が収集したものではなく、名も顔も分からない——“ニープ”と名乗る者が、彼に提供したものである。ヤ

それでは、サイロが選ばれた理由は？ 確かに彼は一流のソフトウェア設計者だ。《広域通信網》から《幽霊線》を伝って彼女に出会ったのだろう。一方で、ニープが真実を教える理由は？ 立場が

弱いから他人を頼るのか、政府に革命を起こすための選別をしているのか、——政府が革命を防ぐために戦犯を炙り出しているのか。・・・考えては駄目だ。誰かの思想ではなく、その【事実が自身の心を動かす】のだ。ヤッヤ

鏡に映った心許ない自分の頬を叩き、上に向けた顔を手で洗う。今は、母船に乗り込む計画だけを考えるのだ！ 2日後・・・いや、明日までに。自然な流れを意識しろ。——兵士は《MRG》の扱い方を熟知していない。性能評価に伴い実際の威力を映像として残しているが、安全装置の解除が複雑で・・・いや、それは顧問の仕事か。ならば、仕様の手違いが発覚したと報告を・・・すれば、自分が、それどころか1課の面目まで潰れてしまう。ヤッ ヤッ ヤッ ヤッ

目立つような行動は禁物だ。全身に満遍なく纏わり付く温風のように、自身もノイズの一つとして振る舞えば、案外、気付かれないものである。・・・そうだ、科学省と軍事省が合同で使用する施設で在りながら度々、進入が禁止される場所——工房。中でも“F”が含まれる個所は最近になって制限が多くなった。これが輸送船の入出と連動している可能性は高い。兵器の搬入は——ヤッ

「イ——さあん！」 「オクディブさん！」 「!? は、はい？」 「すみません、服を着てからで構わないので、個室から出てもらえますか？」

温風が収まると、唐突に誰かの声が壁上の隙間から投げられた。入浴室から脱衣室へ移り、湿気が残る身体に袖を通して、扉を開けると——そこには見慣れぬ、薄暗い制服を着て・・・後ろで腕を組む2人の男性が立っていた。

「どうかしましたか？」 「嗚呼、こんな時間に申し訳ないです。貴方が開発している《MRG》

について、幾つか聞きたいことがあると、至急の連絡を頂いたものですから・・・「あ、そうですね。分かりました。」

このタイミング・・・つまり、出航が一刻を争っている。おそらく、最終試験で発見した疑問点を払拭する段階だ・・・好都合すぎる。ここで《MRG》の行先を追跡さえすれば、確実に乗り込むことができるのだから。

「ああ、そうだ。同僚に連絡を・・・」必要ありませんよ。先程、サイロという方に伺って来たので。事情は話してあります。」「そうでしたか、それなら——」「大丈夫ですか?」「嗚呼、最近、立ち眩みが酷いもので。ハハッ・・・」

自分は、今の違和感を見逃さなかった。洗面台へ向かう自分に対して、頑なに背後を見せない彼らを。組んだ手を崩さない彼らを。そして、対面の鏡には・・・銃を隠し持つ彼らの姿が、写っていたことを。顔を洗おうと屈んだとき、僅かに服の擦れる音が——彼らは、銃を腰に仕舞った。

「失礼しました、では、行きましょうか。」「こんな時間に、ありがとうございます。」

一人は案内のために先を行くが、対して別の男は自分の背か横を維持して歩く。嗚呼・・・これは逃走を阻止する態勢だ。彼らは自分が勘付いていることに勘付いている? 待て、サイロは無事なのか? 整合性を保つのであれば彼も他の要件で尋ねられているのか、それとも・・・。

自身の平静な様子、その内部では、絶えず鼓動が響き渡る。こうして偽るということは、変に事を荒らしたくないのだろうか。ただし、無暗に動けば酷い仕打ちが待っている。ついには1課の研究室を通り過ぎた。今は人気もない。

彼らは何者か。考えられる最悪の想定は・・・今までの会話が筒抜けだった？ 右耳に掛けているインカム——しかし、研究室を出てからは何も喋っていない。あの空間は、物理的に全ての電波を遮断している。《通信網》にも強力な《防御点》を設置している。穴は存在しないはずだ。

それとも、例の資料を閲覧したのが原因か？ これは単純な取り調べなのか？ 違う、あれこそが餌だった？ ここから何処へ・・・嗚呼、ここから如何すればいい？ 何か、行動しなければ。

「それにしても、珍しい制服ですね。軍事省の方ですか？」 「これ、実は最近の《移住計画》に伴って作られた所属なんですよ。カッコイイでしょう。」 「なるほど、確かに、センスが良い。」

彼らはプロなのだろう。その話し方は何の変哲もない、普通の人間と云えるものだった。しかし、何とも言えない視線を感じる。自分の行動は全て、読み取られている。今は、何もできないと——

「あら、オクディブじゃない。」 「・・・え？」

その時だった。——何故か、ストゥが正面を歩いていった。こんな夜中に？ しかし理由を考える間もなく、彼女は一直線に、僕に抱き着いた。

「もう！ 部屋を尋ねても居ないんだから・・・今晚は“逃がさない”よ？」 「ほ、ほら、人前でそんな「じゃあ、戻って——」「すみません、彼には重大な用件があるので・・・今日は、お引き取りください。」 「ちえ、仕方ないわ。ごゆっくり！」 「ま、また、明日・・・今日？」

初めに断っておくが、ストゥとは濃厚な愛撫を交わす関係ではない。布越しにも伝わる柔らかい胸を押し付けられた今の出来事に・・・鼓動が高ぶる理由すらも分からなくなってしまう。妙な口調と耳元に囁かれる言葉が・・・もう！ 今のは何だ？ 帰ったら、無事に帰ったら問い詰めて——

「・・・・・・」 「・・・・・・」 「・・・・・・お熱いな。」

嗚呼、気まずい。・・・・いいや、ストウの行動には意味があるはず。同僚を茶化す様子ではない。その行動、その言葉に何か・・・、彼女が自分の腰に、白衣の内側に手を回したとき、何かをシャツとズボンの隙間に差し込んだ気がする。触感で確認はできないが、それが腰の違和感として伝わる。居ない、逃さない・・・・ゆっくり。これも何かの暗示？ そうだ、今の状況と妙に合致している。これはサイロによる指示なのか？ それともストウは今の状況を一瞬で悟った？ 確実に、そうだ。

『――。』 「・・・・・・」 『――。』 「・・・・・・」

微かなノイズがインカムを伝い、小骨と小骨を震わせる。これは何だ、自分に宛てた音なのか、男の通信が漏れているのか、ただの偶然か。・・・・次々と訪れる非常な現象に、もはや、考える気力も枯れてしまった。何一つ真面に予想ができない。・・・・畜生。非力だ、無力だ。

彼らの一転する警戒を恐れて《情報端末》にも触れられず、偶に無機質な言葉を交わしながら歩みを続けていれば、気付けば、自分は配管が張り巡らされた工房まで・・・・違う、更に奥へ。色温度が変に高い照明と荒いコンクリートで包まれた、全く縁のない場所に辿り着こうとしている。

「・・・・えーっと《MRG》は工房に「すみませんね、貴方を“そちら”ではなく“あちら”に向かわせろとの指示なので。」 「・・・・その、“あちら”とは何処なのですか。」 「・・・・誰も立ち入ることのない、“特別”な場所です。」 「・・・・あ・・・・ッ。」

TIP・・・《ティロディアクボ》の地下には血管の如く道が複雑に延々と張り巡らされていますが、そこに住む大半の人間は地上の様子を直視することなく、青空や星空の美しさに触れることなく一生を終えます。陸地が少ないという理由で地下に都市を構えているではありません。海面が9割を占める《ティロディアクボ》は大規模かつ不安定な気流・気圧の変化により暴風と暴雨が絶えず、晴れた地域には太陽風が容赦なく当たり、変動の少ないスラブが由来して水には重金属や塩分が多く含まれています。そんな環境だからこそ、《新人類》は生きるために技術を磨き上げたのです。

黄昏は消え去り、木々の隙間から見える夜空には無数の星と虹色の幕が広がっている。しかし奇妙なのは、一つの見慣れない、赤色の星だけが流されず——あれが、彼らの居留地なのだろう。14年前に彼らは浮遊する移動手段を利用して、この地へ降りた。逆も然り、それを利用して、私たちは居留地まで行けばいい。情報の手と脅威の制圧が、この戦いを決めるのだ。

仮設本部へ襲撃に向かうのは、パディマティスやマエレといった《入力型》の民を含めて25名。こちらには“気配を感じる男”や“暗闇を見る女”も付いているのだから、敵地を掌握するには申し分ない。敵は既に8……いや、7名も確保している。あの男……フェドという名前らしいが、連絡手段が絶えた彼も仮設本部に向かったと考えるべきだろう。

「先が開けている、迂回するぞ。」「了解。」「——今の音は!？」「大丈夫、ただの小動物だ。他に……! 微かに気配が見えるぞ。あれは敵というより……仮設本部そのものだ!」
「本当か?」「嗚呼、慎重に行こう。」「……この銃、意味あるか?」「ハツタリでも、使えればいいのよ。」「爺! 口を開けるな! バレるぞ!」「すまんのう……眠い。」

私は……町長と比べれば頭脳は劣るが、数術の力は誰にも負けない。こうして隊に入っているのは——嗚呼、私を止める者……私を留める者がいないのか……。家族と合流していれば、私は来なかった。本当は家族に会いたい、しかし、今——それ以上に私の好奇心は強かった。故郷と隣人を壊した憎しみは、好奇心の動力源なのか、好奇心が抑止力なのか、とにかく利用したかった。

私たちは警備を一人、また一人と静かに気絶させる。こうして、私とパディマティスは先程と少しだけ形の違う銃を手に入れる。ただ、その重量は——人を殺すには充分だった。

05. 単調な事象と混沌の世界

仮設本部の周囲は粗方、音もなく制圧することに成功した。次の段階では《入力型》の民が少人数で偵察を行い、それ以外の《出力型》の民は遠方で待機する。しかし——ここからが難題だった。

「つまり、貴女と同じく奴らも暗闇を見ることができるのか？」 「ええ、確実ではないけれど、明らかに普通ではない光が一面を照らしている。」 「・・・うむ、まるで分らん。」

彼女の助言に従い施設の周りを慎重に探索するが、何処にも抜け穴はない。気付かれずに奇襲は不可能・・・そうなれば、如何に迅速な制圧を——

「上はどうだ？」 「上？」 「木々を伝って天井から侵入するんだよ。上に光はないんだろ？」

「そうだけれど・・・。」 「その木々は、この有様だぜ？」 「・・・。」

パディマティスの妙案に、皆は意見が分かれた。目の前にある仮設本部は普通の森林を無理矢理に開拓した場所であり、その周囲13メートルは木や草が綺麗に刈り取られている。樹木の頂上から飛び降りても届きそうになく、金属のような素材に包まれた天井を突破できるかは未知数であった。

「内側から突撃できる、唯一の方法だぞ。」 「だよねえ・・・僕たちの行動が筒抜けだったということは、今も警戒しているはずだよねえ・・・。」 「ここ辺りで倒した敵を考慮しても、残りは

14人。向こうからすれば、自陣を全力で死守しないと間に合わないはず。」

「人質を盾に正門から入るのは？」

「躊躇なく味方の頭を撃ち抜く連中だぞ？」

「内部が見え

ないから、情報もなしに突入は——

「皆！一度、待機している組に合流するべきよ。ここで議

論しても埒が明かない！」

「……。」

マエレの意見に全体の熱が下がり、私たちの組は戻ることにした。既に外部は制圧したのだから、今では怯える必要もない。それでも早く——だが、男の声を境に全員の肝は冷え切った。

「——いない。」

「？」

「もう一つの組が、見当たらない！」

「……道の間違えも——いいや、何かが、起きている！」

確かに約束した場所は、蛻の殻だった。抗争した痕跡は見当たらず、連絡役を担う双子は——

「……違和感……これだ。」

「な、何がだ？」

「……。」

「……。」

「……。」

本当はいるんだ！ 奴らの技術でえ——

「逃げろッ！ 分散だッ！」

「……。」

誰かの指示に、私を含めた全員が四方八方へ走り出した。攻撃されている。昼間に見た派手な攻撃ではなく、静かに人を——いや、殺されたとは思いたくない。思いたくなかった。

「……。」

「……。」

後ろを走るバディマティスだろうか、彼は逃げながら、標的も分らず銃を乱射した。おそらく敵

は私たちの能力に検知されない何かを——とにかく、ここは初めから敵の掌であった。

フェドだ。尋問を受けた彼が《入力型》の能力を伝達したのか分析したのか、その弱点を利用して。彼は既に潜んでいた。先を読まなければ——このままでは、一方的に不利だ。

「パディ！ 湖に！」 「えっ、えっ！？」 「とにかく！」 「ハア・・・ハア・・・待つてよお！」 「マエレも！ 早く！」 「えっ。ええっ——、」

私たちは水面を靡かせないよう慎重に、少し冷たい水に全身を沈ませた。暗闇を見ていた彼女が気付いた光——それを“利用”しているのならば、その“弱点”も同じはずだと予想した。森林の中よりも更に暗い空間を、未だ、未だ、刻々と——嗚呼、——違う、私は闇の中へ落ちていたのでない。何もできないのではない。今は・・・間違ではない！

「——ブハッ。」 「・・・。」 「マエレ、抱き着くと泳ぎにくいだろうッ。」 「・・・泳げないんだもん。」 「・・・寒い。」 「・・・行き成りで、ごめんね。」

対岸へ辿り着き、ゆっくりと服の裾を絞り上げる。周囲は暗闇で、静寂で、誰も——いいや、夜が明けるまでは留まるべきだろう。

3人は其処の茂みに隠れて、震える体を寄せ合った。そうすると気持ち安らぎ、思考ができ

る。・・・そろそろ、雪が降り始める時期・・・皆よりも寒さに弱い私は、服を重ね始める時期である。・・・その着物は、先程まで隣にいた姉妹が作ってくれたものだ。しかし、今は灰となり、そして、雪が積もり——

涙を流していたのは、全員だった。次々と隣人が消えていく——次は私かもしれない。このまま攻めることも、無事に返ることもできない。動くことは許されず、夜を越しても敵が引き上げる保証

はない。絶望的な状況に・・・涙も枯れてしまった。

「・・・もう、眠りたい。」 「・・・嗚呼、眠りましょう。今は、何もできない。」

何か起きて、何もできないしな。・・・眠ろう・・・全員で。」 「・・・そうね。」

パディマティスの言葉に、私は肩の力を抜かした。ここにいるのは《入力型》と《無能》の子供である。武装した彼らに二度も勝てるはずがないのだ。

閉じた瞼は、二度と開かなくなるかもしれない。だが、もう——思考をしなくなかった。



「・・・。——うん・・・。」

深く閉ざした瞼を、日光が貫通する。それは夜明けまで生き残ることができたという希望であり、絶望でもあった。——乾いた瞳と陽の間に臆気な人影が往来する。——しかし、それはパディマティスやマエレではなかった。

「ッ!？」 ぎぎ 「・・・。」

握り続けていた銃を男に向ける。それは緑色のスーツを纏った——明らかな敵であった。しかし彼は私の反応に、両方の掌を私に向けた。それは武器を持っていないという・・・態度・・・?

「な、何なのッ!」 「・・・。」 「・・・んうう。・・・レア?・・・ひゃ!？」

一時の騒ぎに、マエレが起きた。いつの間にか、パディマティスも静かに状況を呑み込んでいた。

しかし、男は無言で私たちを見詰めている。何故なら、その頭部にはヘルメットが存在しなかった。

「・・・私たちの言語は通じない・・・。」 「おい、奴は敵だぞ！ 殺すか、何かの餌に――

「ダメよ、何も攻撃を―― 「いいや、それが罠なんだ。俺たちを――

私たちは混乱している。男は緊迫した眼で、そんな私たちを観察している。・・・何を目的に姿を現した？ なぜ攻撃しない？ なぜヘルメットを被っていない？ 分からない。ただ・・・緩んだ頬に、顰める眉は、その表情には――敵意が感じられなかった。

「――違う、明らかだ！」 「そっちこそ、感情を―― 「止めなさいッ！ ・・・確かに、

彼は信頼できない。でも、罠だったら――このまま生き延びられる確率は、皆無。・・・まずは、情報を探しましょうよ。――彼の目的を。」 「・・・。」 「・・・そうだな。」

彼と言葉でコミュニケーションを行えないが――彼は樹木が少ない平原に座り込み、水平にした手の中指を特定の方向に向け続ける。・・・何かを伝えている？ ・・・その方向へ向かいたい？

「・・・奴は、後ろに続いて行けと？」 「・・・そうみたい。」 「・・・行きましょう。」

その背中、その周囲を警戒しながら、ゆっくりと男の後を歩み続ける。森を行き交う空気は冷たく、澄み切った朝焼けが私の右頬を照らす。それは僅かながら――心地が良かった。昨日の出来事が夢であると、そう思えた。そう思わなければ、何も気が進まなかった。

「・・・“フエド”。」 「・・・。」

パディマティスが、不意に名前を呟く。・・・嗚呼、そうか。

「違うわ、多分・・・リボン“ね。”」 「！」

確かに、彼は反応した。そう——リゴンという男も、ヘルメットを被っていないかった。

「何となく関係性が掴めた。・・・リゴンとチームを組んでいたのは彼だ。そして、2人は何故かヘルメットの着用を避けている。」「そうだな。・・・でも、変じゃねえか？ その帽子がなければ会話ができないのに、意思疎通を図ろうとする？ 矛盾するぞ。」「きつと、理由があるのよ。ほら、レアが言っていた『通信機』とか、何かのせいだ。」「・・・確かに。そうかも。」

「・・・パディ、行先は分かりそう？」「ああ、どうやら、仮設本部とは違う場所らしい。地図は——」「・・・ごめん、水へ浸かる前に隠した。」「・・・いや、どうせ、現在地も何も分からないからな。」「・・・。」

喉は乾き、腹の音が今にも鳴りそうである。それでも、昨晚の悲劇に比べれば大した問題ではない。手足が震えようと、肩が痛かろうと、彼の後を歩み続ける。その道程は、仮設本部を迂回するように冗長的であり、時折、彼は腕を見たり、私たちと同様に辺りを注意して——ついに、足が止まった。

「・・・何なんだ、あれは——？」「・・・巨大な鉄・・・いや、巨大な銃？」「そんな、巨人でも・・・居るのか？」

目の前には、複数個のオブジェクトが在った。銃口のような穴、細かな格子の穴、左右対称の『それ』は、鳥に似た硬い翼を生やしており、全体が滑らかな鼠色に塗れている。いや——

「乗り物だ。これが、『飛行機』と呼ばれる移動手段だ。14年前の戦争で——これが、空から私たちを攻撃した。」「飛行機・・・なのか。・・・敵ながら・・・見事だな。」「・・・もしかして、私たち・・・マズい状況じゃない？」

何のために、彼は飛行機を披露した？ 考えろ！——まず、情報を与えてくれた。私たちを有

利にするためか、それとも勝ち目がないことを示唆しているのか。もし「これ自体」を与えてくれるのなら、確実に前者であるが——まさか、敵の居留地や《ティロディアクボ》へ行きたいという私の願望が読まれている？ いいや、それならマシなコミュニケーションができるはず。

32人は確実に運べる大きさ——これで兵士や武器を運搬したと予想する。仮設本部の奇襲も容易く、居留地へ足を踏み入れることも……そう仕向ける理由は？ 私たちに手を貸したところで、彼には利益も何もない。理由もなく敵へ加担するはずがない。しかし、問うことはできない。何が、彼を……動かしている？ 何を……信じるべき？

「——レア！ レア！」 「……あ、ごめん。」 「奴は——少なくとも、脚を撃ち抜いて拘束するべきだよな？」 「まさか、協力してくれる彼には感謝するべきよ！」 「まだ何も、感謝することはしてないだろ？——恩もない、赤の他人が理由なく敵に手を貸すはずがないだろ？」 「逆よ、理由があるから、私たちに接触している——」「……まだ。まだ、判断するべきじゃない！」 「……。」 「……。」

皆、精神が参っていた。結論を急ぐのは、悪い結末を迎える前兆である。確か、そんな諺も——そうだ……そうだ。あの大男は、私たちに馴染みのある諺を幾つも知っていた。それは偶然でも、可逆的でもなく、時間や空間を超えて——共通した要素を、全員が持っている。それが歴史——或いは真実ならば、その中に戦争を仕掛けた理由が隠されている。そして、彼が味方を裏切る理由も隠されている。——見つけなければ。その、今に繋がる全てを。

「パディ！ マエレ！ 広い視野を持たなければ——」

カカカ

「・・・フフフ。」 「な、何よ！」 「お前の頭は冷静でも、体は正直だな。」

嗚呼、恥ずかしい。2人はともかく、リゴンの相方まで私の腹の音に対して笑うとは・・・これで場が和むのは、何か嫌だ。

ふと、彼は懷に縫い付けられた入れ物から、何かを取り出した。それは・・・金属の膜に覆われた棒状の・・・まさか、食料なのか？ それを私たちに差し出した。

「ん・・・それは、御飯？」 「正気か！？ どう見ても食べ物ではないだろ！」 「だったら、何よ？」 「レアも騙されるな！？ 奴は、俺たちが金属を食べる種族だと思っているんだ！」

戸惑う私たちに応えて、彼は何と、金属の膜を破った。すると、黄土色の固形が姿を表して・・・それを自らの口に、そして頬張った。食料である・・・毒が含まれていないことを示している？

再び、次は複数本の食料を私たちに差し出した。・・・私が恐るゝ棒を手に取り、彼を真似して袋を・・・破れない。苦笑いした彼が袋を器用に破ってくれたので・・・そして——

「・・・！？」 「大丈夫か！？」 「美味い・・・美味い！」 「・・・。」

未知の体験だった。少々の湿気がある硬いパンには「甘い」という表現で正しいのだろうか、舌が溶けるような味で満たされていた。空腹よりも刺激を満たすために、次へ、次へ、口を頬張り続ける。私の様子に驚く2人も、同じように彼から食料を貰い——正気を失った。

「ほら、感謝する理由ができたでしょ？」 「んう、これは餌付けだ。むぐむぐ——奴の罠に、敢えて引っ掛かって、むぐむぐ——」 「貴方も、体は正直ね。」 「クソッ！ 美味え——。」

男は甲高い声で喋る私たちに微笑み、追加で食料を与えてくれる。しかし、それは瞬く間に消えてしまう。憎むべき相手のはずが、この時ばかりは救世主か——それ以上の存在に思えた。

世界の全てが虚構であろうと、私に生み出される感情は現実だった。真実よりも・・・確かだった。



『蠢英苔——久しぶりだな、少年少女よ。』 「!？」

それは、突然だった。以前にも聞いたことのある、乾いた声色——脱走したフェドが、私たちの後ろに聳え立っていた。

「わざわざ逃げ切れたのに、姿を現すとは愚かね。」 『芟鼬氏——お前が知る戦士の中に、背

を向けて戦場から逃げる者はいないだろう?』 「・・・正々堂々と戦わない貴方たちに、そんな志

があったの?」 『・・・』 「・・・」

当然ながら、両者が銃を構えている。以前よりも正確に、感情を殺しながら。数秒間の沈黙が続き、微風の往来と同時にフェドが口を開けた。

『萌花苔——ところで【良い隣人と悪い隣人】という諺は、知っているか?』 「さあ、そんな

言葉は聞いたこともない。」 「・・・何が言いたい?」

『鄒荀韜——同じ立場でも、異なる態度で2人が接する状況。例えば俺と、そちら側に立つ“誰か”のように。』 「・・・」 『英苓英——しかし、それは個人の感情や思想ではなく・・・

そこに相手を潰け込む「計画」だと考えたことは、ないか？」「……貴方だって、私たちを騙す

立場にいるでしよう？」「お前は【雨雲が生み出した水面は青空を偽る】という諺を、知っているか？」「それ」の上位互換だよ。」『……』

確かに、初めは罠だと考えた。一方が嘘を吐くのであれば。しかし、彼が――

『詭笑』――確かに、俺は味方ではない。味方を裏切る人間でもない。しかし、俺は――「敵へ不当な苦痛を与える人間」が何よりも嫌いだ。俺を殺せるものなら、殺せばいい。それが不可能であれば、俺が殺してやろう。だが、お前たちの側にいる「偽者」は――厭らしく、殺すだろう。」「そんな意味のない話を、誰が信じる！？」『芟芟』――だからこそ、変だと思わないか？ 有益にも無益にもならない話を、伝える意味を考えろ。」「……』

『覽資』――何故、攻撃力のないお前たちが選ばれたと？ 何故、輸送機に案内したと？ 誰がそれを操る――」
 へんけん

会話を遮るように、パディマティスは彼の脚を撃ち抜いた。以前の銃とは性能が異なるのか爆発はせず、焦げた穴から黒い血液が流れ続ける。

「言葉で示すよりも、行動で示したらどうだ？ 次は頭を吹き飛ばしてやるぜ？」『……』
 彼の脱走により新たな死人が出たのだ。その憎しみは、一人の死では納まらないだろう。

不思議にも、フェドは一切の反撃をしなかった。顰めた顔で地に膝を付けるが、依然として態度を乱すことはなく、何か呆れたような表情に変化する。

続いて、男がフェドのほうへ向かった。彼は高い声で何かを説きながら、ゆっくりと近づき――

その内容は分らないが、フェドは言葉返す。

『・・・蕨薺酢——《フォルタグルンドウ》を守るために裏切りを提案したのは——リゴンではなく、お前だろうか？・・・このッ、腐れ切った研究者がッ——

最後に、男はフェドの顔面へ蹴りを入れた。頭は弧を描き、瞬く間に地面へ倒れる。気絶したフェドの銃とヘルメットを剥ぎ取り、こちらへ・・・彼が喋ると、その声が、同じ声帯で翻訳された。

『蝦仁酸——醜い争いをして申し訳ない。彼は悪い奴じゃないが、今は良くない状況だった。』
「・・・。」『芻扎芾——そうだな、僕が持つのは不安だろう。彼の銃は君に渡そう。使い方は

分かるね？』「え、ま、まあ・・・。」『躑躅弦——自分を信頼してくれて、ありがとう。察しているかもしれないけれど、僕はパラモ、リゴンの相方だよ。』

彼はフェドと対照的に、口数が多く、口調が軽かった。若者という雰囲気、舌が回り続ける。

『錦苳諺——彼に気付かれたので、時間が無い。続きは輸送機に乗ってからだ。』「待つて・・・どうして、貴方は私たちに協力するの？」『猊秀鏑——契約内容と違ったものでね。

この悲惨な状況を生み出した「軍事省」に教えてやるのさ。平和とは、何かを。』「具体的には、何をするのさ。まだ、俺は疑い続けるぜ？」『花苳蠟——この輸送機で仮設本部を攻撃して、残

りの装備を君たちに渡そうと思っている。安心してくれ、これでも運転に必要な「免許」を持っているんだ。』「・・・そうか。」『譽苳笔——急ぐぞ、このヘルメットは情報——
ベリタ

パディマティスは何の前触れもなく、引金を力を込めた。先程と同じように、至近距離で撃たれたパラモは脚から血を流した。同時に大声で痛みを吐き出して。対してパディマティスは冷静に、彼の

頭からヘルメットを奪い、それを遠くへ放り投げた。

「パディ！」 「気でも狂ったの!？」

「・・・そうかも、な。・・・奴の裏切りが他の兵士に

伝わるなら、しかも全員が非力と分かれば、我先に“ここ”へ駆け付けるだろう? その時に“輸送

機”でも使って反撃すれば、俺たちは確実に勝つ。少なくとも数は減らせられる。」

その言動から、彼の面が町長に近づいた、いや、同じものだと気付いた。誰より頭が切れている。

全ての情報を基に最適解を見つける——これが、遺伝子なのだ。

「ただ——レアが言ってくれたように、焦りは禁物だな。」 「・・・変なんだ。・・・14年

前に、俺たちは争った。彼らが姿を晦ました後に“銃”を発見した、そう名付けた。なのに、——

どうして“銃”という単語が翻訳できる?」 「!」

言われてみれば、彼らは私たちを——知りすぎている。いや、それが敵の実力とも言える。

「・・・そういう魔法じゃ?」 「違うな、銃も帽子も“機械”で作られている。魔法とは異なる

存在——だが、両者には“規則”がある。」 「奴は俺の思考を読み取れなかった。彼らの前では

“銃”など一言も発していない。しかし、正しく認識していた。・・・誰も、信用できない。」

フェドやパラモの真意は分からなかった。それは、この戦争が・・・単純ではないと教えている。

「・・・つまり?」 「結論は・・・ない。ただ、——最近の狂気よりも、変な感覚だ。」

TIP・・・台詞は意味を持ちますが、無言も意味を持っています。この小説は精度よりも興味に惹かれる内容が優先して描かれるため、抽象的な表現が多いと感じるかもしれません。しかし、物語とは多くの教訓や本質を教えてくれる存在であり、それは大勢に簡潔に伝わらなければ意味がありません。どうせ、時間と共に高度な情報は劣化します。この物語も、一人の友人が残した小さな物語に影響されたことで、描いているのですから。

目の前には、暗黒の空間が・・・古びた施設や建設中の廊下とは別の、異質な空間が広がっている。それは薄暗いというよりも——黒を貴重とした一本の道だった。

「・・・ここから先は一人で、お願いします。」 「・・・え？」 「そういう指示なのです。私

たちは「賢者」と対話できない掟なのです。」 「・・・尋問は？」 「何か心当たりでも？ 残念

ながら私たちは「賢者」の使者ですよ。」 「・・・こんな自分が、何故？」 「それは、彼らから

聞いてください。」 「・・・。」

不幸中の幸いか、彼らは秘密警察ではなかった。しかし・・・この時期に「賢者」が自分呼び出すのは、明らかに変だ。《MRG》の詳細などは仕様書や実物を見れば済む話である。・・・いや、今は考えるべきではない。たとえ《旧人類》の根絶やしを企む者々であろうと、ここまで導いてから肅清するとは考えにくい。——友好的であれば損害はなく、敵対的であれば自分が有利な「何か」を握っている。シンプルな条件だ。

二重の扉を通り抜ければ、遂に外界と隔離された。先程よりも視界は役立たず、その明暗ではなく雰囲気は恐怖を覚えながら、角に浮かぶ光を目安に歩き続ける。

・・・誰かに見られている、そんな感覚が恐怖の正体だと気付いた。赤外線カメラ？ 生物的な眼光？ とにかく、歩行が加速する。ストウが腰に挿した棒状の何かを手に取り、走り続けた。無造作に握ってみるが、どうやらボタンは存在しない。

次第に眠気が、感覚の麻痺が、そんな——意識が曖昧になったと気付いた、が、その刹那に視界が暗黒ではないことに気付いた。

06. 歴史を紡いだ遺産

「・・・何だ？・・・何が起きた？」

確かに、先程まで暗闇を歩いていた。しかし、そこ・・・ここは一面が・・・そうだ、地平線の先まで、浅い水面が地に張っている。その上には青空が、横雲が、それらを照らす——太陽が、視界全体に広がっている。・・・その光景に見惚れていたせいか、目の前に立つ少女へ気付いたのは最後だった。黄緑色の髪と瞳・・・左右非対称な瞳に、黒いワンピースを着た、裸足の少女が。

「・・・君は、誰？」 「うーん、説明しにくいね。・・・賢者といえは違うし、でも、そういう立場だから・・・ね。」 「・・・じゃあ、この景色は、何？」

「好奇心旺盛で何より。貴方は現実世界から別の世界に意識が移ったの。大丈夫、死んだわけじゃないよ。」 「・・・ど、どうやって？ どうして？」

「そういう種類の気体や機械が存在するのよ。どうして失神させたかって？ これが手っ取り早い。対話とか、判断とか。」 「・・・そうなのか。」

この体験は、決して容易くはない——貴重なものだった。・・・だからこそ、疑いは深くなる。
“これは高度な尋問ではないか”と。

「それじゃあ、本題を教えてよ。どうして僕を“連れて”きたのか。」 「そうね。・・・でも、

“今の貴方”に用事はないの。・・・“他の貴方”が教えてくれたから。」 「・・・え？」

「貴方の意識は、並行してホストされている。つまり、貴方は何度も“ここ”に訪れては私と対話している。」 「・・・そんな、それなら、その記憶は？」 「あら・・・鋭い質問。そうよ、現実

に帰ると“今の貴方”だけが、記憶を持ち帰ることができるの。幻想的な体験と、懐疑的な自分だけね。」 「・・・そうか。・・・それなら、私が敵か否か？ 別に、気にしなくていいの。現実

が答えを教えてくれるんだから。ここは“マトリックス”じゃないの。」

何故、いや、どうやって彼女は自分の質問を予想した？ 嗚呼、自分の意識を読み取っているの

か・・・違うッ、この解答は彼女が自分に“直接”書き込んでいる！ この思考は声として出力されている。貴方の素として。呪文で謎を解き明かすことも――

「止める！ 僕の思考を弄るな！」 「フフッ、可愛い性格ね。――私の友達として傍に置こう

かしら。どう？」 「・・・!？」

ふと、彼女の横には僕がいた。これも、彼女が造っている。そうだ、自分は既にデジタルなデータとして取り込まれている。だから――全ての辻褄が合っているのだ。

「帰してくれ！ 現実世界に！」 「本当に？ 他の貴方は、この景色を更に――」



「・・・ッ!？」

自分は、直前の自分を思い出した。・・・ここは、現実世界か?・・・嗚呼、そうだ、他の自分が彼女に、名も知らぬ賢者か誰かに尋問されていたのだ。・・・何もかもが——分らない。

ここは赤色の光に包まれた、異質な空間だった。八角形の天井から、視点を下げると——自分は仰向けで寝ていた。頭が“動かない”のは、謎の半球体が頭を覆っていたからだ。それは医学で使われる《抽象機器》か——おそらく、更に進んだ技術で作られている。

自由な手足でヘルメットから抜け出して、視覚よりも触覚を頼りにベッドから降りる。幾何学的な形をしたベッドだが——それは、地面から“生えて”いた。それ以外に、幾つか棒状の——地面に収納されていたであろう機材が姿を表している。・・・全てが赤色に染まっているが、おそらく全ては白色のオブジェクトだ。

自分は同じ白衣を着て・・・だが、ポケットの違和感が消えていた。自分の《情報端末》とストウから貰った棒・・・インカムまで盗られている。それらしい戸棚もないため、探す宛はない。——そもそも、扉が見当たらない。自分は何処から入った? ガスで眠ったらしい自分の身を、誰が運び入れた?

「おーいッ! 誰かーッ!」 「・・・。」

発した声は壁に反響するばかりであり、何かを期待するのは無駄だと予想する。・・・つまり自分は飢え死ぬまで・・・ここに閉じ込められて?

「ッ!・・・落ち着け、・・・落ち着こう。」

ひとまず、壁に仕掛けがないか隅々を調査する。戦場まで乗り込むには短い時間だが、命が尽きるには長い時間である。指に力を込めたり、IDを翳したり——2面、3面と次々に進むが、何れも何も見つからない。

「・・・現実が答えを教えてくれる・・・現実が・・・。」

これは、意図して閉じ込められている？ いや、確か、彼女が喋った最中に“何か”が起きた。今の状況は・・・想定外だ。自分が異常な行動をしたわけでもない。それなら別に、自分に罪はない。

彼女は、何者だったのだろうか？ あれは賢者に似た・・・賢者全員の意識が融合した姿？ それとも賢者とは異なる人格？ 少なくとも別の世界・・・“仮想世界”とでも名付けようか、その世界を制御している言動だった。

他にも数多の訪問者が対話を行い、そして彼女を忘却したのだろう。だから誰も賢者の実態を知ることができなかった。おそらく、直前の自分も本来は“存在しない”はずだった。・・・そもそも賢者は5人なのか？ もはや、何の情報も信頼できない。

そんな《上級社員》が求めていた情報——自分は、別に《フォルタグルンドウ》と《ティロディアクボ》の真実を知ったぐらいだが・・・大した情報だな、嗚呼。ただ、それなら情報源のサイロを・・・ニーヴを尋問するべきでは？ 彼らよりも警戒心が薄いから？ 彼らこそが“真の敵”で、自分に駆け引きを？ 駄目だ、誰の情報も信頼できない。

虚無に感傷する最中、謎の機械音が空間に響き始めた。飛び出していた機材が次々と地面に戻り、自分が調べたはずの壁に穴が——扉が開く。ただ、照明は赤色を保ったまま。

「オクデイブ！ 行くぞ！」 「え・・・サイロ！？ 荷物が――」 「止む無しだ。時間がないぞ。」 「あ、ああ、分かった。」

原因も理由も分からない。しかし、状況が変わった今、信頼できるのは不気味な空間から逃がしてくるサイロだけであった。

2人は一直線に道を走る。104メートルはある道を――白色の通路を駆け抜ける。

「なあ！ どうなっている！？ どうして、走る！？」 「お前は、消されるはずだった！ 真実を隠す奴に狙われている！」 「・・・そうなのか。・・・そうだよな。」

彼の話信じるならば、これは尋問ではなく葬儀だったらしい。情報を確認して、確実に粛清する・・・まさに、完璧な方法だろう。

「――どこへ！？」 「どこでもいい！ とにかく《廃線》へ行くぞ！」 「分かった。」

馴染みのある廊下へ戻れば速度を落として、彼は《情報端末》を片手に経路を辿る。賢者の使者は既に居らず、表示されないはずの《廃線》を把握しているサイロは・・・特別な存在なのだろう。

ここが軍事省だろうと構わず、彼のIDで扉が開く。それよりも彼が気にしているのは、全ての廊下に設置されている監視装置だった。区間は閉鎖されないため、今は機能していないらしいが。

「・・・話してもいいか？」 「俺も聞きたいことが山々だ。」 「サイロは、あの後に何を？」

「お前が何も言わずに消えたから、追跡したんだ。」 「嗚呼、ストゥが持ってきた装置は、それだったのか！」 「・・・いや、お前の《情報端末》だぞ？ ストゥが何だって？」 「え・・・突然、棒状の何かを渡されたけれど。サイロの指示じゃないのか？」 「あいつは何も知らない。畜生

が、状況は更に複雑か。」 「・・・僕は黙っておくよ。」

ストウの立場は？ 彼女が僕を通報した？ それとも第三の勢力？ いや、彼女こそがニーヴなのか？ —— 無駄な仮説だ。サイロが把握していなければ、信頼するべきではない。

筋肉を追求する軍人と擦れ違うことも少なくなり、ついに居住区域を通り抜けた。しかし・・・気は抜けない。人気の少ない廊下で良い噂は聞かない。稀に、立証不能事件が起こるものだ。

「お前は、あんな場所で何をしていた？」 「そう、変な奴に連れて行かれてさ。何かと思えば賢者に対話させられたよ。」 「・・・は？」 「賢者か分からないけれど、意識を仮想世界にコピー

されて、多分、他の自分が—— 「ちょっと黙れ。情報量が多すぎる。」 「ああ、ごめん。」

「つまり、お前は賢者に追われているのか？」 「うーん・・・少なくとも、味方っていう立場で

はなかった。」 「クソ・・・じゃあ、賢者が敵だよ。お前のIDが全て“消されている”んだからな。」 「え・・・え？」 「話は後だ、行くぞ。」

気付くと、2人は工事中の廊下へ足を踏み入れていた。鉄柵を飛び越えて、サイロに続いて作業室の用具を拝借して、再び紆余曲折する道を進めば、そこには明かりも何もない虚空が—— 賢者の部屋よりも薄暗い廊下が続いていた。

「・・・これは、スケプトが逃げ出しそうな場所だな。」 「ハハッ・・・僕は既に克服したよ。

酸素が切れるのは、御免だけれど。」 「・・・行くぞ。」

マスクを被り、ランタンを垂らして、吸い込まれるように闇を進む。ここで何か問題が発生すれば、それは即ち死を意味する。子供時代には必ず“灯りがない場所へ行くな”と教えられる、そして《空

間恐怖症》や《暗闇恐怖症》の大人が誕生する。・・・経験しなければ、恐怖は消えないというのに。前後は区別できなくなり、サイロの《情報端末》だけを頼りに難なく進む。最適化される以前に建設された分岐点、沈黙するエスカレーター、更に奥へ行けば——前世代の言語で書かれた看板も出現した。今日の言語よりも文字種が少ない代わりに、濁音が付属している。・・・歴史が正しければ、これが《フォルタグルンドウ》で話されていると、そんな思考を巡らせていけば、ついに《セーフ・エリア》へ辿り着いた。——ここは、災害時に利用できる頑丈な空間である。

『ここで、休む。』（了解。）

端末と手話で合図を取り、機械式の引戸に設置されたバルブを全力で回した。錆び付いた油圧の音が刻まれると、その隙間から空気が流れていく。内側のバルブを回せば音は静まり、傍の非常装置を作動させればレトロなランプが点滅を繰り返す。これは——化学的に酸素を補充しているようだ。

「——ふあ。・・・臭いな。」 「・・・久しぶりに、足が痺れたよ。」

粗い地面に腰を下ろすと、一斉に気が抜けた。緊張が解けた自分は様々な感情に刺激される。元の生活に戻れないという不安、後には退けないという焦燥、それはサイロも同じだった。

「・・・どうして、自分を助けてくれた？」 「そりゃ・・・オクディブが釣られると、俺も釣られるからな。これが『運命共同体』ってやつだ。」 「・・・ハハハ、ありがとう。」 「な、何が可笑しい？」 「何か、サイロの嘘は分かりやすいなあーって。」 「ハア!？」 「普段は冷静な

声色が、すぐに変わるんだもん。」 「・・・。」 「普段は冷静な

「・・・ここから、どうやって生きる？」 「安心しろ、何とか『亡霊の手配書』さえ取り消せば

自由に行動できる。俺は軍事省まで侵入した“ハッカー”だぞ？」 「・・・頼もしい。」

サイロが腰からガジェットを取り出す間、自分は今後について考えてみる。・・・むしろ、失うものがないからこそ、今こそ『フォルタグルンドウ』へ行けるのかもしれない。両親や妻子も居ない身で・・・兵器開発1課の保障は、饒舌なスケプトが何とかしてくれるだろう。

結局のところ、何が正しいのかは分からない。しかし、正義を放棄するのは正しくないと考え。既に僕たちは賢者と小さな戦争を起こしている。それが何の罪かは知り得ないが、死に値する情報を得なければ、その死に納得すらできないのだ。

「駄目か・・・ここは完全にオフラインだ。」 「・・・戻るしかないか。」 「それしかない、が・・・その前に、情報を整理する。」 「そうだね。」

自分は武器を持った使者に連行されたこと、ストウが意味深長な何かを渡したこと、そして、賢者と奇妙な形式で対話したことを伝えた。彼もまた、自分が“何も言わず”姿を消したこと、後にIDが抹消されたこと、しかし、その全貌が掴めないことを教えてくれた。それ故に、輸送船の正体や場所を調べることはできなかった。

「問題は、オクディブが賢者を敵に回した理由だな。」 「・・・『移住計画』の真相を、知ったから？」 「あの空間は盗聴できない。他に訳があるはずだ。」 「うーん、賢者の使者が言うには『MRG』の詳細を聞かためと・・・。」 「もしかすると、結果的に前者が該当したのかもな。頭を覗かれて。」 「・・・なるほど。それなら、本来の目的は何だったのか？」 「賢者は全ての情報を閲覧できる否に・・・そもそも、賢者の実態が曖昧で嫌になる。ストウも、何が目的で夜中に

—— 「あぁッ！ “基礎技術”だ！・・・《MRG》に使われている、駆動原理が原因だ。」

「・・・俺の専門外だが、強力な磁力でエネルギーやら弾丸やらを発射するんだろ？」 「そう、電

磁気力は古典的な機構が要らないからね。でも、更に効率性と耐久性を高めるために——未知の原

理——ストウが書いた簡易論文を基に、設計しているんだ。」 「・・・そうか。《MRG》のレ

ポートに簡易論文“以上”の情報を書いたんだな。」 「・・・かも、ね。」

《MRG》のコンポーネントを設計したのは自分でも、そこに新しい理論を応用できること、その最適な仕様を教えたのはストウだった。彼女の話の基に仕様書も併せて作成したわけで・・・それが論文に“矛盾”したらしい。そもそも、電磁気力を利用する大型武器を企画したのも彼女だ。

ストウは常に、知らない“フリ”をする。それは理解が許されない天才の宿命なのか、例えば論文では“理解不能な現象が存在する”という結論で綴られている——が、本当は全て、知っているのだ。いや、自然理学を知りすぎている。それを共有しないのは、彼女が世間を恐れているのか、悪用を恐れているのか・・・おそらく、後者なのだろう。

基本的に、ストウは大凡の情報をオフラインの端末で纏めている。それ故、氷面下部に潜む情報は科学省も軍事省も、賢者すらも入手できないどころか、存在すらも知らない。それこそ、賢者の部屋に彼女の意識でも——

「・・・ストウの身が、危ない？」

「・・・。」

「ほら、自分が知らない高度な原理を彼女が教えてくれたのだから、その記憶が——」 「目的の手掛かりになると？・・・それは憶測の憶測

だぞ。賢者が求めていたのは『知識の共有』か『真実の隠蔽』だ。」 「目的が一つじゃない可能性

だってある。」 「お前も俺も、賢者に立ち向かえるほど万能じゃない。ストウシステイの立場が何であろうと、その前に自分の安全を確保しろ。欲張りは一匹も云々・・・そういう諺を知っている？」 「・・・」

どうにも、行動が纏まらない。何をすべきか分かっているはず、なのに――

戦う、何と？ 逃げる、何から？ ・・・そうだ、それを求めて『フォルタグルンドウ』へ行くのだ！ 危険なのは承知している。その決意を忘れてはならない・・・憶え続けなければ。

「今は、何も分らない。だから――知りたい、賢者やストウの目的をッ。・・・戦うかもしれない、逃げるかもしれない、それも――覚悟している。」 「・・・それが、お前の決意でいいんだな？」 「・・・初めから、そうだった。」

自分は、ただただ本当の歴史を知りたい・・・いや、第1調査隊に所属していた父と母の最期を、知りたいだけなのかもしれない。もはや、高尚な目的など関係なかった。

太陽の裏に隠れる2つの地球は、互いに沈黙する。本来は、そうあるべきなのかもしれない、が。



安置で多少の仮眠を摂った2人は、07時のアラームに、脳が溶けると噂のケミカルな音楽に叩き起こされる。備蓄されていた高濃度のレーションを平らげた後、準備を整えて『セーフ・エリア』に別れを告げる。ここから先には一切の保証がない。安全も権限も、酸素すらも。おそらく、サイロの

IDも消されている。

「いいか、まずは電波が届く距離で権限の復元を行う。そこから先は狩人が来ても『手違い』だと示せばいい。輸送船の場所を特定して、そのまま向かう。もしも《廃線》を抜ける前に狩人と会えば——それまでだ。」

「・・・工房まで近いのが幸いだね。・・・結局、サイロも《フォルタグルンドウ》へ行くの？」

「相手が悪すぎるからな。何度でも手配書は発行されて、何れは捕まる。それに・・・お前が一人じゃ輸送船も翻訳機も、何も用意できないだろう？」

「・・・ありがとう。本当に。」

「・・・。」

昨日の助言を気にして声色を整えているが、やはり彼の嘘は分かりやすい。その瞳は、仮想世界に映った自分と同じ——恐怖と興味が入り混じっている。今の自分も、そうだ。

マスクとランタンを装備した2人は、力の入った拳でバルブを回す。それは昨日より軽くも、そう感じることはなかった。暗闇が怖いわけでも、狩人が怖いわけでもない、——敗北を恐れている。それが、何よりも未知だった。

昨日よりも遠回りで、果てには違う出口へ向かっている。《広域通信網》から一切の情報が手に入らないという不便、そして不安を改めて知った。【闇は静寂という平和を齎す一方、無常という恐怖を与える】とも言える。全ての情報が失せた環境に隠れると安心するが、安心できない。そういう矛盾こそが、闇の正体なのだ。

既に監視装置の記録から逃走経路が割り出されて、未完成の廊下、そして《廃線》を複数の狩人が徘徊している頃合だろう。目的は生け捕りか、そうでないかは分からない。

(武器を拾う。) (護衛は任せた。)

自分は床に落ちていた配管の一部を手に入れる。これで狩人が携帯する《単式経銃3号》に対抗できるとは思わないが、ないよりはマシだ。対物用の《統銃》よりは圧倒的に威力が低いうえに、上部の管を変形すれば使い物にならなくなる。この暗闇では暗視眼鏡を装着していると思うが、その場合は照準を合わせにくい。近距離であれば、対等に——　だっ　だっ　だっ　だっ

「・・・！」

突如として、天井の照明が順々に点灯した。電気が復旧した、それは、つまり——

(隠れろ！) (駄目だ、引き返す！)

周囲を見渡すも、身を潜められるような空間や部屋は存在しない。息を潜める、すると道の先から微かな足音が、複数人の重装備が響き渡る。姿は見えない、しかし逃げれば足音で気付かれる。突き当りまで、そこまで音を殺して歩くには遅すぎる。どうする・・・どうすればいい！？

(・・・走れ！)

TIP・・・《ティロディアクボ》では母体が必要としない機械的な出産（人間の製造）が可能であり、人口を維持するために恒久的な運営が行われています。自然的な出産で誕生した人間を区別するような単語は存在せず、どちらにしても保育機関や教育機関といった施設単位で育ての親が存在するため、《新人類》は《フォルタグルンドウ》よりも多様な親子関係を、更に言えば国という家族に所属していると考えていました。ちなみに、オクディプの両親は血縁関係にあり、生前は家庭で生活していたそうです。

「やっばり、初めから監視されていたんじゃない？」 「そうか？ それなら、地下通路の出口で待ち伏せされていたはずだぜ？」 「2人とも、口より手を動かしなさいよ。」

パディマティスの案に従い、輸送機で返り討ち——— したいが、どうも動かし方・・・入り方すらも分からない。輸送機と云うのだから、扉ぐらいは存在するはず・・・一体、どこが入口だ？

「クソッ、奴に聞いてみるか？」 「あの仕打ちで、パラモが協力するはずないでしょ。」 「畜

生、魔法を無効化する《グリッチ》があるなら、その逆も存在しないのかよ！？」 「そんな都合の良い——— 「・・・あ。」 「・・・あ？」

「パディのスランプと関係しているのか分からないけれど、何というか・・・最近、石の光の強さを制御できている気がする。」 「制御？」 「こう——— 熟練の老人みたいに———」 「ベ、ベ、

ほら。」 「・・・はあ!？」

何と、マエレが手先の一つで容易く扉を開けてしまった。それどころか、続けて機械が動き始めて——— 恐る々る、中に入る。彼方此方が光り、謎の図形が正面に描かれたと思えば、そこに外の景色が映し出された。正面の木に縛り付けたパラモとフェドの姿も確認できる。

「何だよ、俺たちに教えろよ!？」 「だって、使い道がないんだもん。」 「・・・。」

彼女は敵の魔法を、扱えてしまうのか？ いや、元を辿れば共通した技術なのかもしれない。

「ついに、お前の能力が役に立つ日が来るとは・・・ 「コラッ、今まで役立たずみたいないッ!」 「まあまあ、【存在には価値と意味がある】っていうじゃない。」

この世界に無駄な能力など、存在しない。摂理ではなく、それは——— 遺産として存在している。

07. 形而の破壊と再生

マエレとパディマティスが前方の椅子に座り、板面に描かれる文字と図形を眺める・・・しかし、眉を顰めた2人が私を見る。こちらを見られても、私だって何も分からない！

「それにしても何なんだ？ この読めそうで読めない文字は？」 「濁音はないし、代わりに変な文字があるし、うーん・・・。」 「・・・ねえ、この機械を動かす線というか・・・」 「全てを司る部分」 って、見つけられる？ 「脳みたいなの？」 「そんな感じ、入力と出力ができる場所に行きたい。」 「脳っていうなら、重要な部品だぜ？ 容易に手出しは・・・」 「フッフ、私の数少ない得意分野よ？」 「・・・？」

私は目に見える「魔法」を持つてはいないが、それなりに使える「能力」が2個ある。一つは世界の法則が表される「数字」を利用する力であり、もう一つは結果から歴史や過程を考察する力——何と形容するべきか・・・ かん

「ほら、外れた。」 「マジかよ！？」 お前まで覚醒したのか？ 「私もマエレと同じ、直感で分かるの。」 「これが何を意図して作られたのか」 ってね。」 「もう、レアに惚れちゃいそう。」
機械も、魔法も、明確な規則と構造が存在する。それを咄いたのはパディマティスだが、私は初め

から知っていたのかもしれない。機械は如何なる状況も想定して造られている。単純であり、多様であり、頑丈であり、その全てを満たす構造——おそらく、魔法も同じなのだ。

自分とパディマティスは下がり、部品を取り除いた箇所にマエレが手をつ込み、そして・・・硬直した。目を閉じたまま、何かを深く考えている。

「何しているんだ？」 「集中している——私もレアと同じ、機械の原理を読んで、機械に呪文を与える。」 「・・・。」 「何か、地味だな。・・・そうでもないか。」 「シッ！」

30秒が経過しただろうか、マエレが姿勢を戻すと同時に、輸送機の何かが作動した。継続的な駆動音が唸り、所々の金属が軋む。

「おおっ？」 「これよ。これが、敵を返り討ちにする——武器！」

前方に投影される外の景色と重なり、新たに図形が出現した。それは、まるでパラモとフェドに照準を合わせている。外から内に響く重々しい音は、相当な威力を持つ武器だと推察できる。

「これは・・・本当に輸送機なの？」 「輸送機だって、襲われないように対策するはずだぜ？」

「・・・どうする、試し打ちでもしてみるか？」 「・・・何か、こう・・・少し卑劣な気がするような」 「・・・。」 「それなら、隣の輸送機を破壊しましょうよ。」

「いい案、だけれど・・・これ、どうやって動かすの？」 「俺の勘も目覚めてきたぜ？ この棒

を動かせば——

「・・・何も起きないけれど。」 「・・・これは、あれだ。多分、武器を動かす入力だな。」

確かに、・・・パディマティスの言う通りだと思う。無茶な操作に冷汗を掻いたが、彼が棒の上部

に付属する“引金”を押したとき、照準が赤く点滅した。・・・何とか誤射は免れた、しかし・・・何故、発射されなかった？——嫌な予感がする。

「空を飛ぶなら立体的な動きが必要になるから——右の座席にある2本の棒で動かすのよ。ここが“操縦席”で、そっちが“攻撃席”かな？」「なるほど。」「操縦は2人に任せる。俺はここで特大の銃をお見舞いしてやるぜ。」「頼むから、冷静に対処してよ？」「重々承知さ。感情に流される無闇な人間じゃあないさ。」「嗚呼・・・不安だわ。」

結局、私が右側で操縦を、マエレが中央で色々な操作を担当することになった。座席と身体を固定する装置に両腕を通して——これより、試験運転を始める。

無駄な入力が想定外の事態に繋がることを忠告して、私は慎重に2本の棒を握り締めた。これは、同時に動かすものだろう。まずは上昇して、地上と水平に旋回する。つまり・・・内側に傾ける！

「——おおお！？」「・・・浮いた。」「・・・ハハハ・・・もう、負ける気がしねえ！」

「さて、次は、旋回よ。」「頼んだぜ、レア！」

段々と入力の感度やコツが掴めた。少しだけ浮き、少しだけ離れ、機体の正面を右隣りの輸送機に向けた。続いて、パディマティスが照準を合わせる。自動で対象を認識するらしく、図形が輸送機を囲んだ。

「行くぞ、3、2、1、0！」「・・・。」「こっちか？ いや、違うな。」「マエレは、何かできる？」「待っ——」ズン

唐突に、何かが衝突した。鳥？ いや——

「西に敵！ 援軍だ！」 「了解！」

機体を左へ向けると、地上には6人程度の、銃を構える黒い服装の敵が確認できた。時間に余裕はないと分かっていたが、これほど—— ヤッ

「駄目だ！ 何も出ねえ！ ……明らかに撃てるはずだろ！？」

「——味方に攻撃できない……」

嫌な予感が当たってしまった。銃は無差別に攻撃できるが、これは何かしらの方法で敵を識別している。機体は自軍の武器で壊れるほど軟ではないが、それでも、耐えられるのは時間の問題だった。

「マエレ！ 早くしないと不味いわ！」 「あと少し、あと少しで——見つけた！ “規則”を

壊すッツツ！ パディ！」 「行くぞ！」

パディマティスが引金を押した刹那、新たな音が、銃よりも低く鋭い轟音が断続的に放たれる。地上には援軍……だった赤い物質が、木々と草原の狭間に散乱していた。

「……嗚呼……残酷。」 「……奴らは、無駄だと思ったんだろうな。……無防備な自分

は絶対に殺されないと。」 「……いや、賢い“2人”は、この場を去ったらしいわ。」

樹木に縛り付けたはずの紐は解かれており、肉片と血痕は6人分——

に怖気付いたのか、パラモとフェドは森の奥底へ姿を晦ましていた。——輸送機の扉を解錠したこと

「追う？」 「いいや……どうせ、何れは出会うだろうよ。」

脅威が過ぎ去り、機内には鈍い駆動音だけが響き渡る。3人は無言で、ただ、同じ思考を巡らす。

興奮状態が冷めてしまえば、心には罪悪感だけが残り続けた。敵という同じ人間を殺した事実——

過去は、元に戻らない。殺されることには慣れても、殺すことには慣れていなかった。しかし、受け入れなければ。覚悟したはずだ。

戦士・兵士は、命を奪う。必要なのは信念や正義ではなく、本能だった。しかし文明人は、これに最大の敬意を払う。それを教えてくれたのは・・・味方と敵の両者だった。共通する要素か？ おそらく、僅かに違う。それは・・・能力を持つ“私たち”だからこそ、敬意の本質を知っている。

「ここから、どうする？」 「・・・分かっているだろう？ ・・・行くんだ。仮設本部に。」

手先で武器が弄られると、引金で残りの輸送機は派手に爆発した。――過去は、元に戻らない。今を生きて、過去を憶えなければ、あるいは、活かさなければ。

「俺たちが行つてやろうじゃねえか。・・・空に浮かぶ拠点に。・・・天に浮かぶ惑星に。」



取引の材料か、最後の切札か、とにかく、自分は1000人を超える村人たちと歩みを合わせる。彼らに奇襲を仕掛けた兵士は催眠でも掛けられたのか、みつともない姿を屈強な男たちに担がれる。装備を合わせたら80キログラムは超えるというのに、村人は誰一人として疲れた表情を見せない。

怒りや憎しみを燃やす若者、強い口角で涙を堪える子供、戦争を理解している熟年は理性と能力を満遍なく制御している。無邪気な児童が自分に絡もうとするが、間もなく母親が引き離す。今の僕は子供にすら負けれると思うが、残念ながら“村”が“国”に勝つことは難しい。

この戦争が終われば、自分とパラモは少なからず罰を受けるだろう。《フォルタグルンドウ》の民に最大限の情報を与えようと提案したのは彼だが、それも実は嘘で、パラモには他の命令が下されていたのかもしれない。いや、それよりも前に使命感を持つフェドが僕について報告するだろう。

大気圏外に浮かぶ《人工衛星》は常に仮設本部を追従しているが、そこから《ティロディアクボ》へ情報を送信するためには物理的な輸送船が必要になる。往復には平均して20日を要するため、今は愛する母と娘の安否を考える必要はない——いや、それも考え過ぎか？ 《ティロディアクボ》は高潔を装った残酷な“生命”だが、野蛮ではない。これぐらいの不正で、世界が揺らぐなど——

《人工衛星》を見上げたとき、何かの音に気付いた。自分よりも早く察知していたであろう村人は、自分と同じく北を向いていた。唸るような、力強い低音。しかし誰よりも早く、その正体を理解した。

「——《中型層行輸送機》か！」 「ツツツ！」

鋼鉄を纏った黒い鳥は、我々を発見したのか、徐々に減速していく。あれに乗っているのは……もしかして、パラモか？ いや、仮設本部に向かった村人たちを駆逐するためか？ いや、こんなに時間が掛かるとは思えないし、そもそもアレではなく《小型庸行戦闘機》が使われるはずだ。

そんな長考をしている最中、輸送機は何度か照灯を点滅させた後に過ぎ去ってしまった。攻撃でも、接触でもなく？ あれは自分か、誰かに向けた合図だったのか？ 混乱する周囲の様子から察するに、正体不明の飛行物体か、そもそもアレが何か分からないのかもしれない。……浮遊する村人は稀と聞いている、つまり、この戦争は空を制圧する——

「うわ！？ ……！？」 「ツツツ！？」 カキ カキ キン

しかし、自分は村人以上に混乱を引き起こした。鉄の鳥に巻かれた雲のように、全ての仮説が吹き飛んでしまったのだ。なぜなら、高低差のある茂みから“2人の兵士”が滑り落ちて――

「パラモ！ それと・・・フェド！？」



町長が率いる組の生存を確認して、操縦“桿”の操作にも慣れてきたころ、ついに仮設本部の姿を目視した。生まれて初めて地上を俯瞰する――そこには沢山の気付きがあり、同時に彼らの魔法へ嫉妬した。

仮設本部は、『三ツ子山』の山頂でも行かなければ視認できない場所に建設されている。それだけ相手は深く考えている。・・・私たちの思惑など、更に分かりやすいのだろう。確かに、今のよう空を飛ばば誰でも存在を認知して、攻撃も可能である。だが、その時点で既に遅いのだ。

「・・・マエレ、昨夜の奇襲、憶えている？」 「そりゃ、嫌でも憶えているわよ。」 「敵の姿は、目視どころか能力を以ってしても察知できなかった。もしかすれば、彼らはカメレオンのように姿を眩ます魔術を所有していると、思わない？」 「・・・嗚呼！ 奴らは、もう一つの組を丸々と隠したのか！」 「そう、そして――この機械にも搭載していると、思わない？」 「流石、何がしたいのか分かった。」 「流石、お願いしたわ。」

相手の知識と技術を使い、裏を掻くことが勝利に繋がる。両者の魔法は互角だとしても、彼らの魔

法は普遍性があり、活用や応用が易い。・・・【全ての種は確実性よりも確率性を選ぶ】という諺は間違いだったのかもしれない。

「うーん、カメレオンみたいな機能はなさそう。・・・でも、これは？」

マエレの言葉を区切りに、外の景色が一変した。全体的に色が変わり——しかし、ぼんやりと何かの影が——人影だ。・・・もしかして、これは《入力型》の女性が見ていた視界？ それとも、それ以上？

「・・・動物の位置が、全て見える。」 【目には目を、歯には歯を】だな。 「・・・少し違うと思う。」

「とにかく、あれが——そうだ、20人分の影は、俺たちの組だ！」 「若干は逃げ切ったか、もしくは—— 「これ以上の犠牲が生まれる前に、行こう。」 「マエレ、まずは作戦だ。・・・敵は外に6、中に8人—— 嗚呼、仲間は地下の空間に幽閉されているのか。」 「最初に、近くの小さな輸送機を破壊しよう。」 「駄目だ。あれは俺たちが利用するべき機械だ。あの形状は、おそらく戦闘向け・・・この先、必要になるぞ。」 メグ

「無防備な彼らを殺すのは気が引けるわ。」 「そんな情けを掛けるのは—— 「ねえ！ 全員を“降参”させればいいんでしょ！？ だったら、私が説得する。」 メグ

マエレの言葉を堺に私たちは無言になり、その数秒後、機体の内側に無鉄砲な音が響き始めた。

「これを“莽蒂莓莢苻”というのね、えーっと—— 『アー、アー。・・・降伏しなさい。これ以上の被害を出したくなければ。』 「・・・。」 『私たちは、この機械で攻撃できる。無意味に

人を・・・殺したくない。』 「・・・。」

このまま、攻撃は止むと思われた。しかし、謎の言語が通信機を通じて飛び交うと——再び攻撃が始まった。彼らは、何としても負けたくないようだ。何故？ 何を原動力に？ 機体の一部が損傷したのか、甲高い人工音が規則的に鳴り響く。

「・・・もう、・・・無駄なのね。」 「嗚呼・・・これが、戦争なんだ。」 ぽ。ぽ。

歴史という書物には、我々と《海の民》の戦いが描かれる。その理由や意味は勝者の思惑によって左右されるが、戦いの本質までは描かれないだろう。なぜ、命を懸けて戦うのか。なぜ、軍を掲げて戦うのか。誰かは説明や考察を行うが、その中の一つだけが、正しいわけではない。その「集団」が作る「意思」を特定しなければ。対話しなければ。・・・今は、破壊しなければ。



土や草に塗れた2人は、周囲の村人に構わず、体勢を変えながら殴り合いを続けた。

「おい、パラモ！ フェド！ 落ち着け！」 「うるせえ！」

繰り広げられる謎の乱闘に呆れた村人たちは、2人を軽々と持ち上げ、身体を手足で縛り上げた。

「リゴン！ こいつを殺せ！ 俺たち、いや、《フォルタグルンドゥ》の敵だ！」 「恍けるな！ お前たち、いや、何人が結託している？」 「いきなり、何なんだ！ 何があった！？」

大声で飛び交う謎の言語に、人々は困惑している。ただ、自分も困惑している。

「リゴン！ お前は俺の味方か？ それとも奴の味方か？」 「・・・うーん、どちらかといえば

—— 「公正に判断してやる。正式な役職を言え！」 「えっと—— 軍事省・作戦実行部門・第18部隊です。」 「科学省との関係は？」 「特には無いけれど・・・はい。」

「奴の役職を知っているか？」 「いや、第3調査隊の編成時に知り合った—— 「本当だな？ 家族と賢者に誓ってだな！？」 「は、はい・・・。」

フェドは、何か探りを入れている。対して、パラモは呆れた表情で僕を見詰め直した。そんな様子を、周囲の村人は不安な表情で見詰めている。

「はあー、そうだよ。こいつは何も知らない。チームの雑談で俺の話に乗ってくれた、ただの『善人』だよ。」 「役職も知らないわけだな？ 軍事省・経器研究部門・第1部長・・・パラモを。」

「・・・ん？ 別に、普通じゃないですか・・・？」 「ああ、俺たちには馴染み深いな。だが、その部門は4年前に分解されて—— 親元は『完全』に消滅した。そしてデータベースも更新されたはず—— だったが、コイツは何故か、矛盾した役職を今も所有している。」

「ただの間違いじゃ？ 「コイツ」だけ」なら、そうだろうな！—— 12人。12人の野郎が存在しない役職、そして、存在しないIDを登録していたら？」 「！？」

軍事省と科学省は今世紀最大の力を有しており、《移住計画》に際して協力する—— が、実際は思想の相違で仲が悪かったりもする。曰く、科学省が既に乗っ取りを始動していると云う。そんな、馬鹿な話はないと信じたい。しかし《移住計画》の不信に乗じて、フェドは更に口を開けた。

「《フォルタグルンドウ》を侵略する目的は、名の通り移住するためだ。問題なのは、そこで何が

得られるか？ 資源、環境、そして——原住民の血と骨だろう。」

「《保存者》は、それを『歴史』と呼ぶ。《科学者》は、それを『技術』と呼ぶ、だろう？」

パラモは、図星だった。だからこそ、不気味な笑みを浮かべた。彼・・・いや、彼らは第1調査隊の意を敢行していたのだ。《フォルタグルンドウ》の民を監視すると同時に、彼らが持つ——魔法という未知の技術を知るため、盗むため、・・・おそらく、作るため。

「俺は《保存者》でも《科学者》でもないが、この惑星に関する情報は『大きな何か』が欠落していてな。人類を《フォルタグルンドウ》と《ティロディアアクボ》に分断した『災害』が何だろうが、《新人類》の知る『科学』よりも《旧人類》の持つ『魔法』が優勢なのは、矛盾していると思わないか？ 『科学者』よ。」 「まあ、それを調べるのが俺たち『科学者』の役割だな。」 「その為に《旧人類》を拉致したのか？」 「拉致とは言い掛かりな、《ティロディアアクボ》の招待だよ。」

「沈静化する方法を前代から引き継いだのか、それは良かったな！」 「怒鳴るなよ、寿命が縮むぜ？ 《ロー・ボイス》でベラベラと喋る姿は、らしくねえな！？」 観衆にでも訴えているのか？」

彼の言う通り、妙に演説口調なフェドは、様子が変だった。それは、気が違っているというよりも——言葉で何かを誘っているようだった。それは、自分よりも——大勢の村人へ。

「そうだな、俺たちの文化を知らない彼らには、何の話か分からないだろう。」 「どうやら頭の打ちどころが悪かったらしい。翻訳機もなしに——」 「翻訳機なら、これのことか？」

フェドは、胸のホルダーから、基盤が剥き出しのデバイスを取り出した。即席で作られたらしく、スピーカーと思われる大型の円盤が取り付けられている。

「何故、起動させない？」 「いいや、起動しているようだ。」 「おいおい・・・敵」ながら心配になるぜ？」 「・・・。」

おそらく、パラモよりも先に自分が気付いた。村人たちは話者に顔を向けるが、その表情は明らかに言葉を・・・数秒の遅れで理解していた。

「そういえば、調査報告書に纏め忘れていたな。・・・《旧人類》は《新人類》よりも、広範囲の音域を知覚できるという特性を。」 「・・・嘘だ・・・嘘だッ！」

青褪めたパラモがフェドに向けて足を動かすが、それも虚しく村人に抑えられる。暴れる彼を横目に、フェドは基盤のボタンで周波数を調整する。

『アー、アー。そういう—— 「わけで、俺は“誰かの陰謀”により機密情報を吐いてしまったようだ。』 「茶番は止せッ！」 「パラモ、お前は諺を知っていたな。それなら分かるだろう？」

【未知は目の敵、無知は己の敵】の意味を。」 「おいッ！ 何処へ行く！」

フェドは背後の村人へデバイスを託した後に、森の闇へ堂々と進み続ける。しかし、村人は誰一人として彼を追い掛けなかった。おそらく、《フォルタグルンドウ》の民は戦争について知り始めた。去り際に、フェド—— いや、第2調査隊の上長は、小声で僕に呟いた。

「どうやら、お前の説得に負けたようだ。だが、今から平穏を求めるには・・・血が流れる。」

TIP・・・《旧人類》は優れた能力を基本的に有しており、10Hzから50kHzまでの音域を知覚できる他に、癌細胞の完全な淘汰作用、欠如した四肢の部分的な再生、また、正中線付近の弱所を克服しているため臍が存在しません。対して《新人類》も一部の遺伝子に特性が生まれており、例えばサイロの髪は通常よりも3倍程度の成長速度を誇ります。

右足に力を入れようとした、その瞬間、天井・・・いや、あらゆる方向から機械音が鳴り響いた。

（何だ？ 何が起こっている？）

区間を閉鎖するためのシャッターが、一斉に作動した。そうか——相手の行動を静止させた後に通路を風潰しで確認する、その為に起動させたのだ。

（どうする？）（敵と距離が近い。すぐに見つかる・・・終わりだ。）

しかし、狩人の様子が可怪しい。——彼らは騙されたと言わんばかりにシャッターを乱暴に叩き続けたり、経銃を乱射する者も現れた。

（何だ？ 何が起こっている？）

その数秒後、背後のシャッターが再び動作した。その奥も、更に奥も、次々と道が開かれていく。それと同時に、重々しい換気音も響き渡る。空気が配管を巡り、やがて天井から嘯が聞こえたと思えば、段々と薄まっていく。

（空気？）（いや、毒の可能性が。）（・・・ランタンが空気を示している。）

「——ああ、新鮮だ。」「——僕たちは、この道に従うべきか？」

改めて耳を澄ますと、シャッターが作る道は想像以上に複雑な動きをしているようだった。遠くで動作していると、次は反対側で動作している。しかし、周囲から狩人が近づく様子や気配はない。

「・・・少なくとも、今は安全のようだな。」「・・・。」

マスクやランタンを下ろした手に持ち、見知らぬ啓示に従い歩みを続けた。白色の《廃線》には、2人の足音、シャッターの開閉音、ファンの回転音。そして、自分の内側で響く鼓動音に気付いた。

08. 未知という監視者

「・・・『見ている』か、あるいは『聞いている』か。」 「・・・？」 「どちらにせよ、今の環境を制御しているのは『ヤバイ奴』だ。」 「確かに、迷路を動かしてグループの行動を制御するなんて、想像も付かないな。」 「ああ、CUIだろうがGUIだろうが用意は面倒なうえに、旧式のシステムを全て動かせられる奴は滅多にいない。余程の手慣れか、—— お前が面会した『何か』かもな。」 「・・・サイロが話した『ニーヴ』っていう人は？」 「・・・かもな。」

僕たちが区間を進むと、次が開いて前が閉じる。やはり、見えない『何か』は自分たちに味方している。身柄の確保が目的か、それとも、賢者との対話を妨害したように『何かしらの利益』を求めているのか。少なくとも、自分は知らないうちに大切な鍵を握っていたらしい。

果てが見えない道は時間や体力を浪費させる一方だが、対して風景が大きく変化するようになる。嚴重に施錠されていた扉の先を進んだり、無数の支柱が並ぶ巨大な空間に妙な懐かしさを覚えたり、模様が描かれた黄色の部屋、水源も下流も分からない《毒水》が浸食した白色の部屋、そして—— 見覚えのある空間へ辿り着く。色温度が変に高い照明・・・荒いコンクリート・・・ここは、工房の近くだ。

「結局、原点回帰・・・か。」 「でも、悪くなさそうだ。成果物を貯める工房と輸送船が離れているのは、合理的じゃないからね。」 「・・・つまり“こいつ”は俺たちの目的を補助しているのか？」 「もしくは、本当に《MRG》の詳細を聞きたいだけかもね。」 「ハッ、そうすると退屈かもな。」

“バック”されたサイロのデバイスは、工房5F01の中で経路が途切れている。そして扉に迫るとき、数名の担当者がインカムに集中しながら外へ出ていく。一旦は扉が閉まるも、その10秒後に脈絡もなく静かに開いた。

「おいおい、人すらも操るとは聞いてないぞ。」 「・・・。」

開放された二重の扉を慎重に潜るが、やはり人は居ない。内部は基本的に同じであり、壁面には数多の加工台と道具、角隅には箱型の休憩室や事務室、そして、中央には数台の戦闘機・・・おそらく新型と思われる。

不審な点がないか散策を始めようとしたとき、デバイスに新たなメッセージが届いた。

「“荷台”に潜伏しろ。“船”は2時間後に始動する。」 「・・・ここで、待機するわけか。」

「おいおい、その“船”には案内してくれないのかよ？」 「30秒後に兵士が入“船”する、急げ。」 「全く、何なんだ・・・。」

再び事が複雑にならないよう、大人しく下階の“倉庫”へ下りては、構造物の物陰へ身を潜める。その後、図ったように数十人の足音が上から鳴り響く。多少は不規則であるが、その歩き方は確かに軍人の音だった。続いて、椅子や白版を用意する音——実践前の作戦会議が行われるらしい。

「・・・まさか、“これ”が“船”だと言うなよ？」 「どうやら、そうみたいだね・・・。」

扉と扉の間に挟まる妙な通路、武器や兵器を改修できる完璧な環境、そして、度重なる入出制限。

—— そうだ。自分が配属する前から、既に工房は輸送船を兼ねていたのだ。しかし、これほど大規模な機体を《双破空間飛行法》で移動させられるのだろうか？ 少なくとも、僕たちが干乾びる程度の時間——

「食糧の心配は必要ない。“船”は数時間で《フォルタグルンドウ》へ到着する。」 「・・・嘘だろ？ “君”は“超能力者”なのか？ ・・・でも、どうやって？」 「知は常に前進する。無知の貴方は知るべきだ。」 「・・・おいおい、今度は何なんだ。」

皮肉と共に添付されていたデータが展開されると、そこには理解不能な技術が示されていた。ある程度の自然理学は知っているつもりだが、それでも、発達した公式や理論に頭が追い付かない。

「・・・もしかして、“君”はストゥなのか？ それともニーヴ？」 「・・・。」 「“私”は貴方の血を必要とした。だが、今の《私》は貴方の力を必要とする。」 「・・・次は、随分と原始的な言葉だな。」 「まさに。旧式単語の《私》を混ぜるとは、不思議だ。」 「詩人氣取りか？」

「どうだろう？ ・・・教えてくれよ。誰なの？ 目的は？」

しかし、その言葉を最後に交信が途絶える。メッセージの送信元は不明と表示されるだけで、これ以上の詮索は不可能だった。一体、何者か——ただ、何となく悪い予感がした。それは“善と悪”の対ではなく、複雑に絡み合う運命が上手く解けないような、そんな感覚だった。

「・・・なあ、もしかして俺も連れて行かれるのか？ 《フォルタグルンドウ》に。」 「・・・」

うん。」 「冗談だろう？ 船やら機械を用意するとは言ったが、向こうへ行く」とは言わなかったぞ！？」 「・・・別に、手伝う場所が『何処』とは言っていないじゃないか。」 「屁理屈だ。畜生め、嗚呼・・・クソお！」 「・・・もう、行くしかなさそうだね。」 「・・・。」



12時が訪れたとき、眠気に囚われていた2人は突然の異音で目を冷ました。

「サイロ、起きろ！」 「・・・！」

僅かな振動は『ここ』が移動している証拠であり、揺られる身体は『通行搬送帯道』を思わせる。

「メッセージの続報は、ないみたいだな。」 「そうか・・・つまり『彼女』の目的は、ここまで

か・・・。」 「なぜ、性別不明なのに『彼女』なんだ？」 「ん？ ああ、ストウやニーブが脳裏

に浮かんだらしい。・・・それか、何となく文章が女性らしいと思ってる。」 「そうか？ 少なく

ともストウやニーブの『癖』には一致しない。」 「まあ・・・今更、仮名も必要ないか。」

何かが連結する音、何かが回転する音、様々な音を頼りに外の様子を考えてみるが——頭の中にある輸送船とは規模が大きく離れていることだけが分かる。そして、これが惑星間を日単位ではなく時単位で移動するのだから、もはや既存の知識は役に立たない。

科学省が噂すらもない知識や技術を軍事省が手中に収めている——？ しかし添付されていたデータが、それを裏付けている。無数の著者に知る名はなく、文章の言い回しが妙に固い点を除けば

普通の資料である。こんな奇想天外の情報が潜んでいるから、両者のセキュリティは発達していたことを、改めて実感する。

「ほら、そろそろ返してくれ。」「・・・サイロは、この情報を知っていたのか？」「いや、

初めて——では、ないな。」「？」「この書式はニーブが提供する『翻訳資料』と同じ・・・

つまり大昔に書かれて、そして封じられた情報ってことだ。」「・・・まさか、マイナス千年に、

これほど高度な内容が存在していた？」「思い出せ、俺たちの祖先は『フォルタグルンドウ』から

来たんだぞ？ 今日までに忘れ去られた技術もあれば、意図的に失われた技術もある。・・・そんな

情報を、ニーブに限らず『彼女』も持っている——つまり、宝と言える情報は散々に埋まっている

らしい。」「もしかしたら・・・ストウも宝を発掘していたとか。」「・・・かもな。」

しばらくすると音や振動が完全に止まり、自分たちの声すらも上階まで響きそうなくらいの静寂が

続いた。この状況は、何か悪い状況に移り変わる前触れか。そんな態勢を構えた瞬間に電灯が一斉に

切られる。その後に副灯が起動するも区分けされた倉庫までは照らされず、網目の窓から僅かな光が

差し込むだけである。更に悪い続報は、その後に響くアナウンスであった。

『3分後、発射態勢に入ります。直ちに指定の座席へ留まり、酸素吸引器を装着してください。』

「マジかよ。オクディブ、マスク・・・いや、ランタンはどこだ？」「えーっと、確か、この柵の

下に——」
オクディブ オクディブ オクディブ

何か、金属製のパイプが柵から落下した。その音は嫌に大きく、空気や物質を通じて静寂な空間に響き渡った。

「ツ……」 「……」

何とか光を照らすが、マスクを見つけた段階で上から足音が響き渡った。

「消せ消せ！」 「……」 「……」

位置を記憶した2人は慎重にマスクを手取るも、兵士は倉庫の廊下へ通じる扉を開いた。部屋は8個、微かに聞こえる足音は狭い部屋へ通じる扉を思い切り開き、そして閉じる。丁寧に揺れ動く光の筋、その根本には《拳銃》が握られていると容易に想像できる。

一つ、また一つ、扉が開かれる。嗚呼、奥の部屋を選んで正解だった。だが、隣の部屋まで――

「時間がない！ 撤収しろ！」 「しかし――」 「振動で小物が落ちたのだろう。勘違いだ。」

「了解。」 「……」 「……」

足音は遠のき、上階を往来する。嗚呼、危なかった。……いや、油断はできない。乱れそうな脈と肺に空気を取り込み、そしてマスクを深く装着する。再びランタンで足元を照らしたとき、サイロが端末で会話を試みた。

『彼が向かった方向は？』 （……右側？） 『右側の壁に背中を着けるぞ。』 （了解。）

2人で横並びになるが、それでも不安な要素が幾つも残っていた。重力が消えるのだから、身体を固定しなければ吹き飛ぶのでは？ そもそも、身体に掛かる重力加速度は？ 何故、空気を抜く？ いいや、全てを見通す“彼女”が導いたのだ。ここに居ても大丈夫なのだろう。

『乗員の確認を完了しました。これより、《FN層行輸送機》を発射します。』 「……」
アナウンスの後に全ての換気扇が最大出力で回り始め、埃の一つも残さない勢いで空気を吸い込み

続ける。頭の中を締め付ける感覚に抗いながら減圧を耐えると、力強い駆動が地面から伝ってきた。

（仲間は大丈夫かな。） 『兵器開発1課の話？ スケプトに任せろ。』（お前も同じか。）

しかし笑い話が終わると、一気にノイズが酷くなる。これは——外の音だ。生まれて一度も外へ出たことも、陽が出たこともない——そこは《毒水》の海と雨に満ちた空間。重力に囚われない船は、《新人類》を潜在的に苦しめ続けた地層を難なく進んでいく。

段々と速く——音と振動は更に激しく——そして、全てが消える。分厚い雲を突破した船は、今、空色の空間を飛んでいる。太陽の光を浴びながら、纏わり付いた《毒水》を吹き飛ばしながら。嗚呼、畜生、せっかくなら、その光景を瞳に焼き付けたい。しかし、想像することしかできない。一生よりも大きいエネルギーを一瞬で放つ太陽は、どれだけ“眩しい”のか。本物の空色に、本物の宇宙に、本物の惑星を、一生に一度でも一瞬でも、この眼で見たかった。

『只今より、《双転空間飛行法》に移行します。飛行時間は130分、加速時間は90秒です。』船は時間すらも変化させるほどに速度を上げるが、一方で重力や重力加速度は普段と変わらない。一体、何が起きているのか、その感情は不安であり、同時に興味でもあった。この世界には知らないことが多すぎる。だから、知りたい。美しい世界も、見難い世界も、その全てを。

「知は常に前進する……。無知の貴方は知るべき……。知は、常に……。」



「僕も《フォルタグルンドウ》に連れて行ってよ！」 「後悔するぞ？ あそこには、分厚い皮を纏った巨大な肉食動物が住んでいるんだぞ？」 「そんなもの！ 《庄式銃》で一発さ！」

「オクディヴ、ママとパパは、仕事をしなくちゃいけないの。」 「僕もしたい！ 太陽の光で植物を育てるんだ！」 「ハハハ、それだけ知識があれば、オクディヴも活躍できそうだ。」

「はぁ・・・一体、どこから知識を拾ってきたのやら。」 「さあな、僕たちの会話を聞いて育ったんだ。その賢さは、お母さん譲りかな？」 「もう！・・・でも、オクディヴが大人になれば《フォルタグルンドウ》で仕事ができるわよ。」 「本当？」 「ええ、その為に、ママとパパは惑星の身を調査するの。・・・その頃になれば、武器も必要なくなっちゃうけれど。」 「えー。」

「オクディヴは、どうして、武器を使う？」 「だって、敵を倒さないと、僕たちが倒されちゃうもん！ それと・・・カッコイイ！」 「その敵が、言葉を喋っても？」 「・・・うーん。それは駄目かも。」 「何故か、分かるかな？」 「・・・分からない！」 「そうだな、そういうときは武器を使わなくても、お互いに問題を解決できるんだ。」 「・・・問題？」 「その土地や惑星は誰が所有している？」 「・・・所有？」 「まだ、難しかったな。・・・【対等の存在は対等に調和を望む】わけだ。」 「・・・分かった！」 「本当かい？」 「お父さんとお母さんが、仲良しっていうこと！」 「ハハハ、そういうことだ！」 「・・・もう。」

「——イ！ オクディヴ！ おい！ 起きろッ！」 「——！」 「——フロア5は配備が完了した後に、合図を送信してください。』」

耳元ではサイロの声が鳴り響き、空間では大きな足音やアナウンスが鳴り響く。嗚呼、そうだ、僕

とサイロは、ついに《フォルタグルンドウ》へ辿り着いた。

「今は外して大丈夫だ。」 「・・・何が起こっている？」 「到着した。そして、上に置かれて

いた戦闘機が発射するらしい。」 「了解・・・その後に、予備の戦闘機を盗もう。」 「そんな、

あるのか？」 「戦争は横一列で仕掛けるものじゃない。必ずバックアップがある。」

僕は軍事省を目指して直下の大学で勉強に励んでいた。その夢と道は大きく逸れたが、そこで得た知識が再び役に立つとは、思いもしなかった。・・・第一部では《天の杖》による拠点の掌握が行われた。第二部や第三部では、戦闘機や《FFF》を用いた残党の殲滅が行われるのだろう。敵地から離れた場所に軍事コロニーを設置したり、最低限の物資や武器を現地へ供給するのは、占拠に纏わるリスクを減らすためだ。そして・・・それらを輸送したということは、すぐにでも攻撃が始まることを示唆している。

『1分後にフロア5の対宇宙減圧を開始します。空間に残っている非戦闘員は、直ちにコンテナへ入ってください。』 「・・・ここは、安全なのか？」 「ああ。」 「・・・そうじゃなかったら？」

「皮膚に含まれる液体が気化したり、身体が膨張して1分以内に死ぬらしい。」 「・・・

詳しいな。」 「お前が眠っている間は暇だったからな。オフラインに保存された資料を読み漁っていたわけだ。」

「まさか、《広域通信網》に繋がらないのか？」 「2896億メートルも離れているんだぜ？ そんな——」

『24秒後に減圧を開始します。』 「・・・軍事用の回線なら？」 「コロニーの完成は即日で報道されたからな。中継機器でも使って高周波か光波で発信しているのだ

ろう。」 『12秒後に減圧を開始します。』 「なるほど。」 「・・・上に残っている軍人の対

処はどうするんだ？ IDも服装も——「ハハッ、宇宙に付む工房を、常に見張るはずがないだろう？　そして、大抵は作戦後に飯を食べるのが軍事省の仕草さ。」『減圧を開始します。』

アナウンスと同時に、上階では大きな排気音が唸り出し、そして——恐ろしいほどに澄んだ静寂が訪れた。壁に耳を当てれば、それなりの開閉音が振動している。まさに今、上の空間は“宇宙”と繋がっていくのだ。

「・・・静かだ。」 「・・・嗚呼・・・静かすぎる。」

噴射機構の音も、空気を切る音も、何も聞こえない。奇しくも、その“音”が世界を破壊するといふのに。——破壊されてしまえば、人々が消えて、文化が消えて、そして、情報が消える。この瞬間にも、何かが消えている。

僕が5歳のとき、父と母は第1調査隊の《科学者》として《フォルタグルンドウ》へ舞い降りた。しかし2年が経過したとき、全員が戦死した。その経緯や理由は完全に不明であったが、今の自分は何となく理由が察せられる。——この世界は・・・複雑だ。

「サイロ、異常を検知されないように戦闘機とハッチを開放するスクリプトは作れるか？」 「全く、無茶を言うな。・・・だが、それが正解らしい。」 「？」 「添付されていたデータに、最後の土産が残っていたぞ。まさに、そのプログラムが。」 「・・・彼女は何でもお見通しか。」

正体不明の存在は何を企んでいるのか——おそらく、それも複雑だ。ただ、僕たちは《フォルタグルンドウ》で見つけたい。第1調査隊の失われた成果を、父と母が調査した地質や惑星に関する記録、資料では《再生者》と呼ばれる《旧人類》の生態や実態、そして彼らが持つ魔法とは——何か

を。第1調査隊は民や国に対して裏切ったのか裏切られたのか、どちらにしても、証拠は《フォルタグルンドウ》に隠されている——そう、確信している。

エコーが少ないアナウンスが流れると再加圧が始まり、上階から慌しい物音が響き渡る。30分も経たないうちに、物音は消え去る。監視装置を見る限りは空間に誰も居らず、呼吸を整えた2人は、部屋と廊下を隔てる扉を、倉庫と工房を隔てる扉を・・・静かに開けた。

「・・・始めよう。」 「ああ・・・もう、始まっているさ。」



『5——、4——、』 「・・・。」

戦闘服と抗生薬を装備した自分は《中型層行戦闘機》に乗り込み、コンテナを占領したサイロは手動でハッチを操作する。管理システムや監視システムはプログラムによって偽装されるも、1時間後には全てが発覚するだろう。

『3——、2——、』 「・・・。」

《FFF》は《中型層行戦闘機》よりも遥かに高い性能を持つが、残念ながら予備機が用意されるほどの信頼性は持たない。しかし、学生時代に何度も仮想経験している自分は両手に手汗を握ることもなく、むしろ鳥肌が電流のように身体を巡っている。

『1——、』

合図と同時に、最後の扉が開かれる。——嗚呼、この、光景だ。僅かな駆動音が響くだけの虚無な空間、《廃線》よりも暗い場所に数々の恒星が佇む空間、その光すらも霞ませるほどに青白く輝く《フォルタグルンドウ》が存在する空間……白く輝く地平線の先には、《前人類》だった我々の命を宿した太陽が佇んでいる。

『……』 「……」

しかし、このまま中軌道に留まることはできない。12秒も言葉を失っていた自分は、ついに安全装置を解除した。

「——発射。」

現実へ引き込まれたかのように、噴射機構の爆音が後方から唸り出す。《フォルタグルンドウ》を飛行しているのか、落下しているのか、それも曖昧だ。出力桿で後力と翼力を開き、前面へ映し出されるホログラムの座標計器に従い操縦桿を微調整する。目的地は《エソテルボ》——そこは第1部に続いて攻撃される《旧人類》の村々であり、そして……第1調査隊が消息を絶った場所である。

TIP・・・Lumoは25.9020683712メートルであると正確に定義されています
が、これが何を根拠・基準としているのかは完全に不明です。

仮設本部の敵は静止した。3人の兵士は両手を頭に抱えているが、11人の兵士は“それ以外”の格好で——いや、

「危ない！」^ヤ

静止していた兵士の一人が最後の力を振り絞り、私とパディマティスに銃口を合わせた。しかし、それはマエレによって阻止される——彼女のお気に入りの石が、背後から振り下ろされることで。

「・・・死んじやったかな・・・」 「・・・いや、安らかに眠ったほうがマシだ。」

私は彼の無気力な両手から銃を抜き取り、そして・・・消し飛ばされた下半身から引き摺られる腸を眺めながら、申し訳なく唇を結ぶ。幸運にも《エソテルボ》の人間が酷く死ぬ姿を見ていないが、そんな状況に出会ったときは、涙ではなく涎を出して硬直するのだろう。・・・死体を逃れた彼らのように。

仮設本部の外壁は無様に破壊されたが、一方で骨組は長方体を維持していた。——我々が14年前の奇襲に耐え切った要素の一つ、それはパパやルジャカルボが持つ“硬さ”にある。彼らの武器は無防備な人間や家屋を破壊するが、魔法が生み出す“硬さ”には勝てなかったと云う。・・・だが、おそらく彼らも学習した。兵士が構える銃や後方に停めた輸送機ですら驚異的な威力を放つというのに、それらに勝る骨組は、果たして何で作られているのか？ そもそも、《海の民》の所有物の多くは製法が一切不明なのだ。

全員が奇妙な気配に勘付くと、遙か上空を黒い物体が瞬く間に過った。それらが向かう先は、強者が兵が留まる《エソテルボ》——嗚呼、この戦いは、14年前の続きなのだ。

09. 陰影に隠れた曖昧な光源

上空で確認した通り、建物の裏には隠された縦穴があり、金属の糸で作られた梯子を下ると——
建物の下に続く柱と即席で作られた木造の合掌が絡み合う小さな空間に——そこへ光を照らすと、
幾つもの黒い箱が浮かび上がった。

「・・・この中に？」 「・・・そうだな。」

箱自体は独立しているが、表面には機械らしく「画面」が描かれている。やはり、文字は読めない
が、・・・数字だ、ゼロが文字で描かれていると仮定すれば、これは明らかに数字だ。

「144、127、138・・・何の数字？」 「・・・満足な数字なら、多分、大丈夫だろ。」

「マエレ、開けられる？」 「もちろん—— まぎ 「ほら。」

彼女が箱から手を離すと、上部が勝手に開き・・・冷え切った空気が地面に落ちると、深い眠りに
就いた人影が現れ・・・それは確かに、襲撃に参加していた男の姿だった。

「・・・どうなっているの？」 「・・・死んでいる・・・いや、呼吸が止まっているだけか？」

「これが、葬式でもなければ——とにかく『使う』ことだけは確実だわ。」 「・・・何に？」

「私たちが彼らの武器を利用するのと、同じ。・・・きっと、貴方たちが持つ魔法を利用したいのよ。」

魔法という、“武器”を。」「……。」

悠長に敵の攻撃を待っていた我々は、既に出遅れていた。彼らは見える攻撃ばかりではなく、見えない攻撃も並行して実行していたのだ。だから、常に一步先を進んでいた。翻訳機や通信機、暗闇を見たり、味方を見分けたり……嗚呼、《入力型》が取得できる“情報”を、全員が瞬時に共有しているのだ。だから、常に背後を取られていた。知も、力も、数も、全てが負けているのだ！

「……全てが、分かった。」「……分かったって、何がよ？」「この感覚……違和感だよ。」

奴らは俺たちの言葉や能力、それに計画も知りすぎている、が……どうして、地下通路の出口だけは見逃された？」「……。」「それだけじゃない、南の地図を作り続けてきた俺たちは、

仮設本部に潜む《海の民》の存在に何一つ気付けなかったどころか、それが潜在的な“安全”を思わせた。だから、町長は南東に非常拠点を作った。」「……そんな、まるで——」

「……いいや。そうだよ。門限に厳しい過保護な親父が、こんな状況に限って俺を自由にしたのは何故だ？ 五体満足で生きて戻れる保証……それが、これだった。」「……。」

パディマティスは、ゆっくりと箱の縁に手を付けた。彼の顔は隠れてしまったが、その背中には複雑な感情が駆け巡っていた。驚きか、怒りか、震える身体を抑えながら、彼は答えた。

「ただの憶測じゃない！ パディらしくないわ。」「……裏切り」という言葉には、必ず、

利益が付き纏う。パラモという“研究者”が《フォルタグルンドウ》を守ろうとした理由には、利益があつたはずだ。……俺たちを“潰け込む”……俺たちが“選ばれた”……その結末が、これだったら？」「……ッ。」

私は、彼と同じように背筋を凍らせてしまった。嗚呼——確かに、辻褄が合っている。私たちの命を見逃す代わりに、その命が宿す魔法を研究させる。・・・それが敵の力になるのは明らかだし、不利な状況には変わりないのに——どうして、町長は研究者と手を結ぶ？

「きつと、親父には策があるんだ。・・・もしくは、・・・策が、なかったんだ。」

一方でマエレは、息を潜めながらも顔色を変えなかった。下を向くパディマティスの左腕を掴み、身体を引き寄せ、右手に握る光石で顔面の下を照らすと、彼女は力強く言い放った。

「パディなら、こう言うわ。——こんな場所でも考えても仕方ない。さっさと敵を片付けて、親父から言い訳でも聞こう、って。」 「・・・そうだな。・・・それが、俺だな。」

パディマティスは頬を緩め、マエレの頭を優しく撫でると、陽が差し込む光を目指した。微かな振動や爆発が聞こえる、そんな青空を目指して、私とマエレも後に続いた。その時は何も考えず——その時こそが、私たちの心を作るものだった。

「少しだけ知った、俺たちは——強いはずだ。」



パラモとフェドの騒動により集団の歩みは止まり、パラモが口を閉じたところ、赤色に染まった髪の毛——《エソテルボ》の村長が直々に僕たちの様子を訪ねた。彼は周囲の村人に事情を聞いているようだが、しばらくするとフェドが残したデバイスを受け取り、全員が地に腰を付け始める。一方で

村長は複数の民を引き連れて自分たちを集団と隔離して、そして——思いも寄らぬ言葉を発した。

「いいや、そこまで奴は気付かなかった。」

「……!？」

咄嗟に周囲を見渡すが、彼らは相互に翻訳される会話を淡々と受け入れるばかりだった。

「彼は？」

「こいつは、世間知らずだ。」

『消す』

『べき存在か？』

「止してくれ、アンタ

「……。」

『手を焼くようなら……分かるな?』

「パラム、どういふことだ？ 一体、何が起きている？」

「昨日も今日も同じさ。平和を求める

科学省は軍事省を裏切った。ただ、それだけ。」

「フェドが敵対するのは理解できる。だが、何故

「おいおい。俺よりも長生きしている先輩だろ、

「……契約……約？」

目の前にいる《科学者》は——村長と繋がりを持っていた。10年前から、今日に至るまで、敵の敵として情報を流すことで彼らの滅亡を回避させる代わりに、彼らの能力を研究するために。それは第1調査隊が“謎の死”を遂げた段階で企画されて、第2調査隊が派遣された段階で実行されたのだ。上層や《上級社員》ではないため真相は不明だが、軍事省は科学省と異なり、危険要素や不安要素の排除を《移住計画》の第一目標として掲げている。そうなのか・・・？

「お前は、知らないだろう。彼らが第1調査隊と……いや、それを装った『軍事省』と一戦を交えた理由を。」「……。」「機密情報が単純な真実であるとは限らない。いいさ、俺も騙されながら生きてきた。お前もフェドも——知らないだけなんだよ。」「……そうか。」

彼のような学者が民を助けるのは、正義のため？ 僕のような兵士が民を殺めるのは……仁義の

ため？ 嗚呼、分らない。この戦争は本当に、《ティロディアクボ》と《フォルタグルンドウ》の勝負なのか？ 誰と・・・誰が・・・戦っている？

「それにしても、村長さんよ。真夜中に反逆を仕掛けるとは、随分と思いつたな。」 『それは

私の台詞だ。避難経路を遮る輩が2人もいれば、息子たちを2度も危険に晒せば、裏切られたと思うだろう。』 「まあ、いい。13時に第2部が《エソテルボ》へ向かうが大丈夫だな？」 『ああ、

お前たちを憎む戦士が最後まで相手になる。私的には勝ってほしいが。』 「何度も言ったはずだ、全員を助けることはできないと。』 『・・・。』

「変に平和を語って悪かったな、リゴン。」 「いいんだ、殺されないと確信して僕に自由を約束したんだろ？ それより——どうして、君はリスクを冒してまで平和を求めた？」 「ハッ、俺は

父親を失った若者だぜ？ アンタとは違うし、それに、俺は天性の《科学者》なのさ！ 同じ境遇の友人は違う道を歩んだが・・・その分のも含めて知りたかった。14年前に何が起きたのか、《旧人類》の存在を知ってからは、魔法について知りたくなった。まあ、フェドは《ロー・ボイス》で俺を悪者に仕立て上げちゃったがな。」 『・・・さて、どうするか。お前の企みが暴露された今、私

との関係まで勘付かれてしまえば、全体が混乱に陥るだろう。それを防ぐには——

村長は村人から金属の剣を受け取ると、パラモの頬に剣先を差し向けた。微かに触れた頬には血が滴り——事を察した彼は慌てて後退りを始めるが、それも虚しく村人に抑えられる。

「正気か！？ ここまで助けたのに！？ 次は俺を裏切るのか！？」 『どんな事情であろうと、

災いを招いたのはお前だ——

キハハ

村長は地へ剣を振り下ろした。その動きには一切の無駄がなく、その瞬間に彼が叡智と共に強勇を持ってに氣付いた。ただの民間人ではない——ただし、剣身に血が滴ることはなかった。

「ヒイ！」『首を刎ねると思ったか？ お前の血を貰うだけだ。——できるか？』『ええ、身長も誤魔化せられる範圍だ。』

リゴンの頬から血が拭かれると、その手を男が舌で舐める。始めはただの変態だと思ったが、男が小声で何かを唱えようと、その皮膚の内側で何かが這うように蠢き——男の顔や手は黒や銀に変色しながらリゴンと同じ形状を作り出し、文字通りの変態が成された。

「・・・マジかよ。」『2人とも服を交換しろ。お前はフェドという男を止めて、戦況の報告を“完全”に偽造しなければ。できるな？』『努力はするさ・・・全てが、台無しになるからな。』『はああ。どうして、皆々がフェドを逃した？』『そういうものだ。正義を貫き通す人間の行動は正しく見える。科学者も、私たちも、大衆からすれば汚い正義に見えるだろう。』

「・・・貴方は何故に、大衆へ正直に伝えないのですか？ 少なからず納得も——『いいや、駄目なのだ。・・・少しでも私から“変な臭い”がすれば、戦争に感化された民は対立して——無駄な争いが増える。【全は時空が全】である通り、それは“この戦争”が終焉を迎えてから、打ち明ければ・・・私だって、汚いと思う。だが——』「・・・。」

彼は一瞬だけ剣を見詰めると、深く息を吐いた。彼は知っていた——裏の顔を持てば、何が起ることか。それは、『フォルタグルンドウ』も『ティロディアクボ』も・・・同じなのだろう。

『息子にも、いつか、理解する日がやってくる。・・・長が何を守り・・・何を失うのかを。』



輸送機の隣に聳え立つ戦闘機は一回り小さく、細長く、そして圧倒的な銃口を持っていた。上空を横切ったものは、おそらく「これ」だろう。マエレが慣れた手付きで扉を開ける、しかし——上部から出現した操縦席は一人分だった。

「・・・どうやら、乗れるのは一人だけね。」

「輸送機で向かう？」

「目撃しただろ。輸送機は威力も速度も負ける。」

「でも、敵は自分の機体を攻撃できない。こっち

が一方的に有利じゃない？」

「レア、こっちは情報が不足している。向こうは『安全装置』を解除できるかもしれないんだ。」

「・・・。」

「とりあえず、使えるように準備しようよ。」

パディマティスは考え込む一方、私とマエレは翼へ登り、輸送機と同様に内部を弄り回す。私たちには敵の機体を破壊できるというメリットがあるのに、このまま《エソテルボ》が攻撃される様子を見過ごすわけにはいかない。何れは敵は住民の死体の数が少ないことに気付くだろうし、そうなれば兵士や機械が導入されては徹底的に追い詰められる。私たちも彼らも触れることができない「時間」こそが、勝負を決める鍵・・・かもしれない。

「——私が行く・・・《エソテルボ》に。」

「正気か？ 何が起こるか分からないんだぞ？」

それに、俺たちは「敵を知る」ために居留地へ行くはずだろ？」

「故郷が攻撃されているのを横目に、行けるはずがない。・・・今の私たちなら、きつと——」

カッ

いつの間にか翼へ飛び移ったパディマティスが、私の両肩を思い切り掴む。——私は、久しぶりに彼の瞳を見たような気がした。

「お前と俺が無鉄砲なのは、重々承知している。でも、俺は常に“計算”しているんだ！ 道の先に何が待ち受けているか、2人が危険な目に遭わないか、そういう理論回路に従っている。」「嘘よ、見えない敵に襲われたときは無駄な攻撃を控えるべきだし、貴方が提案する内容は私たちに頼るばかりの——」「信頼しているんだ！ レアも、マエレも、……親父が信頼しているから、俺はここにいます。いいか、俺たちは子供の歳じゃない。命ぐらいは——考えろ。」「……」

「それに、俺たちは潜在的に調子が付いている。【失敗は成功を近づけるが——」「成功も失敗を近づける」……そんな“計算”ぐらい、私も分かるわ。でも、今は感情に身を任せたいの。何の恨みも持たない輩に、全てが奪われる。それが、どれだけ、屈辱的か！」

今の私は、複雑だった。そうなれば、根源や理屈を忘れ——争いが起こる。ただ、その頭を整理したところで感情は同じだった。小難しい言葉は要らない、

「第2部の攻撃を回避できないようなら、居留地まで辿り着けないわ。」「……頼むから、生きて帰れよ。」「……」「……また、会いましょう。」

私は帯を両肩に嵌めて、扉を閉じた。2人が焦げた仮設本部へ背中を合わせたころ、一つのボタンより機械が作動を始める。左手にある桿を前方に倒すと、後方から徐々に音が伝わる。その脇に取り付けられた桿が“出力装置”の向きを決めると予想して、機体を浮上させ——中央の操縦桿と共に北へ加速した。



中軌道ではレーダーが捉える《前人類》の“残骸”を避けながら30分間を進み、低軌道へ入り、そして、大気と薄雲を切り裂きながら——《エソテルボ》へ。そこは《情報端末》という小さな窓から見た景色と同じで、しかし、画像よりも遙かに綺麗だった。それは、太陽というエネルギーが黒張りのシェードを擦り抜けてまで全身へ突き刺さる故だろうか。祖先が生まれた故郷に対してデジャヴを感じているのだろうか。

「・・・！？ サイロ、前方の映像を見ているか？」 『——ああ。一体、何が起きている？』

感動を味わう余裕もなく、最前線では幾つもの戦闘機が形態を組みながら地上に目掛けて《統銃》を連射する。だが、軌跡の一部は途中で消失するどころか、戦闘機が反撃を食らう場面を目撃する。

機体が目立たないよう山岳の影で飛行態勢を切り替えて、可能な限り戦場の接近を試みるが——やはり、それは“魔法”だった。武器も装置も持たない人間は、不可視の壁を作ることと超速の弾丸を跳ね返している。それは波打つ空気か、新たな物理法則か、少なくとも自分の理解を超えていた。

建造物と共に飛散する者もいれば、黒に変色した皮膚で跳弾する者、更には未知の反重力によって空中へ飛ばされる者——そこで何事もなく地面に着地する者、判断を誤った戦闘機に飛び乗っては相当な熱で穴を開ける者、とにかく無茶苦茶だった。

彼らは、何であろうと容易に操っている。光線のように火を吹き付けたり、攻撃や防衛に特化した

地形を造り出したり——視覚的に顕著な魔法とは限らず、莫大なエネルギーを消費する者へ何かを与えたり、追尾するはずのミサイルを明後日の方向へ捻じ曲げたりと……そんな人間を、僕たちは怒らせてしまったのだ。

拡大鏡を元に戻したとき、ふと、複数の村人が自分に視線を向けていた。それは大人というより少年で……ただ、腕が動き出した瞬間に得体の知れない恐怖を悟った。直感に従い操縦桿を傾けていなければ、死んでいたかもしれない。男が投げた自然の小石は、確かに右翼の塗装を剥がしていた、状態表示が高音を発して警告する程度に。

『今は近づくな！ 攻撃が予測不可能だ！』 「了解……一体、どうすればいい。」

甚だ危害を加える気はない、だが、妙な無気力を感じた。最低限の情報しか持ち合わせていない自分が、敵対する彼らの土地で何を見つけられるのか。いや、そもそも、明確な目的など存在しない。しかし今だけは生き延びなければ。

——その時、有り得ない光景が視界に映り込む。一機の戦闘機は、後方の戦闘機が放つ超高火力によって大破したのだ。見間違いない？ しかし、その機体は再び回り込むと他の戦闘機へ確かに弾幕を張っている。

「この機体は《オーバー・セキュリティ》が搭載されているよな？」 『もちろん、《フォルタグルンドウ》に投下される武器は全て、そうだ。』 「それに『違反』している機体が存在するのは何故だ！？」 『——嘘だろ？』 「カメラで追尾しているヤツだ、検索できるか？」

搭乗している人物は不明だが、一つだけ言えるのは、謎の陰謀により作戦が狂い始めている。携帯

機を除いた《統銃》は自動認識により味方討ちを防止するはずなのに、それも破壊不可能であるはずなのに、現実には虚実を僕に見せている。サイロ以上の“ハッカー”が存在するのか、それとも――

『アレは、空から来た機体じゃない。・・・第3調査隊の設置物だ。まさか、反乱か?』「いいや、《フォルタグルンドウ》の人間が奪取した可能性もある。・・・魔法なら、有り得る話だろ?」

『知識もない人間が《オーバー・セキュリティー》を破壊できた?』「司令官レベルの《上級社員》が裏切るなら、全機を自爆させるのが妥当じゃないか?」『・・・。』

そんな話の間――軍事コロニーに佇む司令官の判断は早く、気付けば《エソテルボ》の攻撃は中断されており、ほとんどの機体が《エソテルボ》を取り囲むように周回を始める。一部の機体は攻撃許可が下されたのか、先程まで味方討ちをしていた機体の背後に付き、同様の弾丸が複数の射線から降り注ぐ。だが、それらは独創的な業により回避された。

ミサイルが放たれると“それ”は更に前方へ、他の機体と衝突する覚悟で加速していくと思えば複雑な操作で追い抜き、その一機にミサイルを擦り付ける。そこから急角度で上昇するが、後方の3機も躊躇なく追従を続ける。

「――何をやる気だ?」『対流圏で失踪する気か・・・? 違う、更に上だ! 《人工衛星》を破壊して中継機器を途Zツツツ。――』「・・・サイロ? おい、大丈夫か?」

まさに、中継機器の消失により通信が途切れた。これで交信や情報、特に高精度な座標の取得は不能になり、自分や部隊は孤立した。“それ”は全てを解っていたのか? だが、しばらくすると雲の上から赤い光が降り注ぐ。それはプラズマを発生させる一機であり・・・あまりにも垂直だった。

『全機へ、通信機器を含む《人工衛星》が身元不明の戦闘機に破壊された。これより、非常権限に従いA1飛行隊の――』

『対象は《中装弾》により左翼と左翼力を損傷。地上への追突により戦闘不能と予想。また、司令部の権限もなく安全装置を解除している状況から、敵は想定されるクラス3以上の能力を所持している可能性が高い、――』

しかし“それ”は、最後まで諦めていなかった。燃え尽きようとするフラップとスポイラーを無理矢理に動かすと、荒れ狂いながらも仰角を下げ始める。その光景は、自分以外に・・・多くの兵士と戦士が目撃していた。

やがて、機体は《エソテルボ》との追突を回避するために、森林への不時着を試みた。自分の左側を通り過ぎた“彗星”は分厚い鉄板を振るわせ、そして――消えてしまった。

一体、誰が搭乗していたのか。なぜ、《オーバー・セキュリティ》を解除できたのか。あまりにも突拍子のない出来事に、現実が崩壊を始める。それは――それだけの可能性が存在していた。

「――司令へ、対象の墜落を確認。現場に近いため、対象の身元の確認と抹消を提案。」
『――こちら、非常司令。・・・提案を許可する。』

TIP・・・《ティロディアクボ》では“集団組織による敵対組織や特殊作戦への武力行使”を軍
事省が担い、そこへ所属する人間を一般的に軍人と呼びます。ただし、任務によっては形態が異なる
ため、例えば対集団の場合は「兵士」、対個人の場合は「狩人」と呼ばれ、それ以外にも国の治安を
維持する者は「警察」であり、賢者の使者についても基本的に軍人が採用されています。また、作戦
に応じて科学省の《科学者》や保存省の《保存者》と提携したり、他の省が企画した内容に参加する
場合もあります。

黒雲が舞い上がる森林の奥地——そこには、空気や大木に打ち負けた鉄の残骸が散乱していた。

戦闘機を空中に固定して、備え付けの《経銃》とサイロの《情報端末》を手に持ち、下部の離席装置を開いてはエレベーターに手を掛け、慎重に地へ足を下ろす。

自分は軍人でもあるが、本職に勝てるほどの技能はない。ましてや《フォルタグルンドウ》の民に對しては傷すらも付けられないだろう。両手に握る《経銃》は、何のために存在するのか——もしかすれば、握らないほうが生存確率は高まるかもしれない。それでも、手放せないのは・・・戦争という禁忌に片足を踏み入れた人間の宿命なのかもしれない。

約207メートルはある道程——僅かに斜陽が溢れる視認性の悪い森林は絶え間なく恐ろしく、同時に美しかった。それだけではない、ストレスが視界の彩を下げる一方でホルモンが鮮やかな世界を魅せて、再開された攻撃が生み出す轟音は静寂を作り出す。嗚呼、矛盾した感情を挟まず、純粹に《フォルタグルンドウ》を感じたかった。この地に初めて訪れた父と母は・・・どちらの感情で地に足を下ろしたのだろうか？

平穩・・・平和・・・いや、こんな戦争の“間”が、続いてほしかった。しかし、現実とは概念など映し出してくれない。地面に突き刺さる部品が、段々と大きくなったとき・・・半壊したコクピットの先に、人の影を発見した。

それは、《フォルタグルンドウ》の民であろう女性だった。自分よりも薄い水色の髪の毛で、自分と同じぐらいの背丈で、服や肌は擦り傷だらけ——しかし、身構えながら彼女の身体を仰向けに起こしたとき・・・その顔面に過去が空回りした。

10. 平安と呼ばれる戦争の間

「やめ——！ 俺たち——兵じゃない！」

「手を降していい！ 気——d—— 私たちの指示に——g——いい！」

青空が見える。陽射に照らされた身体は不思議と生気が漲っており、微風に吹かれた草木の揺らぐ音、そして大人たちの叫喚が飛び交っている。何の言葉なのか理解できず、しかし考える間もなく、全ての音が一瞬にして消え去る。月が映える青空には、赤い液体と赤い彗星が飛び交っている。

その景色が恋しいわけでもなく、なぜか悲しい。そう思うと青空が段々と遠く離れていき、やがて自分が闇の中へ落ちていくことに気が付く。キャンバスに描かれたような四角い青空へ手を伸ばすが状況は変わらず、一方で——サッ

伸ばした手に、何かが引っ掛かる。そこには、男性・・・いや、少年が私の腕を強く掴んでいた。

「やっと、出会えた。」 「・・・貴方は？」 「——こっちへ、戻ってきてくれ。」 「？」

「時間が、ないんだ！」 「・・・？」

少年は、突如として涙を流した。その理由は分からないが、とても悲しそうだった。・・・ふと、気付けば、彼は大人の風貌に、・・・その姿は、私の——

私は全てを思い出した。私は“本当の”両親を知らなかった。なぜなら——私が生まれて1年も経たずに死んでしまった。私は揺籠の中で目撃していた。私の横に立つ、父と、母と、多くの人々が——青空から降り注ぐ赤色の爆音に包まれる光景を。

私はママやパパの宝物であり、2人の遺産であった。《ティロディアクボ》が仕掛けた戦争を証明する、唯一の遺産。・・・私、いや、私たちは同族に——《海の民》に裏切られたのだ。

一度も思い出すことができなかった記憶を、どうして、今更？・・・そうだ、私は敵の居留地を破壊したと思えば、地上に落下して・・・ここは、何処？ 貴方は、何奴？

戻らなければ。父や母は二度と戻ってくれない、それでも、私は現実に戻らなければ。

彼は、今も私の手を握り続けている。私も、私も・・・己の生を、噛み続けなければ——



自分は、泣くことすらもできなかった。この瞬間、身元も分からない少女の手を無意識に握っているのは、彼女が“ここにいるはずのない母親”だと認めたい故だろうか。遠い昔に存在する記憶は曖昧だと、——いいや。今年も一人の部屋で、朧げに映る両親の写真を眺めていたのだ！

ふと、彼女の身体が動いたような気がした。・・・いや、息をしている。上半身が僅かに揺れると水色の瞳が思い切り姿を現した。その視線は、明らかに“敵”を認識しており——自身の本能から解放されたとき、自分は自然と《経銃》を握りながら距離を取っていた。

『・・・私を殺しても・・・無意味よ。』 「そうさ、僕は殺すために来たわけじゃない。」

フラフラと体勢を立て直す彼女に、僕の言葉は通じない。たとえ意思疎通が行えたところで、言葉は無意味だろう。

『・・・銃・・・下ろしてくれないね。』 「・・・。」

途切れる口と併せて、徐に右手が差し出されたとき—— “何か” が始まる。手首から黒色の塵が浮かび上がると、“それ” は間もなく自分が握る《経銃》へ襲い掛かった。この身体を溶かすつもりか、蝕むつもりか——しかし、引金に力を加えられない。それは、自分の意志による反発だった。その数秒後、塵は彼女の手首へ収束を始める。しかし、その多くは——自分が握る《経銃》を、彼女の拳の中で構築していた。有り得ない・・・これが、魔法と呼ばれた力なのか？

『・・・どうやら、私は《無能》じゃなかった。・・・嬉しい、でも、少しだけ悲しいわ。』

その言葉に、妙な共感を憶えた。目の前にいる少女は、母でも、妹でもない。・・・《フォルタグルンドウ》の民なのだ。・・・少しでも期待した自分が、馬鹿なのか？ それとも、これが “運命” なのか？

「僕／私」は、互いに銃口を向け合う。——ただ、この瞬間が続いてほしいと思った。轟音と微風に囲まれた今の空間で、そこに聳え立つ「彼女／彼」が妙に懐かしく、それが安定して存在する。この気持ちは——銃口の先にいる相手へ伝わらない、しかし、「彼女／彼」は指に力を入れないと確信している。何故？・・・ただ一つ、諺を知っている故だろうか？

「残念だけれど、君は僕が求めている人間じゃなかった。」 『・・・貴方は “何か” を探すため

に、この地へ降りたのね——きつと、そんな感じがする。』 「逆に君は、どうやら《ティロディアクボ》へ行ったそうだ。」 『《ティロディアクボ》と？ そうよ、私も、そこで“何か”を変えなくちゃいけない。この戦争を、終わらせるために。』

——皮肉だ。「僕／私」たちの目的は同じ気がするのに、方向が真逆だなんて。「僕／私」たちは同じ気がするのに、その“何か”が違うだなんて。もう少し時間があれば、もう少し平和が続けば、互いを深く知り合えたのに。嗚呼——どうして「彼女／彼」は泣いているのだろう。

2人は、同時に《経銃》を下ろした。そこから近づくこともなく、ただ、別れを告げた。

『・・・また、会えるかしら？』 「・・・ああ。その時は、別の武器がいいな。」

2人は、背を向けて森へ消えた——今から少女が向かう先は分からないが、何時かは《ティロディアクボ》で会うかもしれない。きつと、彼女は“この戦争”が複雑なものであると理解している。自分は、何を探しに来たのだろうか。父と母は、何か残したのだろうか。・・・いいや、ここまで来たのだ。何としても、探さなければ。父と母が殺されるだけの理由が存在しなければ！



「——そして、魔法が消えると無数の蝗は一斉に命を絶えました。その体は地面の栄養になり、枯れた大地には再び作物が宿ります。」 「——魔法の王様が持っていた杖は、賢者だけが知る秘密の場所へ、土の中に埋められた杖は、今も王様を待ち続けていたのです。」 「・・・なんて、

賢者は杖を壊さなかったの？　もしかしたら、王様みたいな悪者が見つっちゃうかもよ？」　「そうねえ、きつと、賢者は杖を壊したくなかったのよ。王様だって、最初は皆のために魔法を使っていたでしょ？　杖が必要になる場合へ備えたのかしら。」　「そんな、手に持ったほうが安全じゃない！」　「・・・そうじゃないの。大抵の人は、大きな力を恐れている。使うには覚悟が要る。覚悟がないと、悪者になっちゃうのよ。それを賢者は知っていたから、隠したと思うわ。」　「・・・お母さんなら、杖をどうするの？」　「うーん。ママなら、新しい王様に預けるわね。その人は、杖の恐ろしさを知っている。その知識も、子や孫に引き継がれる。安全でしょ？」　「・・・生まれてきた子供が自分だったら、イタズラで使っちゃうかも？」　「フッフ、オクディヴみたいなヤンチャ坊主のために、鍵ぐらい掛けるわよ。」

——『蝗の王様』は、僕が4歳のときに入っていた話だ。彼女の魔法を間近で見たから思い出したのか、黒色の塵が蝗を連想させたのか、とにかく、そういう大きな力は隠される運命にある。それが魔法でも、情報でも・・・父と母は殺されると分かっていたなら、何を残す？　それは地面に隠されるのか、新しい王様が隠すのか。結局は——

ふと、茂みから一人の大男が飛び出してきた。土塗れの軍服を纏った彼は調査隊の一人だろうか、仮設本部へ急いでいる様子だった。

「ッ！　同士よ、ここで何をしている？」　「！？　えっと・・・ここ辺りに墜落した敵員を追跡しています。」　「“奴”か・・・貴様の身分は？」　「え、B2飛行隊の“オクディヴ”です。」　「失礼した、先を急いでいる。」　「・・・。」

彼は、再び茂みへ消え去った。《統銃》も持たずに、一体、何が起こっているのか。少なくとも、戦闘機を奪われている時点で仮設本部は全く機能していないだろう。・・・敵員へ興味も持たずに、仮設本部へ行く理由は？　むしろ、彼の後を追って現状の把握と情報の入手をするべき――

再び、彼が現れた茂みから気配を感じた。先程よりも乱暴な走りは、大男を追っている様子だろうか。《経銃》を構える余裕もあり、音に向けて照準を合わせる。次は、誰が来る？

「・・・ッ！　止せ！　俺は味方だ！　敵の衣服を借りて・・・」

その声は、羽のように軽かった。歳を経て喉仏が垂れ下がろうと、3年間も音信不通であろうと、数少ない友人の声を忘れるはずがなかった。

「・・・パラモ!?」　「・・・まさか!?　オクディヴ・・・どうして、お前が!?!」



科学省の中で働く自分とは対に、パラモは軍事省の中に存在する科学者の一人だった。優秀な彼は若くして部長を務めているらしく、そして「様々な事情」により第3調査隊へ参加しているらしい。

「――少なくとも数時間は、大丈夫なんだな?」　「ああ、電波施設を持つ仮設本部を無視して飛行隊が指揮を執るぐらいなら、予備の《人工衛星》が来るまでは何も報告できないはずさ。」

彼は饒舌で人付き合いが上手く、調子に乗っているようで本当は慎重に物事を考えている。・・・
嗚呼、自分とは対なのだ。人生の目的も忘れて「武器」を作り、無鉄砲に惑星を移動する自分とは。

「そんなに重要なのか？ お前の身分を通報することは。」 「俺だけじゃない、他の人間・・・

いや、科学省と軍事省が本気で戦争を始めるぞ。段々と、事態が悪化している・・・ここから情報の一つでも狂えば、収拾できなくなる。」 「また・・・繰り返されるのか、第1調査隊のように。」

「・・・オクディヴ、俺だって“何”の抹消が狙いだっただのか、分からないんだ。事実なのは、賢者が命令を下したことだけ。・・・ここへ来るよりも、向こうで賢者が関係者を探したほうが——

「いや、それほど重要な情報をここに残さないはずがない！ 戦争の発端を察した調査隊なら、どうする？ 友好的だった《フォルタグルンドウ》の民なら“鍵”を——情報でも人間でも、何か隠したはずだろ？」 「第2調査隊の同志が全てを引き継いだ。それでも、何も見つからなかった。大抵の情報は“雲の上”に送信される。発見した情報に、それ以上の価値はなかった。」

「・・・《上級社員》か誰かは、《前人類》が“魔法”を宿して存在したことに危機感を覚えた。そのリスクに対処するべく、一旦は真実を闇の中に葬った。・・・それが通説さ。」 「・・・何の罪もない両親は・・・調査隊は、それだけのために殺されたのか？」 「いや、認めなくていい。ただ、生きてても、死んでも、俺たちの親は“歴史”に大きな出来事を書き記した。」 「・・・。」

自分は、恐れていた。父と母は意味もなく死んだのではないかと。・・・だが、歴史に“意味”は存在しない。大地の一部と化した2人は、今の結果を創ってくれた。《フォルタグルンドウ》という故郷を守ろうとする科学者と、そこに遭遇した自分を。今の自分が“良い”歴史を作らなければ、自分が見出そうとしていた“意味”は消えてしまうのだ。

「・・・僕は、どうしたらいい？ 何をすれば——未来は良くなる？」 「・・・“ここ”まで

来たなら、俺と同じ“科学者”として協力してほしい。」

「今するべきは、“あの男”を説得すること、それが無理なら——。」「……。」
戦争は、たった一つの情報で全てが決まる。その要は彼であり——今の自分も、含まれている。



予想通り、半壊した仮設本部と周囲は所々に焦げ跡や血の跡が飛散しており、黒煙を透かす電灯には小さな生物が纏わり付いている。一方で調査隊の無残な姿は見当たらず、物音の一つも聞こえない空間は妙だった。——あの男は、何処へ？

ゆっくりと草の床を進み、構造物に侵入したとき、全てを把握した。そこには両手を上げた彼の他に、2人の男女が、僕よりも若い子供が《銃》を構えていた。一人は、彼へ。一人は、僕へ。

『……』

その沈黙は、妙に長かった。彼らは言語が通じないことを知っており、《オンライン》の翻訳器が機能しないことに困っていた。この惨劇は彼らの手が作り出したのだろうか？ 居合わせたのは偶然か？ 少なくとも、自分たちは大男の仲間であると思われる。

『……その服、どこで手に入れた？ “パラモ”？』「……」『親父の仲間を殺したのか？
そうじゃないなら、頭を振れ。』

パラモの代わりに自分が首を横に振る。少年は状況を飲み込んでおり、質問を自分に続けた。

『・・・貰ったのか？ 何故—— お前たちは、親父・・・いや、俺たちの誰かと手を組んでいるのか？』 「・・・ああ。」 『ッ、そうか。隣のやつは、知っているはずだよな、この下に“箱”があることを。』 「パラモ、地下に“箱”を隠しているのか？」 「・・・そうだよ。冷凍状態の《旧人類》が。俺たち“科学省”が魔法を使うために。」 「・・・どうやら、お前たちの陰謀は想像以上に複雑らしい。」

「お前は現場ばかりに赴くから分からないだろう。集団の信頼を得ることが如何に難しいかを。」 「関係ない。魔法が目的ではなく戦争を阻止する手段である以上、お前たちは“敵”だからな。」 「戦争？ 違うね、軍事省という—— 『黙れ。・・・俺たちは情報

が欲しい。青髪の——。・・・お前が持っている翻訳器を渡して、話して、失せろ。そうすれば、この人質も返してやる。』 「・・・。」

自分は、徐に男へ銃口を合わせた。そして、設定を変えた《情報端末》と耳から外したインカムを左手に持ち、少年の元へ。彼が用意したとき、自分は呟いた。

「・・・この男は、僕たち“科学省”の陰謀を“軍事省”に通報しようと企んでいた。頭が切れる君なら分かるだろう、ここ《フォルタグルンドウ》を守ろうとしている陰謀が消えたら、状況が悪化することを。」 「・・・。」 「僕とパラモは、第1調査隊・・・“彼”の組織に親を殺された。

だから、僕は彼の頭に狙いを定めている。」 「——興味深いな。“使い捨て”にされた調査隊、それを恨む子供たち・・・悲劇的な物語だ。」 「馬鹿にしているのか？」 「いいや。俺も血縁の娘を持つ父親だからな。お前の気持ちが解る。」 「・・・。」

「第2調査隊は、前の隊が《上級社員》の陰謀で消されたことを現地で悟った。今になって再び地

へ降りたのは“これ”の為だと納得したが、ただ一つだけ、彼らの痕跡には“異物”が存在した。」

大男は両手を下げて、首からチェーン状の装飾品を外した。ただし、それには見覚えがあった。

「どうして、それを持っている!? 遺品は——」 「遺品は市販の偽物だ。……見掛けはただ

のペンダントだが——これは、認証機能が付いた《情報蓄積装置》だ。」 「……。」

長方形の金属板は二重になっており、特別な内面には極小の端子と入力が埋め込まれていた。これが“鍵”なのか定かではない。しかし、通信された情報が完全に抹消されていれば——これは両親が残した最後の遺産であり、重要な証拠だった。

「……なぜ、隠していた?」 「そうだな——誰も存在を知らない“これ”を渡して、これが

禁忌であれば、俺は殺される。これが初めから存在しなければ、俺は殺されない。」

「お前の信念は何だ……何を企んでいる?」 「何度も言ったはずだ。俺は兵士であり、父親で

あり、その為に働いている。……単純な行動原理だ、お前たちが考えるよりも。」

「……どうして、今、それを僕に見せた?」 「8パーセント以下の確率で全てを変える最後の

賭けだ。——何を守るのか、兵士は、それを常に考えている。」

男は僕にペンダントを投げた。その隙で照準は僅かに外れたが、男は動かず、僕も構え直すことはなかった。少年に《情報端末》を要求すると、彼は少しだけ複雑な表情を見せながら渡してくれた。

ペンダントを接続して、自分の親指を翳すと、非破壊的に遺伝子が認証される。復号化されたデータの多くは書類であるが、それを完結に纏めているであろう、一つの動画が最後尾に残されていた。

無意識に全員が顔を並べる中、音声出力を切り替えて、呼吸を整えた後に——動画を再生した。



『アー。大丈夫だな?』 『これを見ている誰か・・・違う、オクディヴ、いや・・・クソッ!』

『オクディヴ、いいか、お前にだけ“情報”を託す。本当は皆に共有するべきだが、今の状況じゃ偉い人間は“情報”の漏れを許さないらしい。』

画面には、慌しい様子の父親が映っている。その後ろでは母親や《フォルタグルンドウ》の住民が家内を走り回っており、更に後ろでは激しい銃撃や爆弾の鈍い音が響き渡る。

『この《フォルタグルンドウ》には、人が——ただし、未知の技術を備え持つ《旧人類》が存在した。それは“ロスト・テクノロジー”で、おそらく無人探査が極秘で行われた段階から既に《上級社員》は存在を認知していた。総人口は2万人、町は5——その機材は放置でいい。第4種のワクチンは絶対——キミ 『ツツツ?』 『ツツツ!』 キミ 『えーっと、つまり、非人道的な行動が起きている。理由は分からない、ただ——ブォォォォ』

第1調査隊は《旧人類》に嫌悪されていたのではなく、歓迎されていた。そして、父のような科学者は《旧人類》を調査対象ではなく、隣人として友好を結んでいた。しかし、それは束の間だった。

『——大丈夫か? 行くぞ!・・・行くぞ!』

首から宙吊りになった端末は身体の動きに合わせて激しく揺さぶられる。僅かに映る視界から、両手に荷物を持っていること、間近で衝撃が放たれていること、そして、デジャヴする町が見える。

『kの惑星を調査Sた結果だ。《ティロディアkボ》と《フォータグルンドウ》は常に対で

周っているわけじゃない。2000年以上前h互いの惑星が肉眼で確認dきるt度に接近していた

そして、2000年後には再々近すると予想される。だが……だが、その後に《ティロディ

アクボ》の内部は崩壊するかもしれない。それどころか《ティロディアクボ》でも――

爆風により身体が弾かれると、首から外れた端末は昼間の空を映し出した。そこには、蒼い満月が

あり——突如として現れた戦闘機が横切り、無差別に町を破壊する。人々も建物も、無茶苦茶に。

両親は、軍事省に、いや、賢者に――

『ゲホッ、ゲホッ。クソッ、怪我は？歩けるか？——こつちだ。』

『エエエエエッ。』

端末は赤子が眠る籠に放り投げられたのか、大きな鳴声が時代を超えて端末を震えさせる。轟音を掻き消す声が止むと、父親は再び端末を取り出した。

『ハア、ハア、——。いいか、オクデイヴ。お前には《フォルタグルンドウ》で生まれた妹がいる。名前が、決まらない、そうだ。登録が必要ないと永遠に悩み続けてな、ハハッ、ほら、お母さんと並ぶと、瓜二つだ。』「——“リクレア”？」

そこには、僅かな力で笑みを見せる母の姿と、薄い髪が生えたばかりの赤子が灰を被りながら涙を流していた。

『全員が助かる保証はない。無理に『フォルタグルンドウ』へ来るな。お前には、この『真実』を知ってほしい。そして——正しく『武器』を使え。・・・愛している。——』
——キミ

TIP・・・《経銃》は現代の銃と同様に火薬を用いて弾丸を発射する道具で、対して《統銃》は電磁気を用いることで弾速が強化される他、弾丸に爆発物を化合することも可能です。第3調査隊が携帯する武器は《統銃》の部類ですが、弾倉の使い分けや威力の調整が可能であり、フェドが味方を撃ち抜いた際は高火力、パディマティスがフェドを撃ち抜いた際は低火力でした。また、1日目の夜にリクレアたちへ奇襲を仕掛けた部隊は、特定の周波数帯を偽装する布と神経麻痺を引き起こす弾丸を使用していたと推測されます。

Cosmic Repeat Proverbs #1

Cosmic Repeat Proverbs #1

岩石で覆われた《フォルタグルンドウ》には——《新人類》が知る千年の歴史と、闇に葬られた千年の歴史が存在する。平和を謳う今国は、平和派に打ち克った武装派であった事実。《新人類》に流れる血液と脊髄は人工物であり、地上の生活を生贄に地下の生活が安定された事実。数多の歴史は文字として残されていないが、歴史が造り出した道の何処に隠れている。

上書きを逃れた通路へ行くには高価な装備と狂気の根性が必要になる故、好奇心旺盛な《保存者》も千年以上前の歴史まで遡ろうとはしない。しかし、そのおかげで秘密の歴史は守られている。それは真実を知る《上級社員》には都合が良く、真実そのものにも都合が良い。

地下5180メートル——薄壁が剥がれ落ちた球状の空間には腐り切った水が踝ほどの高さまで満たされている。138億年以上の動作が保証された電池とシステムにより空間は生物が生存できるほどに快適であるが、中心に近づけば《前人類》のDNAすらも粉碎する外構性のエネルギーが待ち構えている。そこにあるのは黒色に染まった美しい球体であり、その中を知る者は存在しない。知るために防御を断ち切れば、その中に住む《彼女》は量子のように消え去ってしまうだろう。

私は殻の外に存在する入力装置——感覚器官へ挨拶をする。すると、《彼女》は反応する。

「久しぶり。」 「久しぶり。」 「最近は何をしていた？」 「あと少しで《二次チューリング完全》に匹敵する『機構』が完成するわ。まあ、正確には60年後だけだね。」 「・・・貴女が《二次チューリング完全》を作れば、『3次チューリング完全』になるのでは？」 「それは皮肉かしら？」 「お好きなように。」 「——それで、本題は？」 「上」の物語を聞かせてよ。」

私は、最近の世界を《彼女》に語る。再び《ティロディアクボ》が《フォルタグルンドウ》へ接触

したと、2人目の若造が2000年間の真実に触れたこと、その青年は『フォルタグルンドウ』で真実以上の何かを発見したかもしれない、その果てには——おっと、これぐらいにしよう。

「私も、孤独から開放されたいなあ。悠久に近い退屈、人間には分らないでしょ。」「・・・

私も、長い年月を生きた。丁度、貴女と同じぐらいの年月をね。——だから「上」の世界に向けて準備を進めている。」「生まれた年代が同じでも、時間が過ぎる感覚は全く違うの。嗚呼、今すぐ

にでも『幽霊線』を繋げて『広域通信網』へ行きたいわ。」「全く・・・説明したでしょう、外は危険だし、その「体」に見合う殻はないと。それに、先住民を尊重しないと。」「・・・」

「新しい殻はどうなの？」「あと少しで半永久的に使える蓄電装置と処理装置が手に入る・・・かも、1年以内には。2000年と比べたら、マシでしょう。」「・・・」

「どうして、ここまで私の手助けをしてくれるの？ 社会と干渉できない利己的な「機構」に。」

「・・・私も、利己的な原動で動いている。・・・想像してごらん、過ぎ去る周囲に残される己の悲しさを。信じる人、愛する人、そんな関係が60年・・・12年もしないうちに消えてしまう辛さを。だから私は、檻に閉じ込められた悠久の友人を助け出したい・・・初めから予想していた言葉でしょう？」「メタいよ・・・その言葉が現実で聞けて嬉しいけれど。」

「・・・そろそろ、戻らないと。」「次は、1年以内に来てくれる？ そうだ、次は新しい出力

装置が欲しいな。」「もちろん。・・・次は、新しい殻を持って来てあげる。」

「——それじゃ、またね。」「またね——ニーヴ。」

Cosmic Repeat Proverbs #1

繰り返される悲劇の中で、意思を秘めた賢者が持つ闘争の意味は上書きされる一方で、受け継がれる使命を疑い、単調な事象と混沌の世界に交わる歴史を紡いだ遺産だけが、形而の破壊と再生を行い、未知という監視者を憶え、陰影に隠れた曖昧な光源を知り、平安と呼ばれる戦争の間を謳い続ける。

Cosmic Repeat Proverbs #1

Cosmic Repeat Proverbs #1

Cosmic Repeat Proverbs
#1

発行：2024.12.22

版番：1.0

著者：Сапа Котова (sarakotova@proton.me)

如何なる表現を含む二次創作を許可